

第4章 遺物

1. 出土遺物の分類

苗畑4～6号窯出土土器のほとんどは灰釉陶器であるが、これ以外に緑釉陶器、緑釉陶器素地、須恵器、土師器、瓦の各種の土器がある。

灰釉陶器は碗・皿、各種の壺類を中心としたもので、基本的に灰釉を施釉することを前提とした一群の器種である。碗・皿の一部には明らかに無釉のものが認められるが、各器種は形態的にも独自のものであり、施釉の有無のみを基準に灰釉陶器と規定しているわけではない。焼き上がりの発色は灰白色に近いものから青黒色に近く須恵器のようなものも見られる。

須恵器は坏・甕・鉢を中心としたもので、灰釉を施釉しないことを前提とした一群の器種であり、基本的に灰釉陶器と共通する器種はない。坏や甕の一部には釉がかかったように見えるものもあるが、意図的な施釉と断定できるものはなく、すべて降灰による自然釉と考えられる。焼き上がりの発色は灰色～青黒色に近いものがある。

緑釉陶器・緑釉陶器素地は碗・皿を中心としたもので、鉛釉を施釉することを前提とした一群の器種である。緑釉陶器は極めて出土数が少なく、1点のみの出土であるが、緑釉陶器素地は一定量が出土している。緑釉陶器は施釉以前の状態の出荷されているものが消費地で確認されており、この段階のものを緑釉陶器と区別するために緑釉陶器素地とした。

土師器は甕が出土している。これは清郷型甕と称されるもので、灰釉陶器窯で生産されたものではない。

瓦は少数であるが丸瓦と鬼瓦が出土している。

各種類の細分は小器種のカテゴリ分けを行って過ぎず、詳細な型式分類までには至っていない。これは、例えば灰釉陶器碗等の具体的な型式分類では、各属性および法量等の定量的な分析と異なった型式との比較作業が必要不可欠なため、今回報告する以外のすべての窯跡の資料を提示した後に行う必要があるためである。そのため、出土遺物の詳細な型式分類や出土状況の分析は、第3分冊（『二川古窯址群（Ⅲ）』）でまとめて行うことにした。

以下では種類ごとに、大器種の説明を行う（第2表）。なお、小器種の詳細については、第3表と第26～30図に示している。また、実測図を掲載した各窯跡から出土した個々の土器のデータは遺物観察表に示している（第6・7表）。

実測資料の選出は以下のような基準で行った。

- (1) 口縁部から底部まで図上復元できるものについては、大きく歪んだり、融着している資料以外のできる限りについて図化した。
- (2) 個体数の少ない器種については図上復元できない小片でも図化した。
- (3) 接合資料については、番号を付けて取り上げてきたもの（出土位置の明らかなもの）についてはすべて図化した。

第2表 主要器種一覧表

種類	大器種	小器種	4号窯	5号窯	6号窯	種類	大器種	小器種	4号窯	5号窯	6号窯	
灰	碗	大碗		●	●	緑釉陶器	皿	段皿		●		
		中碗		●	●	緑釉陶器素地	碗	碗		●		
		碗	●	●	●			稜碗		●		
		稜碗		●			皿	皿		●		
		深碗	●	●	●			稜皿		●		
		小碗		●				段皿		●		
		無台碗		●			壺	小瓶		●		
		小杯		●				坏	坏	●	●	●
	釉	皿	皿	●	●		●	須	蓋	蓋		●
			段皿	●	●	●	盤		高盤		●	
稜皿			●	●		有台盤					●	
折縁皿				●		鉢	鉢			●		
耳皿				●			深鉢				●	
無台皿				●			足高鉢			●		
陶	蓋	蓋		●	●	片口鉢		●				
		壺蓋		●		壺	広口壺		●			
器	壺	長頸壺	●	●	●	恵	陶白	陶白		●	●	
		短頸壺		●	●		甌	甌		●		
		平瓶	●	●	●		香炉	香炉		●		
		浄瓶			●			火舎		●		
		手付瓶		●			甕	甕	○	●	○	
		小瓶		●				土製品	陶錘		●	
		唾壺		●			窯道具			●		
		片口鉢		●			土師器	甕	甕		●	
	鉢	土製品	鉢		●			瓦	瓦		●	
			陶錘		●				鬼瓦		●	

●は実測図を掲載したもの、○は実測図を掲載していないが存在するものである。

A. 灰釉陶器 (第26・27図)

灰釉陶器の大器種には碗、皿、蓋、壺、鉢、土製品の6器種がある。これらは灰釉を施釉することを前提とした器種であるが、無釉のもの見られる。

碗類 碗類には大碗、中碗、碗、深碗、稜碗、小碗、無台碗、小杯の8器種がある。これらのうち、大碗、中碗、碗については器形が相似形をしている。大碗としたものについては鉢として分類されている場合もあり、機能の点では鉢として使用された可能性も十分考えられるが、ここでは器形を優先して大碗とした。

深碗は口径に対して器高がやや高くなるものであるが、K-90(黒笹90号窯)～O-53(折戸53号窯)段階と考えられる苗畑5号窯では出土点数も少なく、安定した形態をしていない。H-72(東山72号窯)段階と考えられる苗畑4号窯の深碗は高台が高く、器形も安定し出土量も一定量が出土しており、確実に深碗という器種を設定できるが、O-53段階のものは碗あるいは中碗の中に含めておくべきものかもしれない。

稜碗は体部に明瞭な稜があるものであるが出土量は少ない。この器形は基本的には緑釉陶器の器形

と考えられるが、高台の形状が異なっており、緑釉陶器の素地ではなく、当初から灰釉陶器として作製されたものである。

小碗は径の小さな高台が付いたものが1点出土しているだけである。器形の点では蓋になる可能性もあり、今後資料の増加を待って再考したい。

無台碗は口径が小さく、器高が低く、底部糸切り未調整のものであり、少数が出土しているに過ぎない。

小杯は小さな杯形の器形をしており、底部は糸切り未調整である。これも1点のみの出土であり、特殊なものである。

碗類では特殊器形のを除けば、深碗がO-53段階に存在するのかが問題となる。

皿類 皿類には皿、段皿、稜皿、折縁皿、耳皿、無台皿の6器種がある。皿は皿類の中では最も多く、器高にはある程度のばらつきがあるが、口径のばらつきは小さい。段皿は体部内面に明瞭に段があるものである。稜皿は体部に明瞭な段を持ち、稜から上の口縁部が直線的に延びるものであり、稜碗と同様に緑釉陶器の器形を模倣したものと考えられる。折縁皿は体部に緩やかな稜を持ち、稜から上の口縁部が外反しながら延びるものである。耳皿は小型の皿の体部を上方に折り曲げたものであり、高台の付くものもある。無台皿は丸底で体部がわずかに内湾しながら立ち上がるものであるが、出土量は少なく、特殊なものである。

蓋類 蓋類には蓋と壺蓋の2器種がある。蓋は環状摘みを持ち、端部を折り返さないものと、摘みの形状は不明（宝珠摘みの可能性が高い）であるが端部を折り返すものがある。

壺類 壺類には、長頸壺、短頸壺、平瓶、浄瓶、手付瓶、小瓶、唾壺の7器種がある。長頸壺、短頸壺、平瓶、浄瓶は須恵器からの系譜を引く器種であり、手付瓶、小瓶、唾壺は灰釉陶器の特徴的に見られる器種である。

鉢類 鉢類には鉢と片口鉢の2器種がある。鉢としたものは底部しか確認できず、あるいは片口鉢の底部になる可能性もある。

土製品類 土製品としては陶鍾の1器種がある。

B. 緑釉陶器（第28図）

緑釉陶器と緑釉陶器素地は施釉の有無の違いのみで、その他の型式学的特徴は同じである。緑釉陶器・緑釉陶器素地は今回報告する窯跡では、苗畑5号窯のみから出土している。

緑釉陶器 緑釉陶器は苗畑5号窯から段皿が1点出土している。この他には大沢A-2号窯等からも出土しているが、今回の報告には含まれていない。

皿類 皿類には段皿の1器種がある。

C. 緑釉陶器素地 (第28図)

緑釉陶器素地の大型器種には碗、皿、壺の3器種がある。緑釉陶器素地は水簸されたような精選された胎土であり、すべて体部がヘラミガキされている。

碗類 碗類には碗、稜碗の2器種がある。両者とも体部の形状はそれぞれほぼ一定しているが、高台の形状に違いが見られ、細分可能である。

皿類 皿類には皿、稜皿、段皿の3器種があるが、出土点数が少なく詳細は不明である。

壺類 壺類は小瓶の底部と考えられるものが1点出土しているのみである。

D. 須恵器 (第28～30図)

須恵器の大型器種には坏、蓋、盤、壺、鉢、陶臼、甌、香炉、甕、土製品の9器種がある。これらは施釉を前提としない器種であり、基本的には器形そのものが灰釉陶器等とは異なった独自のものである。

坏類 坏類は坏の1器種のみである。坏は灰釉陶器出現以前の須恵器窯で坏あるいは無台碗と称されているものの系譜を引くものである。二川窯ではほとんどの窯跡で出土し、H-72段階まで確認できるものである。

蓋類 蓋類は蓋の1器種のみである。出土点数が少なく詳細は不明である。

盤類 盤類には有台盤と高盤の2器種がある。有台盤は直線的に延びる体部と高い高台が特徴であり、高盤は裾広がり高い脚が付くものである。両者とも灰釉陶器出現以前の須恵器窯からの系譜を引くものである。

壺類 壺類には広口壺の1器種がある。法量には大小があり、製作技法も異なり、細分できる可能性が高い。

鉢類 鉢類には鉢、深鉢、足高鉢、片口鉢の4器種がある。鉢は口縁部のみであり、高台の有無等の底部の形状が不明であるが、口縁部は内側に短く折れるものがあり細分できる可能性が高い。深鉢はバケツ形の体部で大きな平底になるものである。足高鉢は直線的に延びる体部に高い高台が付いたものである。片口鉢は平底でわずかに内湾した体部のものである。

陶臼類 陶臼類には陶臼の1器種がある。底部は糸切り未調整で櫛状工具による刺突が見られるものがある。法量の点では細分できる可能性が高い。

甑類 甑類には甑の1器種がある。甑は底部に6～7個程度の丸い穴を持つものと、底が抜けた状態で終わるものがある。後者については甑ではない可能性も考えられる。

香炉類 香炉類には香炉と火舎の2器種がある。香炉は透かしのある高台のみが1点出土しているが、香炉ではない可能性もある。火舎は脚のみが出土している。形状から火舎の可能性が高いと推定している。

甕類 甕類は甕の1器種がある。底部は平底であるが、口縁部外面がハケ調整のものが少数あり、製作技法の点からは細分できる可能性が高い。また法量の点でも明らかに大小がみられ、細分できる可能性が高い。

土製品類 土製品には陶錘と窯道具がある。窯道具としたものは用途不明のものであり、とりあえず窯道具としたが別の器種である可能性も十分考えられる。

須恵器では、その他として、脚のみで器種不明のものが数点出土している。

E. 土師器 (第30図)

土師器の大器種には甕の1器種があり、小器種も1器種のみである。出土している土師器甕はいずれも清郷型と呼ばれるものである。口縁部はくの字に折れるもので、清郷型の中では古いものである。

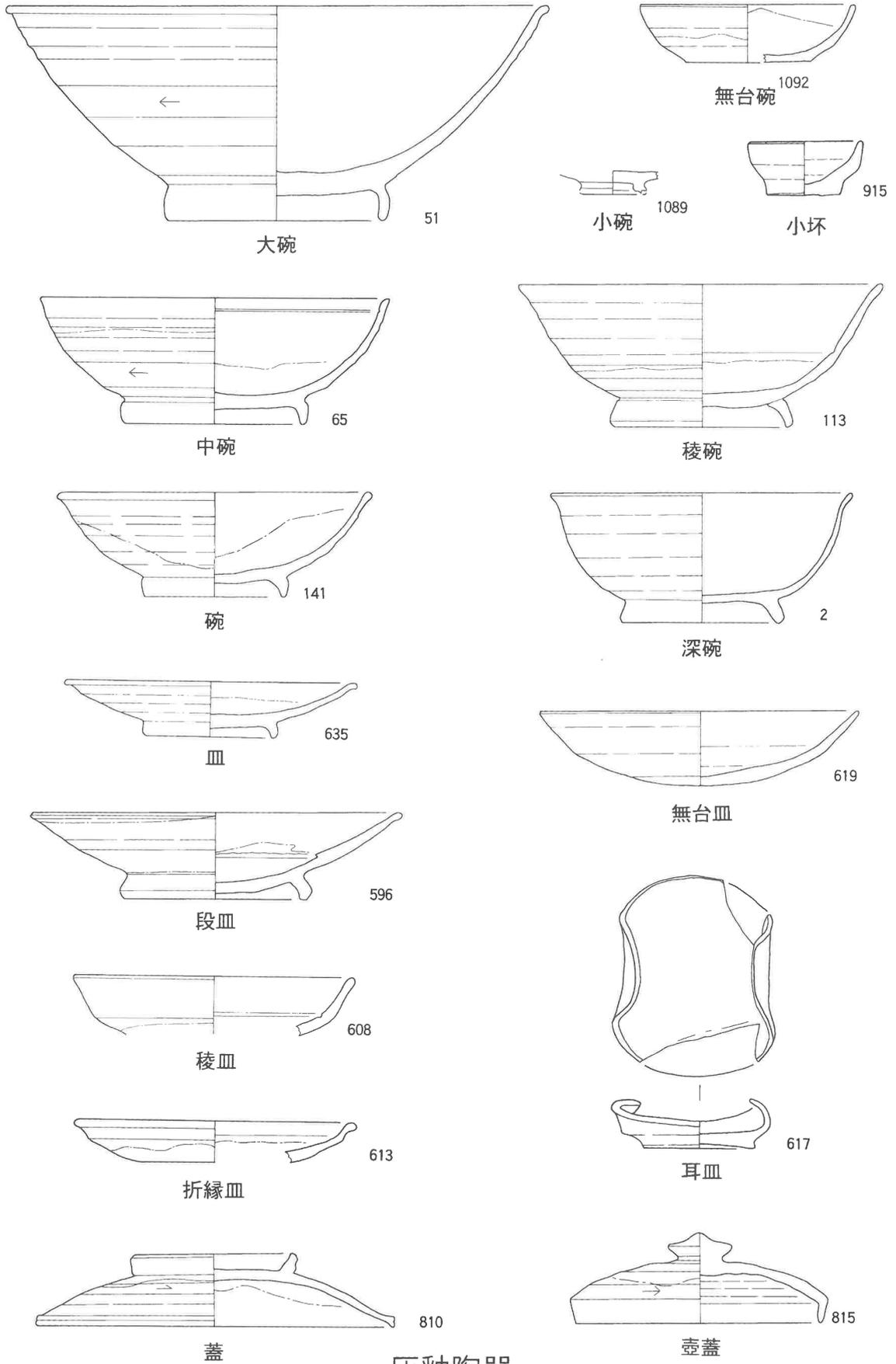
F. 瓦 (第30図)

瓦も大器種には瓦と鬼瓦の2器種がある。瓦は丸瓦の狭端面側の小破片が1点出土しているのみであり、おそらく玉縁付きの丸瓦であろう。

鬼瓦はほぼ上半部が推定できるものと破片2点が出土している。

第3表 小器種一覧表

種 類	大器種	小器種	図版 番号	特 徴
灰釉陶器	碗	大碗	51	器形は碗と相似形で、大型にしたものである。高台は高さが14～20mmあり、いわゆる三日月高台である。法量は、口径250～300mm、高さ80～110mm程度である。調整は底部から体部下半にかけては回転ヘラ削り、体部は外面にロクロ目が残りに、内面は平滑でコテが使用されたものが多いが、ロクロ目が残っているものも見られる。施釉は不明なものが多く、無釉のものがある。
灰釉陶器	碗	中碗	65	器形は碗と相似形で、一回り大きくしたものである。口縁部は僅かに端反りしており、内面に沈線があるものや輪花が4ヶ所入れられているものがある。高台は高さが10～13mm程度であり、いわゆる三日月高台のものが多い。法量は口径170～200mm、高さ60～70mm程度である。底部調整は回転ヘラケズリ、ナデ、糸切り未調整が見られる。体部は外面はロクロ目残り、内面は平滑でコテが使用されたものが多いが、ロクロ目が残っているものも見られる。施釉はハケ塗り、無釉のものが多いが、漬け掛けも少数見られる。
灰釉陶器	碗	碗	141	器形はいわゆる碗形のもので、口縁部は僅かに端反りしている。高台は高さが8～10mm程度のもので多く、いわゆる三日月高台に近いものから、低く三角形に近いものまでである。法量は口径120～180mm、高さ40～60mm程度である。底部調整は回転ヘラケズリ、ナデ、糸切り未調整が見られる。体部は外面にロクロ目残り、内面は平滑でコテが使用されたものが多いが、ロクロ目が残っているものも見られる。口縁部内面の沈線は殆ど見られない。施釉はハケ塗り、無釉、漬け掛けすべてが見られる。底部は糸切り未調整、施釉は漬け掛け、法量の小型化したものが時期的に新しい傾向にあるが、現状では十分に分離できていない。
灰釉陶器	碗	稜碗	113	器形は体部下半で明瞭に稜を持つもので、稜の下は僅かに内湾、上では僅かに外反している。高台は8～12mmあり、いわゆる三日月高台に近いものである。法量は口径160～200mm、高さ50～70mm程度である。底部調整は回転ヘラケズリである。体部は外面はロクロ目残り、内面は平滑でコテが使用されている。施釉はハケ塗り、無釉のものが見られる。稜碗は出土数が少なく、基本的に緑釉陶器の模倣形態と考えられる。
灰釉陶器	碗	深碗	124	器形はいわゆる碗形で、体部が深くなっているものである。口縁部は僅かに端反りしており、輪花が4ヶ所に入れられているものがある。高台は高さが10～14mmで形は碗と基本的に同様である。法量は口径140～170mm、高さ60～70mm程度である。底部調整は回転ヘラケズリ、ナデも見られるが、糸切り未調整が多い。体部は外面にロクロ目残り、内面は平滑でコテが使用されている。施釉はハケ塗り、無釉もあるが、漬け掛けが多い。

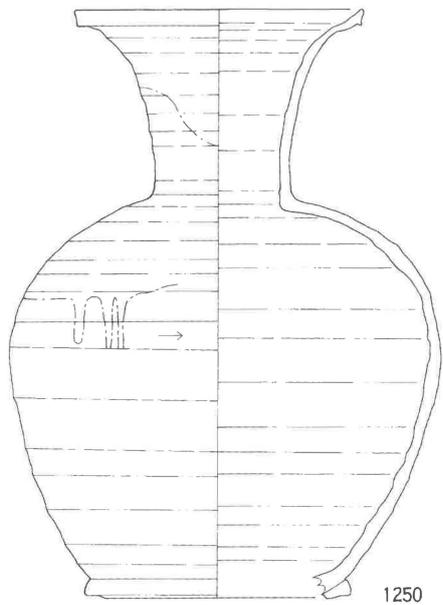


灰釉陶器

第26図 灰釉陶器小器種一覽図-1

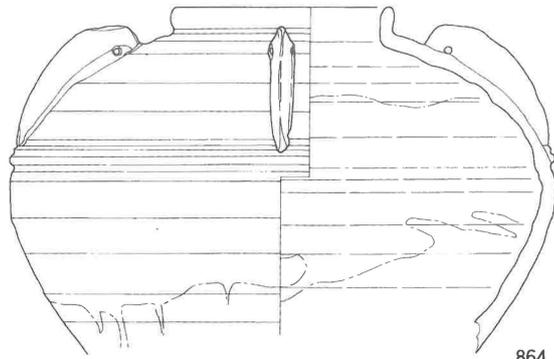
種 類	大器種	小器種	図版 番号	特 徴
灰釉陶器	碗	小碗	1089	小碗は1点のみ、高台付近の小破片で全体は不明である。高台は端部が凹面になっており、施釉も内外面に見られる。他の碗とは異なる点が多く、蓋の可能性も考えられる。
灰釉陶器	碗	無高台碗	1092	器形は浅い碗形をしており、口縁部は単純に立ち上がっている。法量は口径が90～110mm、高さが30mm程度である。底部は無高台で糸切り未調整である。施釉は降灰のため不明である。
灰釉陶器	碗	小坏	915	小坏は1点のみで、無高台である。体部は底部付近で僅かに屈曲している。底部調整は静止糸切りである。法量は口径59mm、高さ28mmの小型のものである。
灰釉陶器	皿	皿	635	器形はいわゆる皿形のもので、口縁部は僅かに端反りしているものが多い。高台は高さが6～10mm程度のもので多く、碗よりも低い。法量は口径130～170mm、高さ20～40mm程度である。底部調整に回転ヘラケズリ、ナデ、糸切り未調整が見られる。体部は外面にロクロ目が残り、内面は平滑でコテが使用されたものが多いが、ロクロ目が残っているものもわずかに見られる。施釉はハケ塗り、無釉、漬け掛けすべてが見られる。底部は糸切り未調整、施釉は漬け掛け、口径の小型化したものが時期的に新しい傾向にあるが、現状では十分に分離できてない。
灰釉陶器	皿	段皿	596	器形は体部内面に明瞭に段を持つ広縁のものと同様に口縁部付近で明瞭に折れ曲がる狭縁のものがある。法量は口径が160～180mm、高さが30～40mmのものと同様に口径が130～140mm、高さが30mmほどのものがある。高台は皿と同様である。底部調整は大型のものはヘラケズリが多く、小型のものは糸切り未調整のものが多い。施釉はハケ塗りが多い。
灰釉陶器	皿	稜皿	608	器形は体部中央付近で明瞭に稜を持つものである。稜の下半は僅かに内湾し、上半は外反している。法量は口径が120～140mm、高さが25mm程度である。高台は高さが6～8mm程度で低く、形状は三角形に近い。底部調整は糸切り未調整のものが多い。施釉は不明である。
灰釉陶器	皿	折縁皿	613	器形は口縁部付近で明瞭に折れ、口縁部が外反するものである。出土点数が少なく、全形が判明するものはない。法量は口径が130～140mmであるが高さは不明である。施釉は漬け掛けのものが確認できる。
灰釉陶器	皿	耳皿	617	器形は小型の皿の両端を折り曲げたもので、高台のあるものと無高台のものがあるが出土点数は少ない。高台は高さが6mm程度であり、低く三角形である。法量は口径100mm、高さ25mm程度である。底部調整は、無高台のものが糸切り未調整、高台のあるものはナデである。施釉は不明である。

種 類	大器種	小器種	図版 番号	特 徴
灰釉陶器	皿	無台皿	619	器形は底部が丸く、体部は緩やかに立ち上がっている。法量は口径162mm、高さ38mmである。体部外面下半と底部は静止ヘラケズリであり、体部上半と内側のロクロ目は不明瞭である。
灰釉陶器	蓋	蓋	810	器形は口縁端部が明瞭に折れて、体部がやや丸味を帯びた笠形のものと同様に口縁端部に明瞭な面を持ち、体部が直線的なものがある。前者は全形がわかるものはないが、摘みは壺蓋のように宝珠摘みの可能性がある。後者はいわゆる環状鈕になるものである。法量は前者の口径が180～220mm、後者の口径が150～180mm、高さが40～50mm程度である。天井部外面はヘラケズリ、体部は外面にロクロ目が残し、内面は平滑でコテを使用している。施釉は内外面ともハケ塗りである。
灰釉陶器	蓋	壺蓋	815	器形は口縁端部が明瞭に折れて稜を持つものと丸く曲がるものがあり、体部は深い。摘みは宝珠摘みである。天井部外面はヘラケズリ、外面はロクロ目が明瞭に残り、内面もロクロ目が残るものがある。施釉は内外面ともハケ塗りである。
灰釉陶器	壺	長頸壺	1025	口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は上方に拡張されるものと上下両方に拡張されるものがあるが、明瞭な面を持つ。胴部は最大径が上半にあり、肩が丸く底部はすぼまっている。高台は高さが5～10mm程で低く、端部に内傾する面を持つものが多い。法量は全形が判明するものは少ないが、高さが200mmと300mm程度の2種があるようである。底部外面の調整はヘラケズリのもので多く、ヘラ書きされているものもある。施釉は基本的に頸部下半と胴部上半にハケ塗りされているものが多い。
灰釉陶器	壺	短頸壺	864	口縁部は10mm程で短く直立し、やや外反するものが見られる。胴部は最大径が上半にあり、肩が丸く底部はすぼまっているが長頸壺よりは丸く寸胴である。4ヶ所に耳を持つものや突帯がめぐるものがある。高台は長頸壺と同じである。法量は全形が判明するものは少ないが、高さが250mmと300mm程度の2種があるようである。胴部下半と底部外面の調整はヘラケズリであり、胴部内面に同心円アテ具痕のあるものがある。施釉は基本的に胴部外面上半と内面の一部にハケ塗りされているものも多く、底部内面には降灰が広範囲に渡って多く見られる。



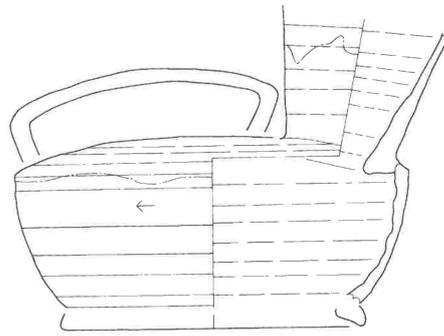
長頸壺

1250



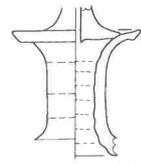
短頸壺

864

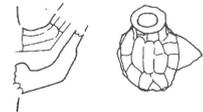


平瓶

1268

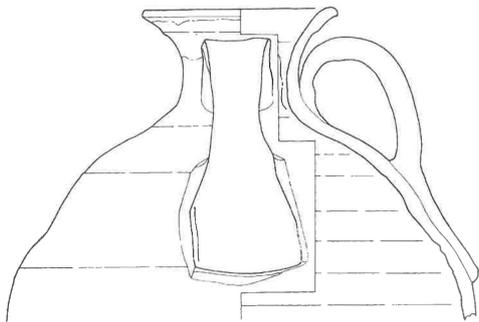


1269



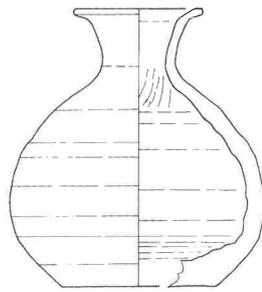
1270

淨瓶



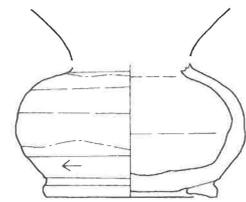
手付瓶

894



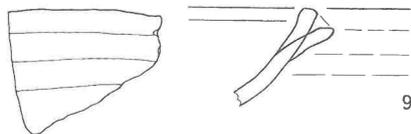
小瓶

901



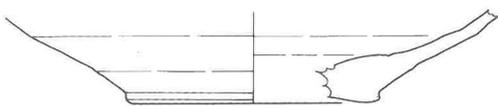
唾壺

911



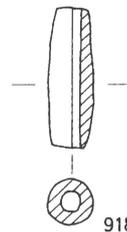
片口鉢

912



鉢

914



陶錘

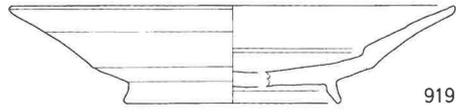
918

灰釉陶器

第27図 灰釉陶器小器種一覽図-2

種類	大器種	小器種	図版 番号	特 徴
灰釉陶器	壺	平瓶	1268	口縁部は口径85～20mm程、高さは60～90mm程でほぼ直立するものと、やや内湾するもの、やや外反するものがある。胴部は最大径のところでは明瞭に折れ、上半部は丸い。高台は基本的に長頸壺と同じであるが口縁端部が内傾し凹面になるものがある。法量は全形が判明するものはないが、胴部の最大径が150～180mm程度と270mm程度の2種があるようである。胴部下半と底部外面の調整はヘラケズリであり、施釉は基本的に胴部外面上半にハケ塗りされているものが多い。
灰釉陶器	壺	浄瓶	1269	浄瓶は口縁部の破片が2点出土しているのみである。口縁端部は拡張され、外傾する面を持っている。法量等の詳細は不明である。
灰釉陶器	壺	手付瓶	894	手付瓶は出土点数が少なく、全形が判明するものはない。頸部は短く、口縁部は丸く外反している。胴部は下半に最大径があり、把手は平らで幅が広い。底部は無高台でヘラケズリと糸切り未調整のものが見られ、下端に沈線状にわずかに段を持つものがある。法量ははっきりしないが、胴部最大径が160mm程と、240mmほどの2種があるようである。施釉は口縁部を中心にハケ塗りされている。
灰釉陶器	壺	小瓶	901	器形は手付瓶とほぼ同じであるが、小型のため胴部最大径が中央に寄ったものもある。底部は基本的に無高台でヘラケズリと糸切り未調整のものがある。小さな高台のあるものが1点出土しているが、小破片であり、小瓶ではない可能性もある。底部外面に太めの凹線を入れ、高台を表現したと考えられるものもある。法量は高さが90～110mm、胴部最大径が80～100mm程度である。施釉は口縁部内面から胴部上半に掛けてハケ塗りされている。
灰釉陶器	壺	唾壺	911	器形は胴部が扁平な球形をしており、胴部最大径は中央にある。口縁部は不明であるが、頸部が太く小瓶とは明らかに異なっている。底部は径が大きく高台がある。高台は高さが6mmほどで端部は内傾し僅かに凹面になっている。底部調整はヘラケズリである。法量は高さが不明、胴部最大径が90mm程度である。施釉は胴部上半はハケ塗りされている。
灰釉陶器	鉢	片口鉢	912	片口鉢は小片が少数出土しているだけで、全形が判明するものはない。器形の詳細、法量等も不明である。施釉は内外面にハケ塗りされているものがある。
灰釉陶器	鉢	鉢	914	鉢は底部破片が1点出土している。底部調整は静止糸切りである。施釉は内外面にハケ塗りされている。全形は不明であるが、片口鉢の底部である可能性もある。

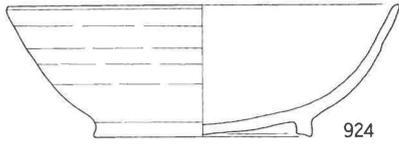
種類	大器種	小器種	図版 番号	特 徴
灰釉陶器	土製品	陶錘	918	器形は紡錘形をしているものと円柱形に近いものがある。法量は紡錘形が長さ36～56mm、太さ10～12mmであり、円柱形が長さ55mm、太さ17mmである。
緑釉陶器	皿	段皿	919	器形は体部外面に稜があり、内面に明瞭に段を持つ広縁のものである。底部や器壁がやや厚く、体部外面下半から底部外面の調整はヘラケズリである。調整は最終的に全面にヘラミガキが施されている。高台は10mmで高く、断面が長方形に近い。高台は外反し外側に張り出し、内側に面を持っている。法量は口径が176mm、高さが39mmである。胎土は淡赤褐色で、釉色は黄緑色で薄い。施釉は高台端面以外全面にハケ塗りされている。
緑釉陶器素地	碗	碗	924	器形はいわゆる碗形のもので、口縁部に端反りは見られない。灰釉陶器碗よりも底径が大きく、体部が直立気味である。口縁部には4ヶ所に輪花が入るものがある。高台は高さが6～10mm程度のもので多く、断面形が長方形に近いものから、内傾する面を持つものや灰釉陶器碗の高台に近いものまであり、細分が可能である。法量は判明する個体が少ないが、口径110～170mm、高さ45～50mm程度である。調整は最終的には全面がヘラミガキされており、体部外面はロクロ目が残っているものがある。胎土は灰色に近いものも多く、水簸されているようであり緻密である。
緑釉陶器素地	碗	稜碗	933	器形は体部中央付近で明瞭に稜を持つもので、内面の稜の部分には沈線が入れられているものがある。稜の下は僅かに内湾し、上は僅かに外反しており、灰釉陶器稜碗とほぼ同じ器形である。高台は高さが6～10mm程度のもので多く、断面形が長方形に近いものから、内傾する面を持つものがあり、細分が可能である。法量は判明する個体が少ないが、口径140～190mm、高さ50～60mm程度である。調整は最終的には全面がヘラミガキされており、体部外面はロクロ目を残すものはない。胎土は灰色に近いものも多く、水簸されているようであり緻密である。
緑釉陶器素地	皿	皿	959	器形はいわゆる皿形で、口縁部は丸く終わり、4ヶ所に輪花が入るものがある。高台は高さが5～7mmであり、外側に張り出し、内傾する面を持つ。内傾した面はわずかに段を持ったり、凹面になるものがある。法量は口径が140mm、高さが30mm程度である。調整は最終的に殆どが内外面共にヘラミガキされている。胎土は灰色に近いものも多く、水簸されているようであり緻密である。
緑釉陶器素地	皿	稜皿	962	器形は体部中央付近で明瞭な稜を持つものである。稜の下半は僅かに内湾し、上半は外反している。法量は口径が130～150mm、高さは30mm程度である。出土数が少ないため、高台は高さが8mmで断面長方形のものしか確認できない。調整は最終的に殆どが内外面共にヘラミガキされている。胎土は灰色に近いものも多く、水簸されているようであり緻密である。



919

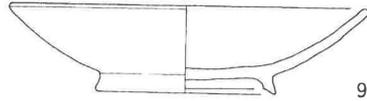
段皿

緑釉陶器



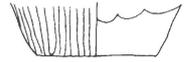
924

碗



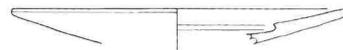
959

皿



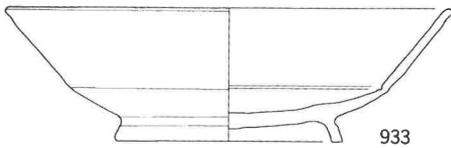
小瓶

967



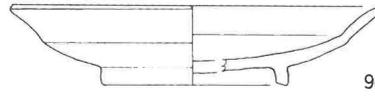
966

段皿



933

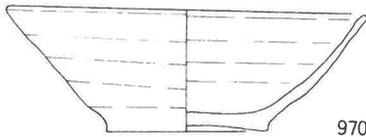
稜碗



962

稜皿

緑釉陶器素地



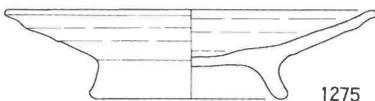
970

坏



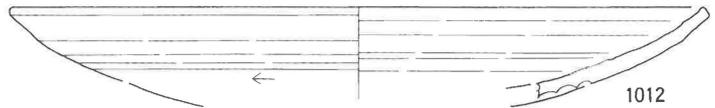
1009

蓋



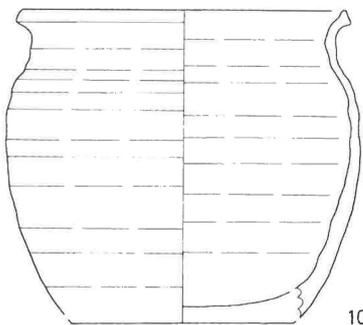
1275

盤



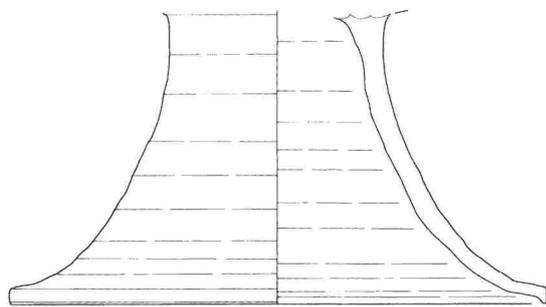
1012

高盤



1018

広口壺



1047

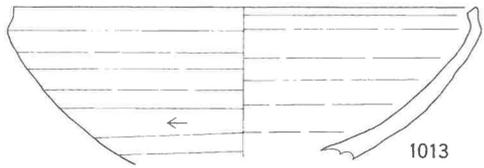
高盤

須恵器

第28図 緑釉陶器・緑釉陶器素地、須恵器小器種一覧図-1

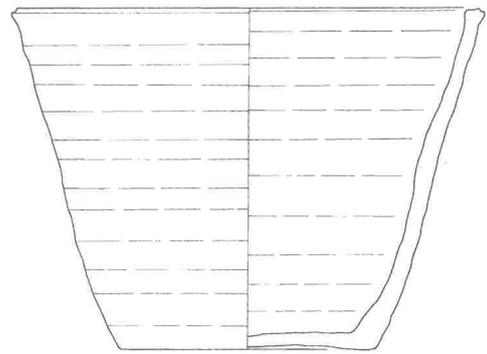
種 類	大器種	小器種	図版 番号	特 徴
緑釉陶器素地	皿	段皿	966	段皿は1点出土している。器形は体部内面に明瞭な段を持つもので広縁であるが、体部は直線的に開いている。法量は口径が133mmである。底部及び高台は不明である。調整は最終的に内外面共にヘラミガキされている。胎土は灰色に近いもので、水簸されているようであり緻密である。
緑釉陶器素地	壺	小瓶	967	小瓶は1点出土している。底部の小破片であり、全形は不明である。調整は底部が糸切り未調整で胴部外面が縦方向のヘラミガキである。底部はかなり厚く12mm以上ある。胎土は灰色で僅かに砂粒を含むが緻密である。
須恵器	坏	坏	970	器形は底部が平底で、体部が直線的に開いているが、僅かに内湾するものもある。調整は底部が糸切り未調整、体部内外面がロクロ目を顕著に残しており、コテは使用されていない。ロクロの回転は左右両方がある。法量は口径が130～160mm、底径が50～70mm、高さが30～45mm程度のものが多い。胎土は淡灰褐色のものが多く、無釉である。
須恵器	蓋	蓋	1009	蓋は2点が出土している。形状は口縁端部に面を持つもので、口縁部のみ破片である。法量は口径が158mmと310mmである。口縁端部の形状は灰釉陶器の蓋と共通しているが、小さい方は足高鉢の口縁部、大きい方は高盤の坏部の可能性も考えられる。
須恵器	盤	高盤	1012	高盤は坏部2点と脚部1点が出土している。坏部は僅かに内湾して斜め上方に伸びるが深さは浅い。脚部は接合部が太く、脚端に近いところで大きく広がり、端部は面を持っている。法量は坏部の口径が260～275mm、脚端部の直径が212mmである。調整は内外面ともロクロ目が顕著である。胎土は淡灰色で密であり、無釉である。
須恵器	盤	有台盤	1275	有台盤は1点出土している。体部は浅く直線的に延び、端部は丸い。高台は高さが15mmと高く、やや外側に張り出し断面形は長方形に近い。調整は体部内外面にロクロ目が顕著に残っており、底部はナデである。法量は口径が141mm、高さが35mmあり、法量・器形ともに須恵器窯で出土する盤と共通している。
須恵器	鉢	鉢	1013	鉢は出土数が少なく、全形が判明するものはない。口縁部が内側に折れるものと外側に広がって単純に終わるものがある。前者は体部がやや深いいわゆる鉢形で、法量は口径が182mmである。調整は内外面ともロクロ目が顕著に残っている。後者は、小破片で体部外面にヘラ書きがあるものであるが詳細は不明である。胎土は密で、色調は灰色である。

種類	大器種	小器種	図版番号	特徴
須恵器	壺	広口壺	1018	器形は寸胴で頸部が僅かにくびれ、口縁部は短く斜め上方に延びている。口縁端部は拡張されて面を持つものと丸く終わるものがある。底部は平底で径が大きい。全形が判明するものは少ないが、法量は口径が90～260mmまで様々である。大型のものは外面が平行叩きであり、他と調整方法が異なっている。これ以外のものは内外面にロクロ目残り、内面下半に縦方向のケズリが見られるものもある。
須恵器	鉢	深鉢	1277	深鉢は1点出土している。器形はバケツ形をしている。体部はやや斜め上方に直線的に立ち上がり、深く底径も大きい。法量は口径が248mm、底径が133mm、高さが180mmある。調整は内外面ともロクロ目が顕著であり、底部は未調整である。
須恵器	鉢	足高鉢	1016	足高鉢は1点出土している。器形は体部が僅かに内湾するが、ほぼ直線的に斜め外方に延び、口縁端部は拡張されて明瞭な面を持つ。高台は高さが17mmでかなり高い。断面形は長方形に近く、外側に張り出して、端部には内傾した面を持つ。法量は口径が230mm、高さが71mmである。調整は体部内外面にロクロ目残り、底部はケズリである。胎土は密で、色調は暗灰色である。
須恵器	鉢	片口鉢	1025	片口鉢は1点出土している。器形は体部が僅かに内湾するが、ほぼ直線的に斜め上方に立ち上がり、深鉢よりも底径が小さい。法量は口径が227mm、底径が102mm、高さが129mmである。調整は内外面ともロクロ目が顕著に残っており、底部は未調整である。胎土は密で色調は暗灰色である。
須恵器	陶白	陶白	1278	器形は体部が斜め上方に開き口縁部付近で直立する。口縁端部は面を持つものと丸く終わるものがある。器壁は体部が8mmほど、底部も20mmほどでかなり厚い。底部外面には棒状工具による刺突がある。法量は口径が120～200mm、底径が80～100mmのものがあり、高さが判明するものは少ない。調整は体部内外面にロクロ目を顕著に残しており、底部は糸切り未調整が多いがケズリもある。胎土は密で色調は灰色のものが多い。
須恵器	甗	甗	1039	甗は底部に6～7個程度の円形の穴が開くものと底が抜けたままの形のものがある。両方とも全形が判明するものはないが、体部はほぼ直線的に斜めに延びるようである。前者のものと思われる胴部破片に環状の把手が付くものがある。法量は両者とも底径が220mm程度である。前者の調整は体部外面がケズリ、内面にはロクロ目残るものが多い。後者の調整は内外面ともにロクロ目残っている。



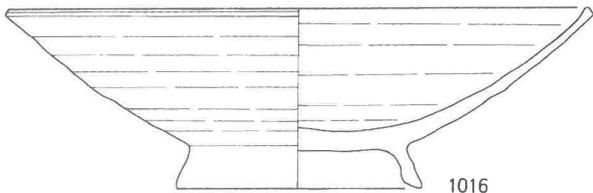
鉢

1013



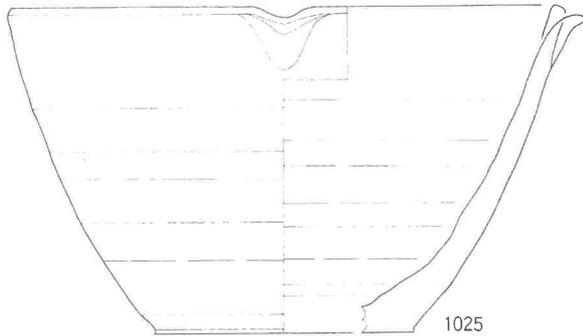
深鉢

1277



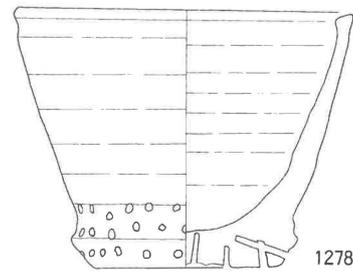
足高鉢

1016



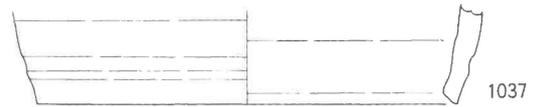
片口鉢

1025



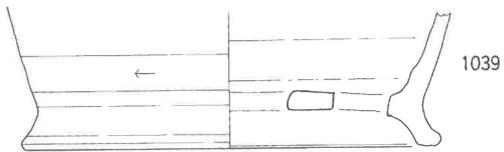
陶臼

1278

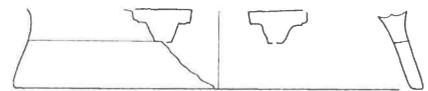


甑

1037

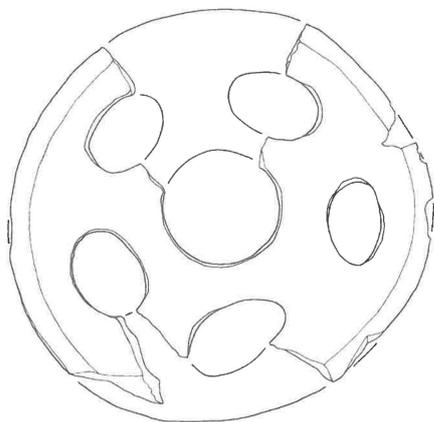


1039



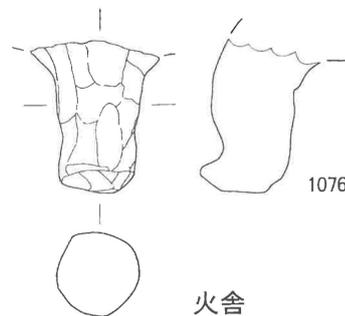
香炉

1055



甑

1076

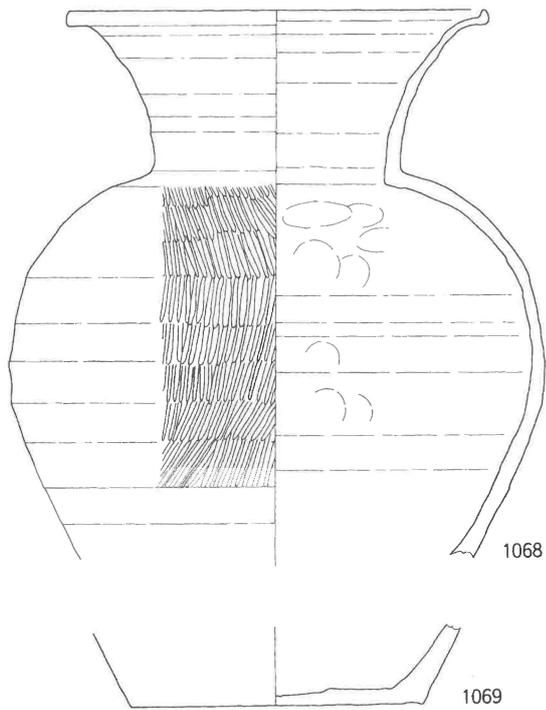


火舎

須恵器

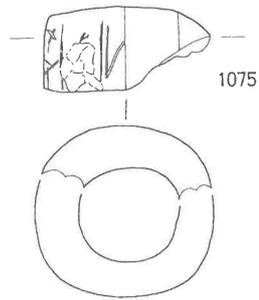
第29図 須恵器小器種一覧図一2

種 類	大器種	小器種	図版 番号	特 徴
須恵器	香炉	香炉	1055	香炉は1点出土している。脚部の小破片のみであり、全体は不明である。やや外側に直線的に開き、スカシがある。法量は脚径が161mmであり、他は不明である。現状では香炉の可能性を考えたが、他の器種になる可能性もある。
須恵器	香炉	火舎	1076	火舎は1点出土している。いわゆる獣脚の部分のみで詳細は不明である。他の器種になる可能性もある。
須恵器	甕	甕	1068	口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は上方に拡張されるものや上下両方に拡張されるものがあるが、明瞭な面を持つ。胴部は最大径が上半にあり、肩が丸く下半はすぼまっている。底部は平底である。法量は全形が判明するものは少ないが、口径は340～350mmと180～200mm程度の2種がある。調整は体部外面が平行叩き、内面は同心円あるいは無文アテ具、底部は未調整、口縁部は殆どナデであるが、一部にタテハケのものが見られる。
須恵器	土製品	陶錘	1075	陶錘は1点出土している。小破片であるが直径70mm、孔径40mm程度である。外面にはヘラ書きが施されている。中心の孔がかなり太く、陶錘ではない可能性もある。
須恵器	土製品	窯道具	1077	窯道具は甕の頸部を切り取った破片をそのまま焼成したものと粘土を手捏ねで棒状にしてもの2種類が出土している。両者共用に途不明で窯道具である確証はないが、とりあえず窯道具とした。
須恵器	瓦	瓦	1088	瓦は丸瓦の破片が1点出土している。凸面はナデで、凹面は布目が残っている。
須恵器	瓦	鬼瓦	1085	鬼瓦が口、左目、鼻の部分が残存している。かなり簡略化された表現で退化しているものと考えられる。表面には棒状工具による刺突が全面に施されている。法量は縦横260mm程が残っており、厚さは30mmほどで、板状をしている。
土師器	甕	甕	1084	甕はいわゆる清郷型の甕である。法量は口径が300mmほどであるが全形が判明する資料はない。調整は外面がユビオサエ、口縁部付近の内面は丁寧なナデが施されている。胎土には1～2mm程度の砂粒を多く含んでいる。

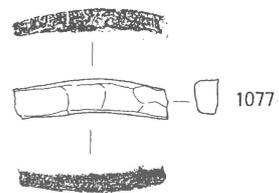


甕

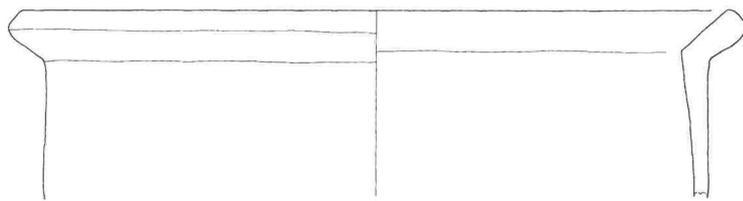
須恵器



陶錘

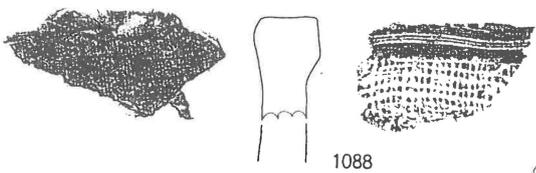


窯道具

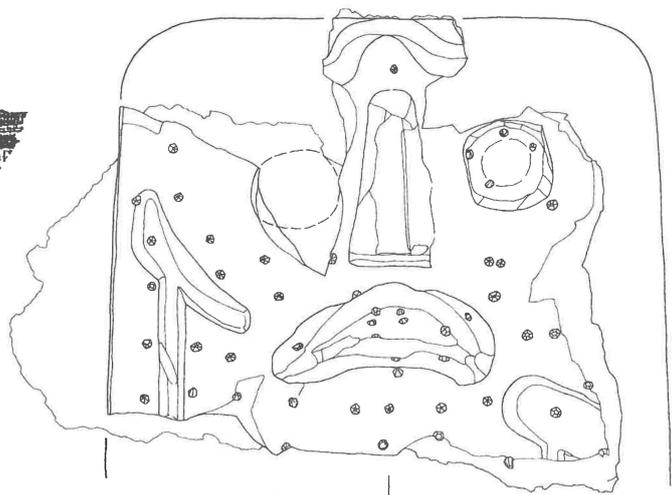


甕

土師器



丸瓦



瓦

鬼瓦

1085

第30図 須恵器・土師器・土製品小器種一覽図

2. 4号窯出土遺物

4号窯からは灰釉陶器と須恵器が出土している。4号窯は灰原がほとんど削平を受けていたため、遺物の多くは窯体内から出土したものである。出土遺物は第31・32図に示し、碗・皿類の径高グラフは第3表に示している。以下では、出土した種類ごとに全体の傾向を説明する。

A. 灰釉陶器（第31・32図、第3表）

灰釉陶器は、碗類、皿類、壺類が出土しており、碗類は深碗、碗の2器種、皿類は皿、段皿、稜皿の3器種、壺類は長頸壺、平瓶の2器種が出土している（第2表）。

碗類 深碗（1～5）は口径が約150mm以上、高さが約60mm以上になるもので、腰が張り、口縁部は明瞭に端反りしている。高台は細く、高くなってやや外方に延び、特徴のある形態をしている。体部と高台の器形がともに定型化しており、一定量が出土している。底部調整はすべて糸切り未調整であり、施釉はされているものがあるが、漬け掛けであるのかハケ塗りであるのかは確認されていない。碗と同様に基本的に漬け掛けと考えられる。

碗（6～33）は口径約120～150mm、高さ約35～60mmの範囲に集中している。このうち、口径150mm以上が2点あり（第31図10・22）、他の碗とはやや離れている（第4表）。出土点数が少ないので、5号窯のように明確に中碗としては分離できないが、法量の点で細分できる可能性がある。底部調整は6・7・14がナデで他はすべて糸切り未調整である。施釉は漬け掛けと無釉のものがみられ、ハケ塗りは確認されていない。碗は全体的に5号窯と比較して小型化しているようである。

皿類 皿（34～40）は口径約120～130mm、高さ約20～30mmの範囲に集中している。底部調整はすべて糸切り未調整である。施釉は漬け掛けと無釉のものがみられ、ハケ塗りは確認されていない。皿も全体的に5号窯と比較して小型化しているようである。

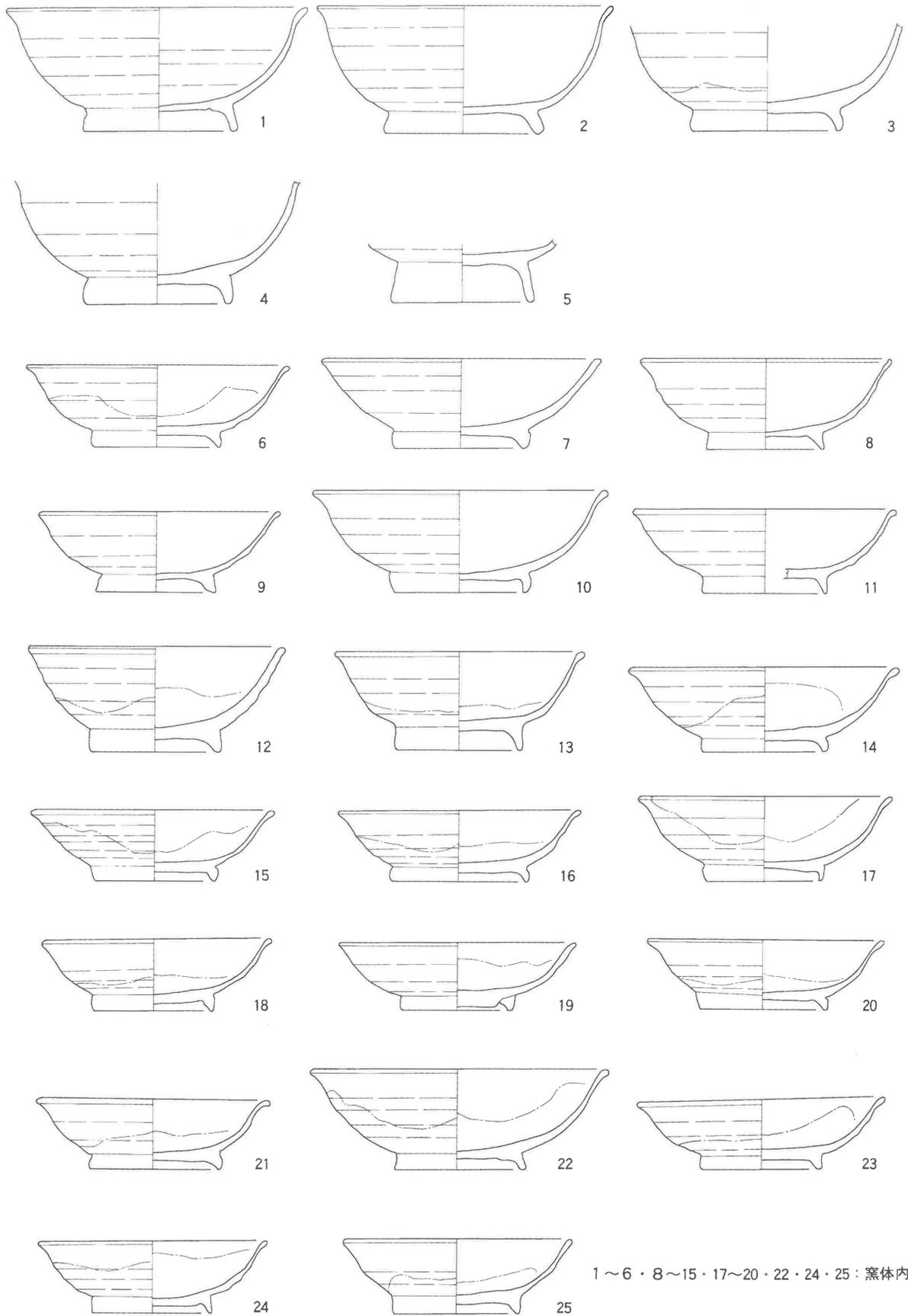
段皿（41・42）は内面に明瞭に段を持つもの、稜皿（43～45）は体部が明瞭に折れて稜を持つものであるが、法量は皿とほぼ同じである。底部調整はすべて糸切り未調整である。施釉は漬け掛けのものがみられ、ハケ塗りは確認されていない。皿も全体的に5号窯とより小型化しているようである。

壺類 平瓶（48）は口縁部のみが出土している。長頸壺（49）も底部のみで、詳細は不明である。

B. 須恵器（第32図）

坏類 坏（46・47）は少数であるが出土している。口径約110mm、高さ約25mm程である。底部調整はすべて糸切り未調整である。施釉は行われていない。

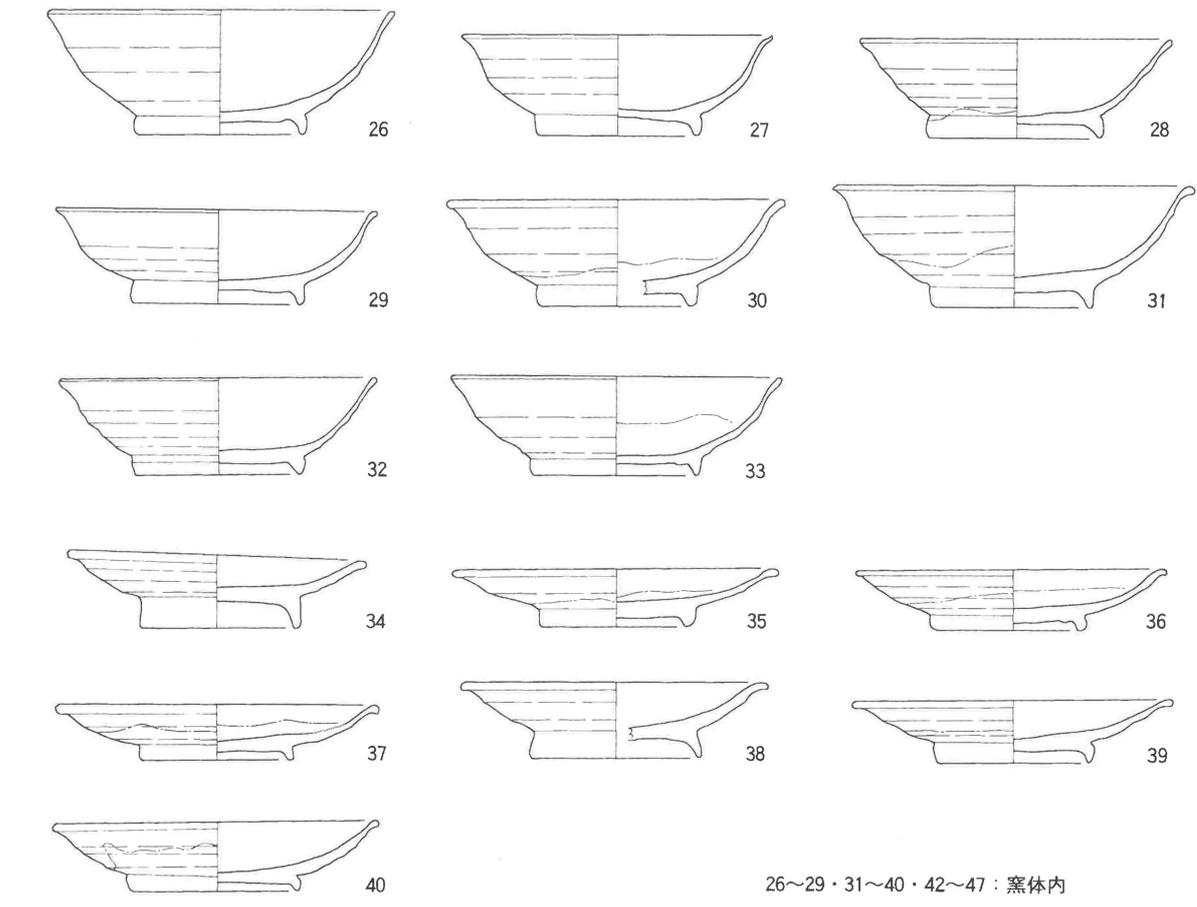
甕類 甕類は胴部の破片が出土しているが、図示できるものはない。



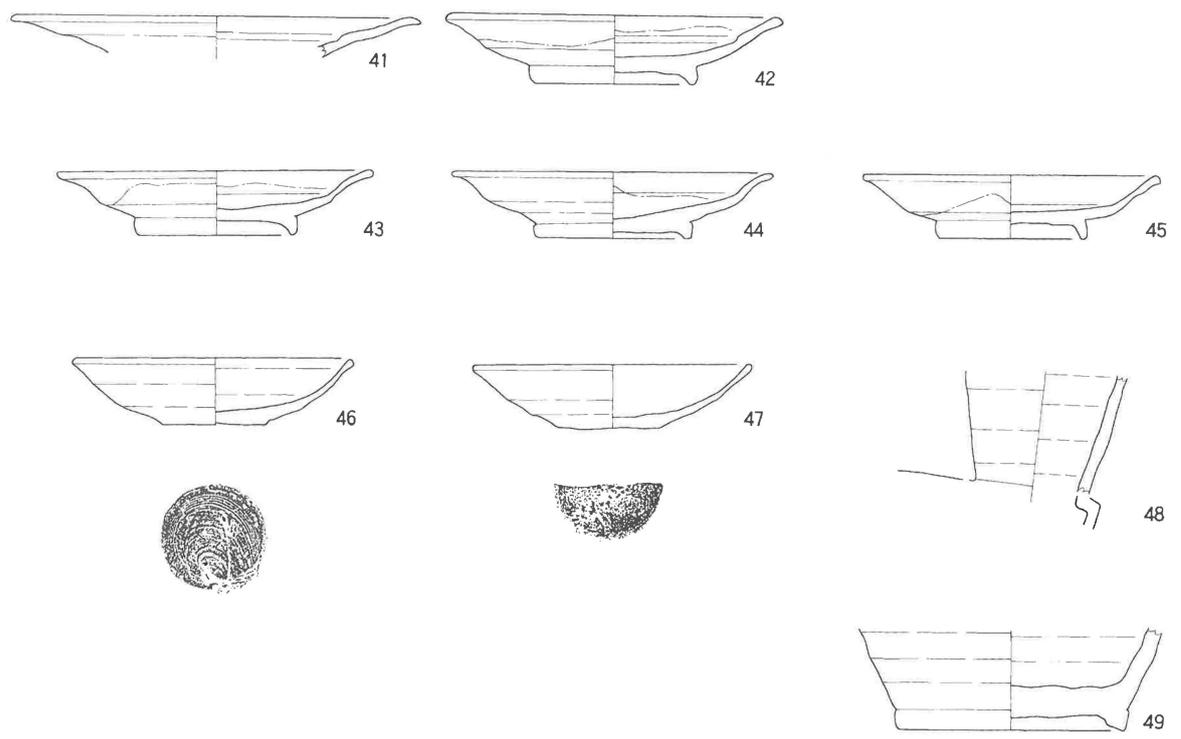
1 ~ 6 · 8 ~ 15 · 17 ~ 20 · 22 · 24 · 25 : 窯体内



第31図 4号窯出土遺物一1 (1/3)

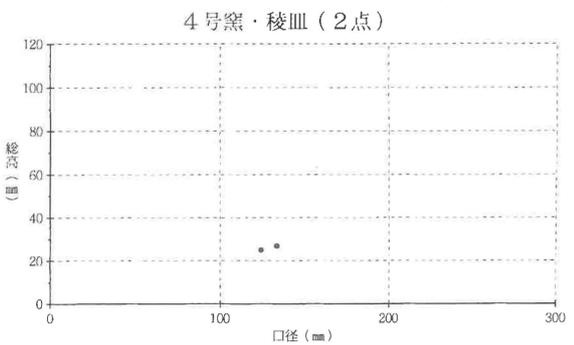
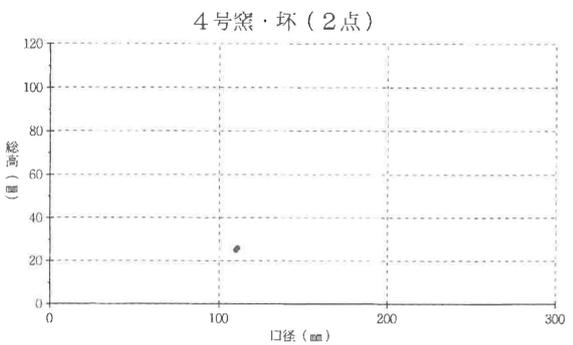
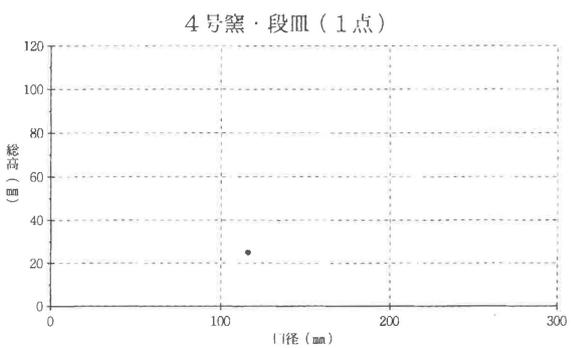
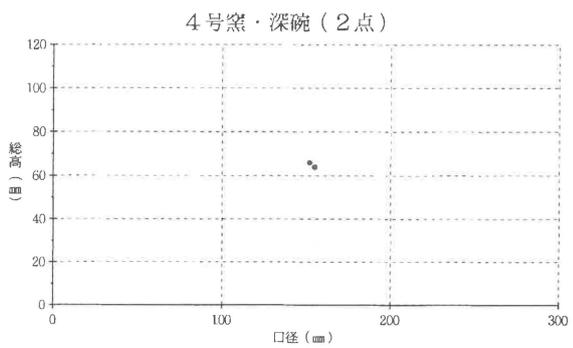
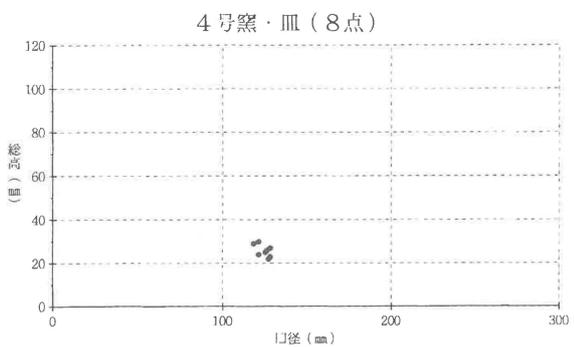
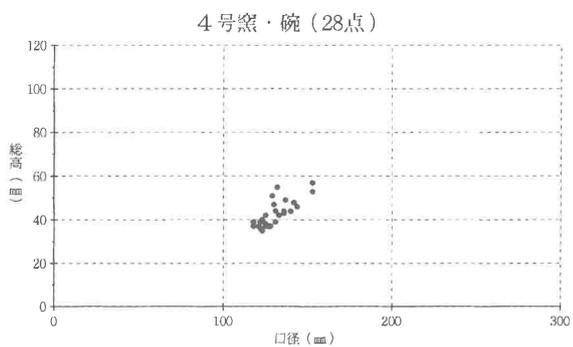
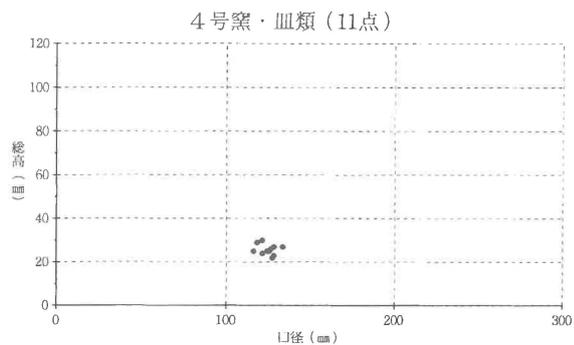
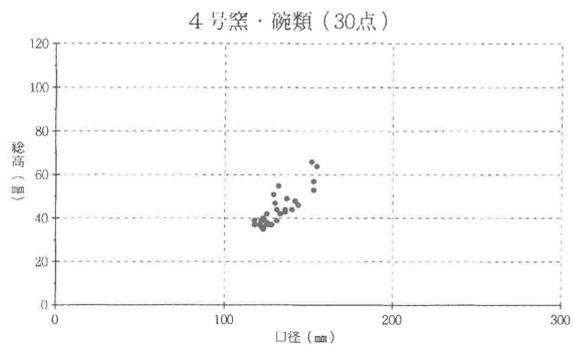


26~29・31~40・42~47：窯体内



第32図 4号窯出土遺物一2 (1/3)

第4表 4号窯出土碗・皿類径高グラフ



3. 5号窯出土遺物

5号窯からは灰釉陶器、緑釉陶器・緑釉陶器素地、須恵器、瓦、土製品が出土している。5号窯は窯体、灰原ともに良好に遺存していたため、多くの遺物が出土しているが、そのほとんどは灰原からの出土である。窯体内出土遺物は少量が出土したのみであり、窯詰め時の現位置を保っていると推定できる資料はなかった。出土遺物は第33～70図に示し、碗・皿類の径高グラフは第5表に示している。以下では出土した種類ごとに説明する。

A. 灰釉陶器（第33～61図）

灰釉陶器は、碗類、皿類、蓋類、壺類、鉢類、土製品類が出土しており、小器種についても浄瓶以外のすべての小器種が出土している（第2表）。

碗類 大碗（50～61）は口径が約240～280mm、高さが約80～110mm程度のもので、底部調整はヘラケズリである。機能的には鉢と考えられるが、形の類似性から碗類に含めている。

中碗（62～112）は口径が170～200mm、高さが60～70mm程度のもので、底部調整はヘラケズリが過半数を占め、ナデがわずかにあり、糸切り未調整も一定量ある。施釉は無釉が最も多く、ハケ塗りが一定量あり、漬け掛けもごくわずかにある。中碗は口縁内面に沈線が1条入るものがあり、また輪花が4ヶ所に入れられているものも見られる。

稜碗（113～122）は口径約180～200mm、高さ約50～70mm程度のものである。底部調整は確認できるものはすべてヘラケズリである。施釉はハケ塗りと無釉である。

深碗（123～128）は口径が約140～165mm、高さが約60～70mm程度のもので、やや腰が張り他の碗よりも深くなっているものであるが、器形が一定しておらず、出土数も少ない。底部調整はナデと糸切り未調整であり、施釉は漬け掛けとハケ塗りの両者がある。5号窯出土の深碗は4号窯のように定型化しておらず、4号窯のものとは異なった位置づけが必要であろう。

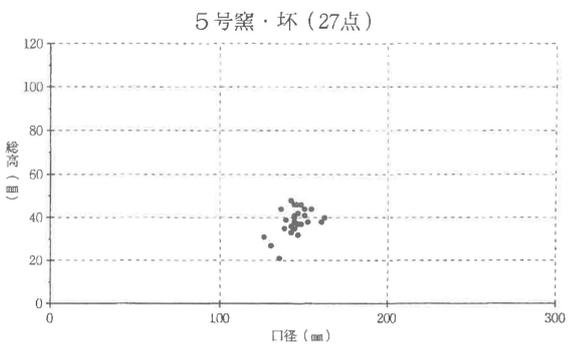
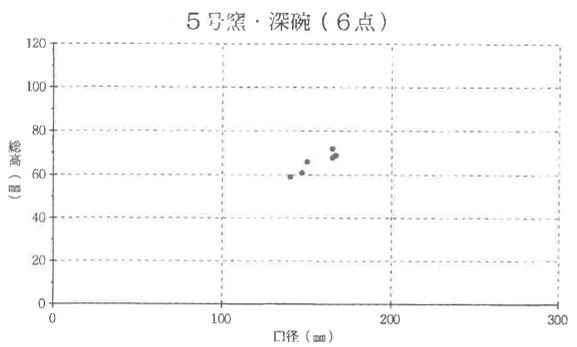
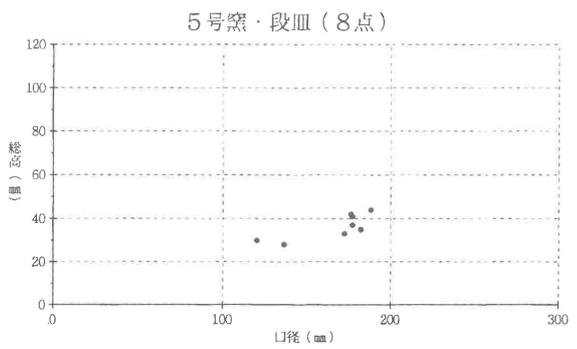
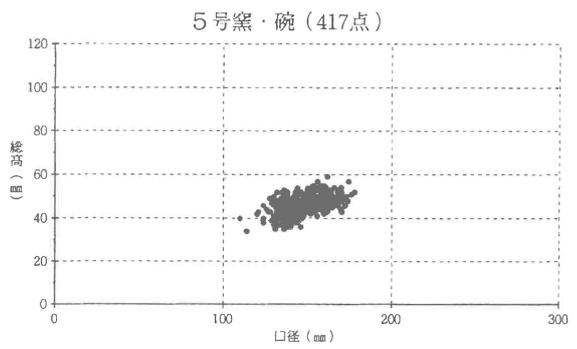
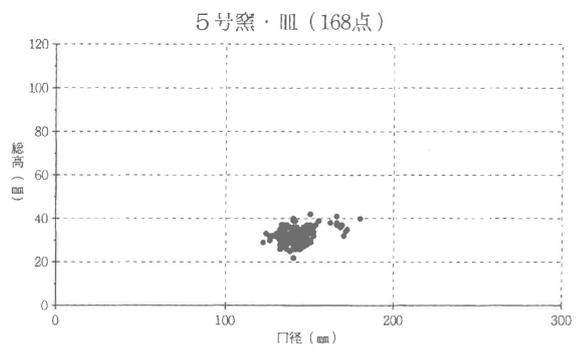
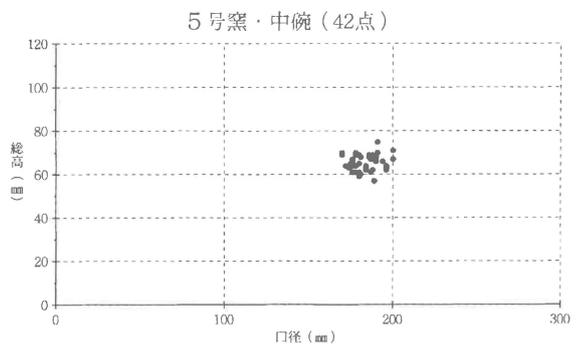
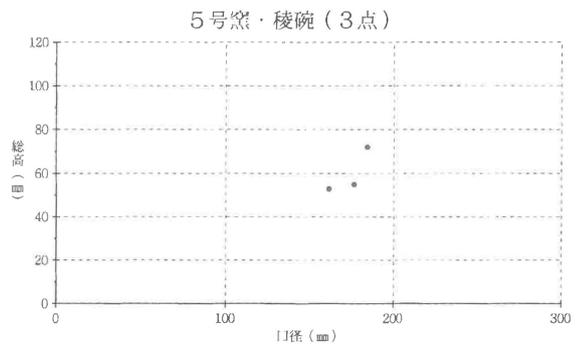
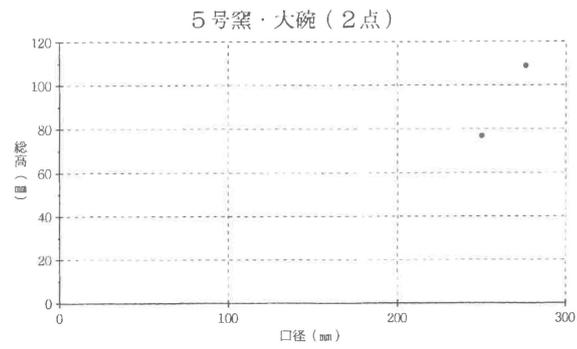
碗（129～592）は口径約130～170mm、高さ約35～55mmの範囲に集中している。底部調整はヘラケズリ、ナデ、糸切り未調整のいずれも見られ、糸切り未調整が最も多い。施釉はハケ塗りと、無釉、漬け掛けすべてが、どの底部調整にも見られる。

小碗（1089）、無台碗（1090～1092）、小坏（915）に関しては出土数がごく少なく、特殊な器種と考えられる。

皿類 段皿（593～606）は口径約120～136mm、高さ約30mm程度のものと口径が160～180mm、高さが35～40mm程度の2法量が見られる。底部調整は小型のものに1点糸切り未調整があるが、他はヘラケズリである。施釉はハケ塗りと無釉である。段皿は底部調整、施釉共に古い技術形態を残しているようである。

稜皿（607～609）は口径約120～160mmで、出土数が少なく全形を復元できるものはない。底部調整は不明で、施釉はハケ塗りとである。稜皿も段皿と同様に底部調整、施釉共に古い技術形態を残してい

第5表 5号窯出土碗・皿類径高グラフ



折縁皿（610～616）は口径約130～160mmで、出土数が少なく全形を復元できるものはない。底部調整は不明で、施釉は無釉と漬け掛けがあるがハケ塗りは確認されていない。折縁皿は底部調整は不明であるが、施釉技法からは段皿・稜皿とは異なり新しい技術形態を示しているようである。

耳皿（617・618）は出土数が極めて少なく詳細は不明であるが、高台のあるものと無高台で底部糸切り未調整のものがあり、細分できる可能性が高い。

無台皿（619・620）も出土点数が極めて少なく、詳細は不明である。

皿（621～799）は口径約130～180mm、高さ約25～35mmの範囲に集中している。口径では140mmあたりに分布の中心があり、160mmを境に2群に分かれる可能性がある。底部調整はヘラケズリ、ナデ、糸切り未調整のいずれも見られ、糸切り未調整が最も多い。施釉はハケ塗リ、無釉、漬け掛けがあるが漬け掛けが最も多い。

蓋類 蓋（800～814）は口径が180～210mm程度で口縁端部が明瞭に折れるものと口径が160～180mm程度で口縁端部に明瞭な面を持つものがある。後者は環状鈕で須恵器の盤に近い形態であるが、口縁端部が下方に引き延ばされているものがあり、蓋と考えた。身として対応する器種は不明であるが、口径の点ではほぼ中碗に対応する。

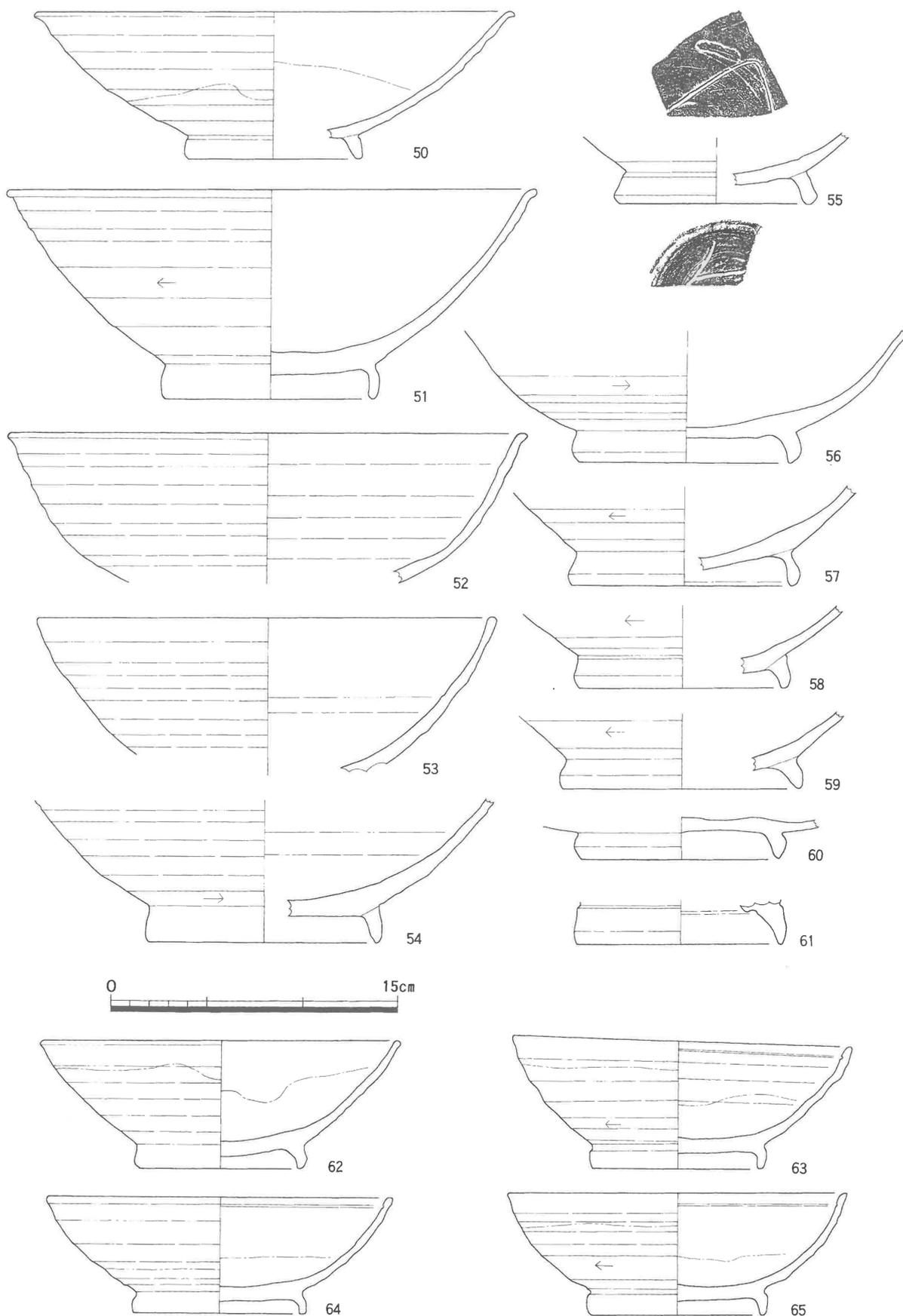
壺蓋（815～819）は宝珠摘みで、口縁部が強く折れ曲がり体部が深いものである。口径は120～150mm程度であり、短頸壺の蓋と考えられる。

壺類 長頸壺（820～861）は胴部上半に最大径があり、下半がすぼまっている。頸部は緩やかに外反し大きく開いている。法量の点で細分可能であるが、全形が判明するものは少なく、特に大型のものは全形が判明するものはない。法量は口径が110～130mmで高さが200mm程度のものと口径が160～190mmで高さが300mm程度ものの2法量がありそうである。又、大型のものには環状の把手が付くものが目立つ。この把手は基本的に確認できるものは1個だけであり、2個付くものはない。口縁端部が上方に引き延ばされていたり、上下に拡張されているものがあり細分できる可能性がある。

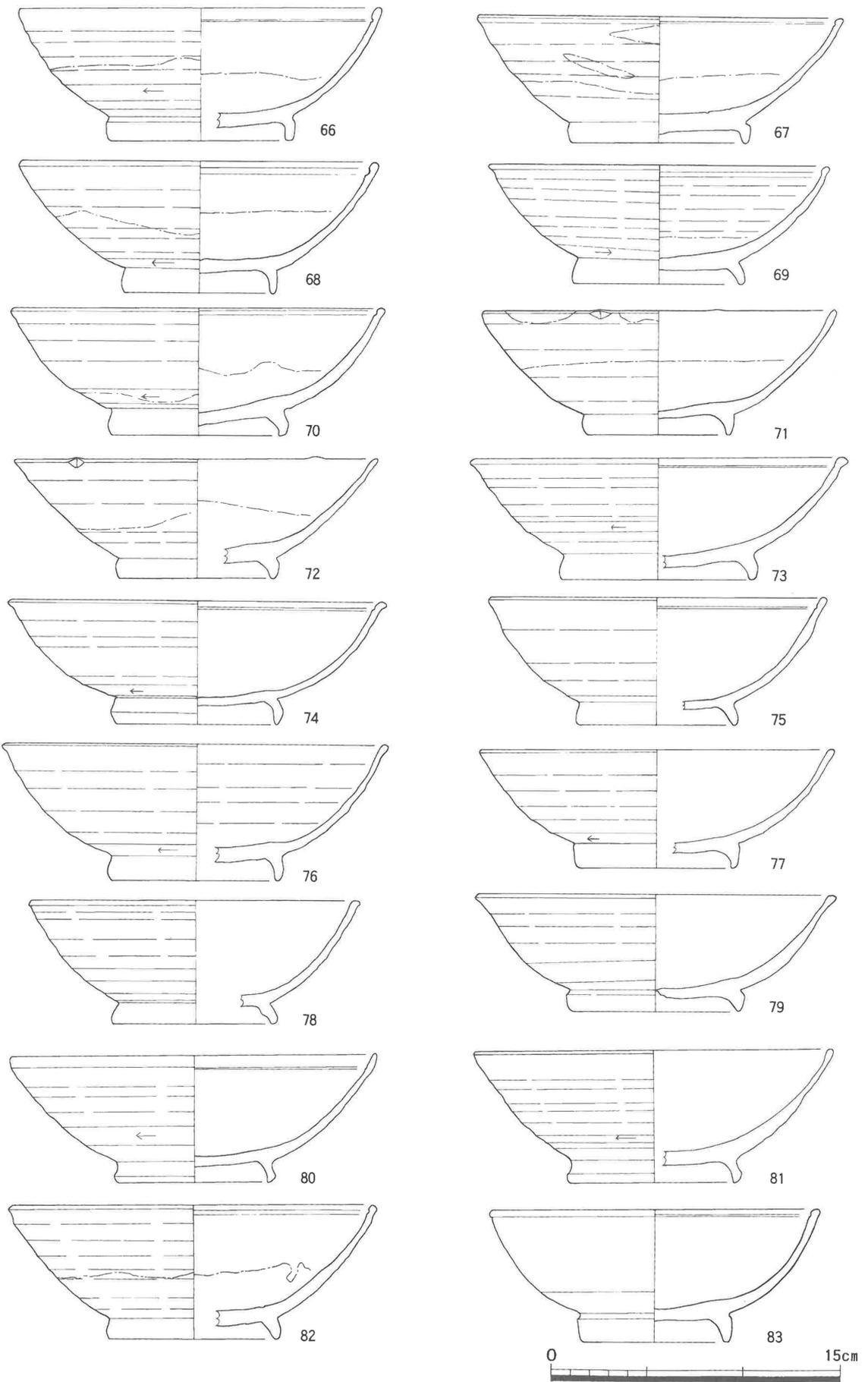
短頸壺（862・864～881）は胴部最大径が中央に近く寸詰まりの形をしている。法量の点では細分可能であるが、全形が判明するものは少ない。4ヶ所に耳があるものや突帯が付くものがあり、いわゆる蔵骨器として使用されている四耳壺にあたる。法量は口径が200mm、高さが300mm程度のものと口径が100～120mm、高さが250mm程度のものの2法量がありそうである。

平瓶（882～893）は胴部最大径のところ明瞭に折れ、下半部が直線的に立ち上がるもので、胴部形態は共通しているが、口縁部の形態は内湾するもの、直立するもの、外反するものがあり、いくつかの形態がある。高台は内傾する面を持ち、凹面になっている。全形が判明するものはないが、法量の点では胴部最大径が150～180mmのものと270mm程度のものの2法量がある。口縁部形態、法量の点からは細分が可能であると考えられる。

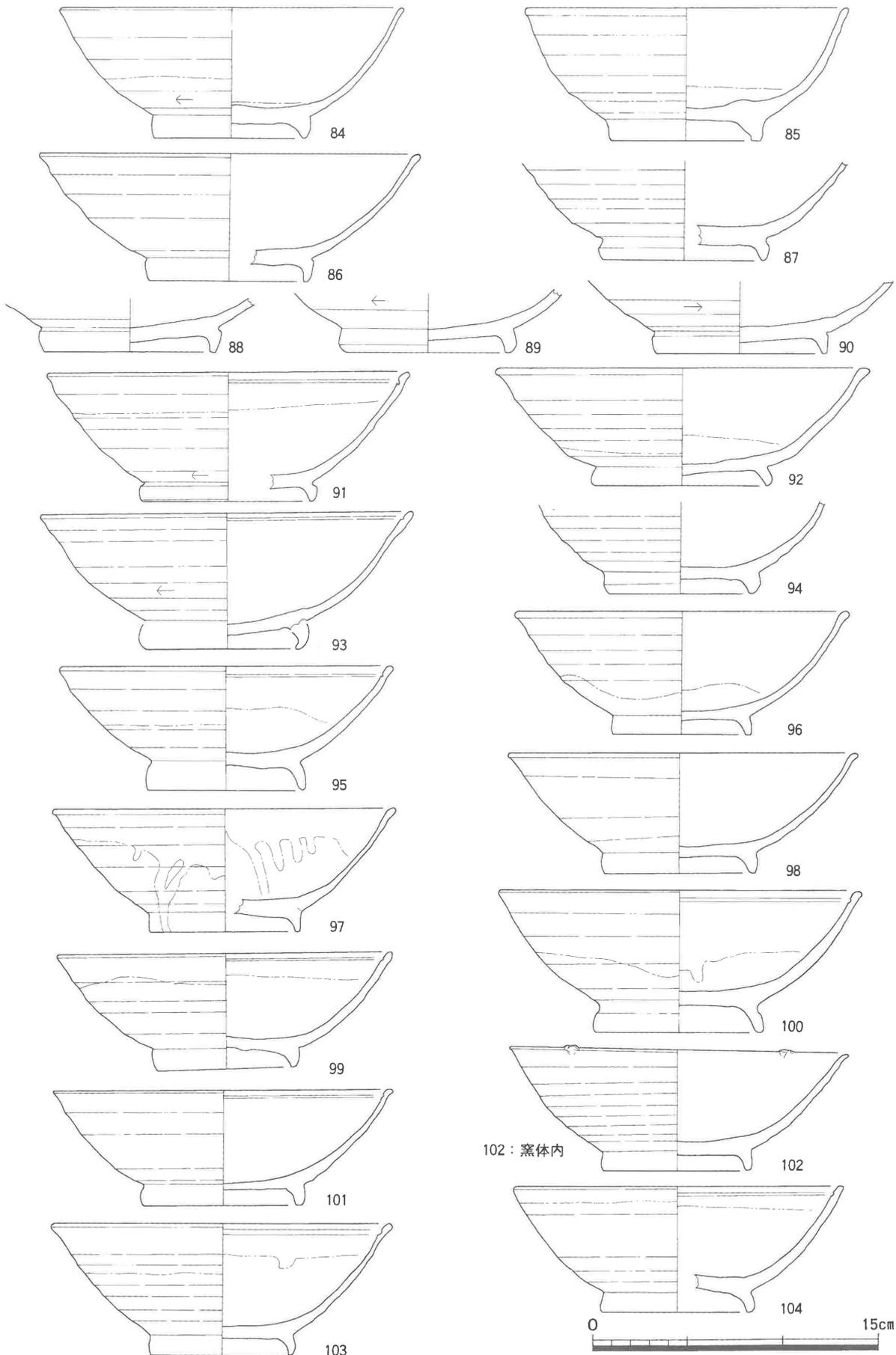
手付瓶（894～899）は出土点数が少なく、全形が判明するものもない。胴部は下膨れで口縁部は短く外反し、頸部から胴部上半に偏平な把手が付く。底部は無高台で、外面下端に沈線状にわずかに段を持つ。全体の形は小瓶とほぼ相似形である。法量は胴部最大径が160mm程度のものと240mm程度のもの



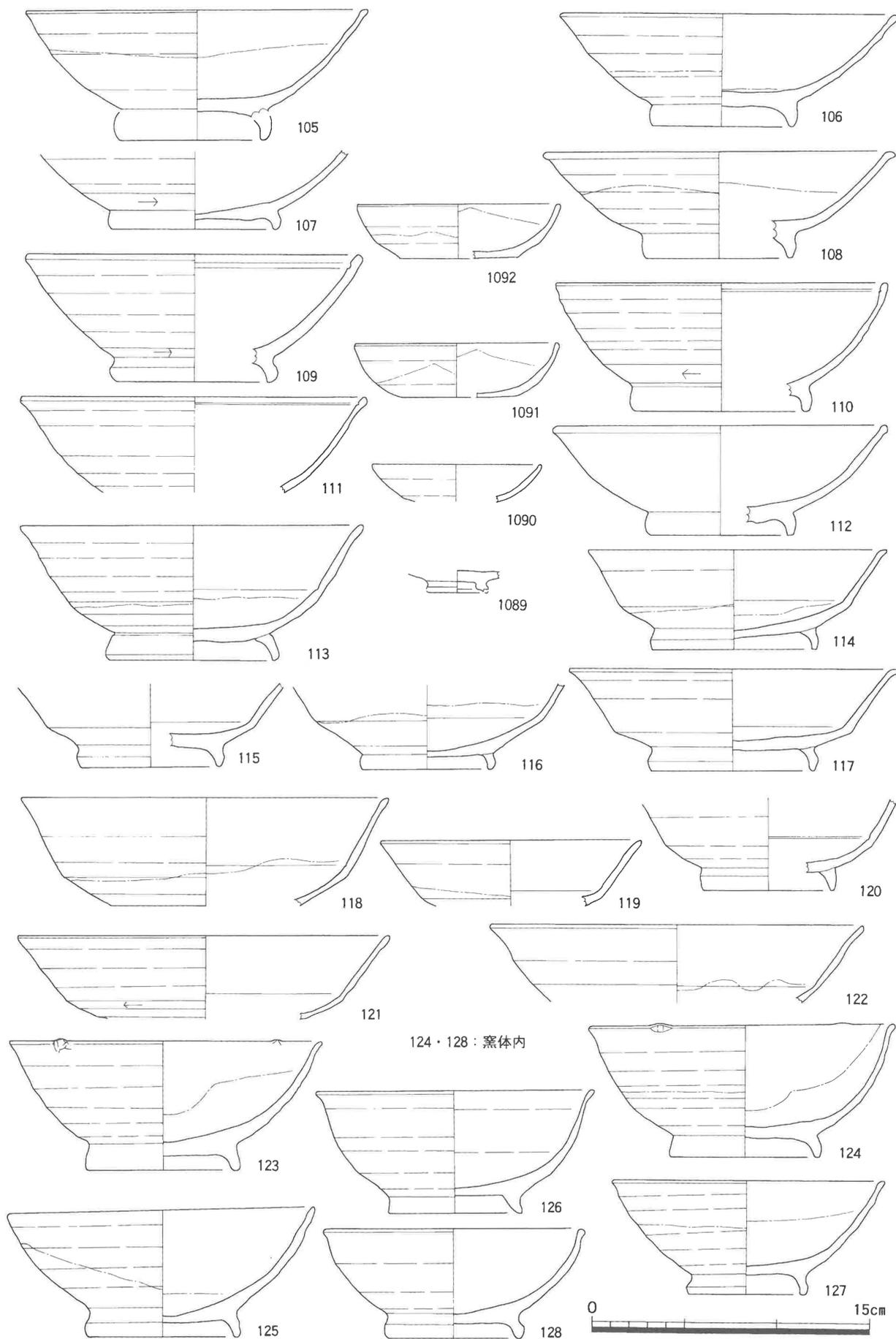
第33図 5号窯出土遺物一1 (1/3)



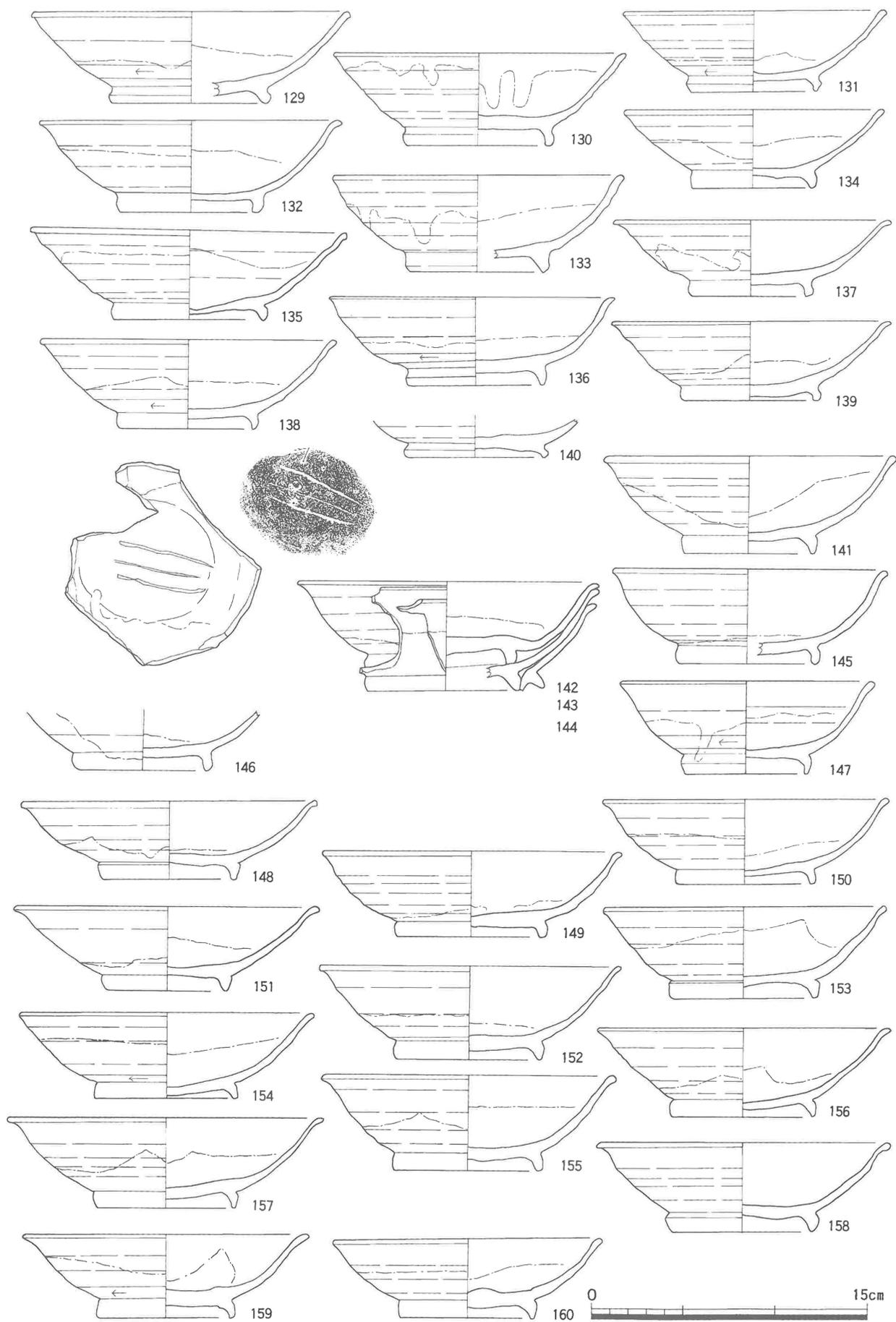
第34図 5号窯出土遺物—2 (1/3)



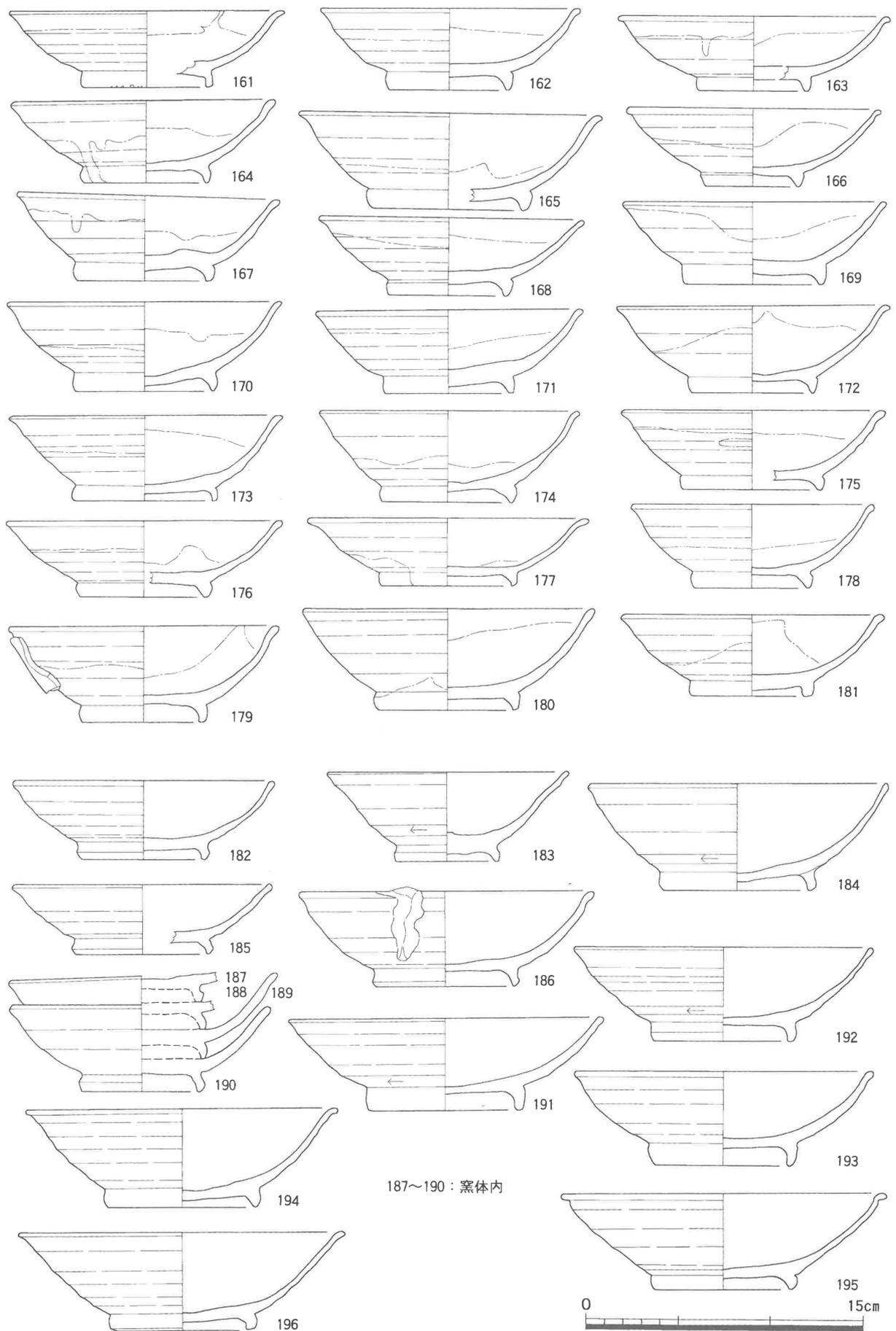
第35図 5号窯出土遺物一3 (1/3)



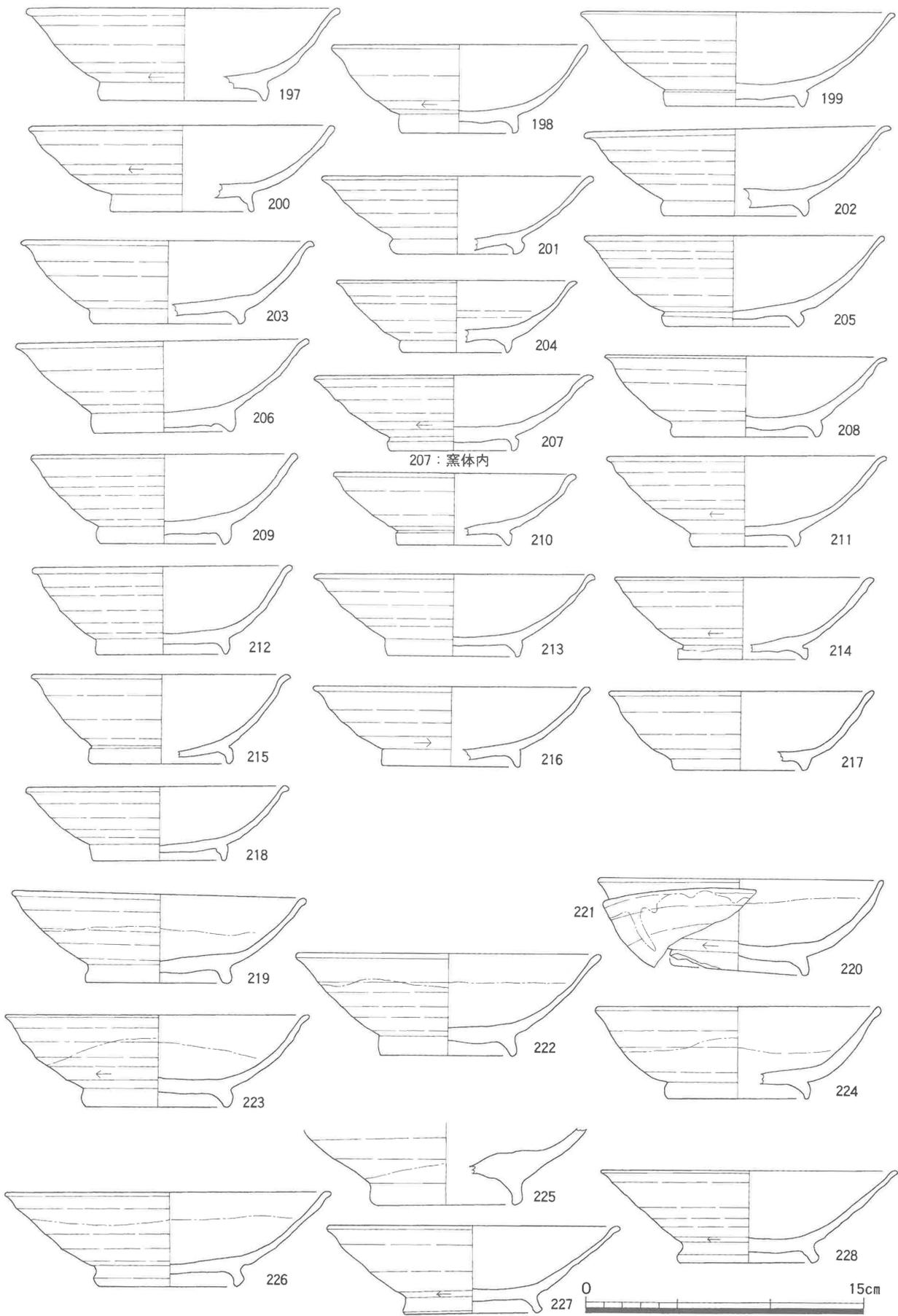
第36図 5号窯出土遺物一4 (1/3)



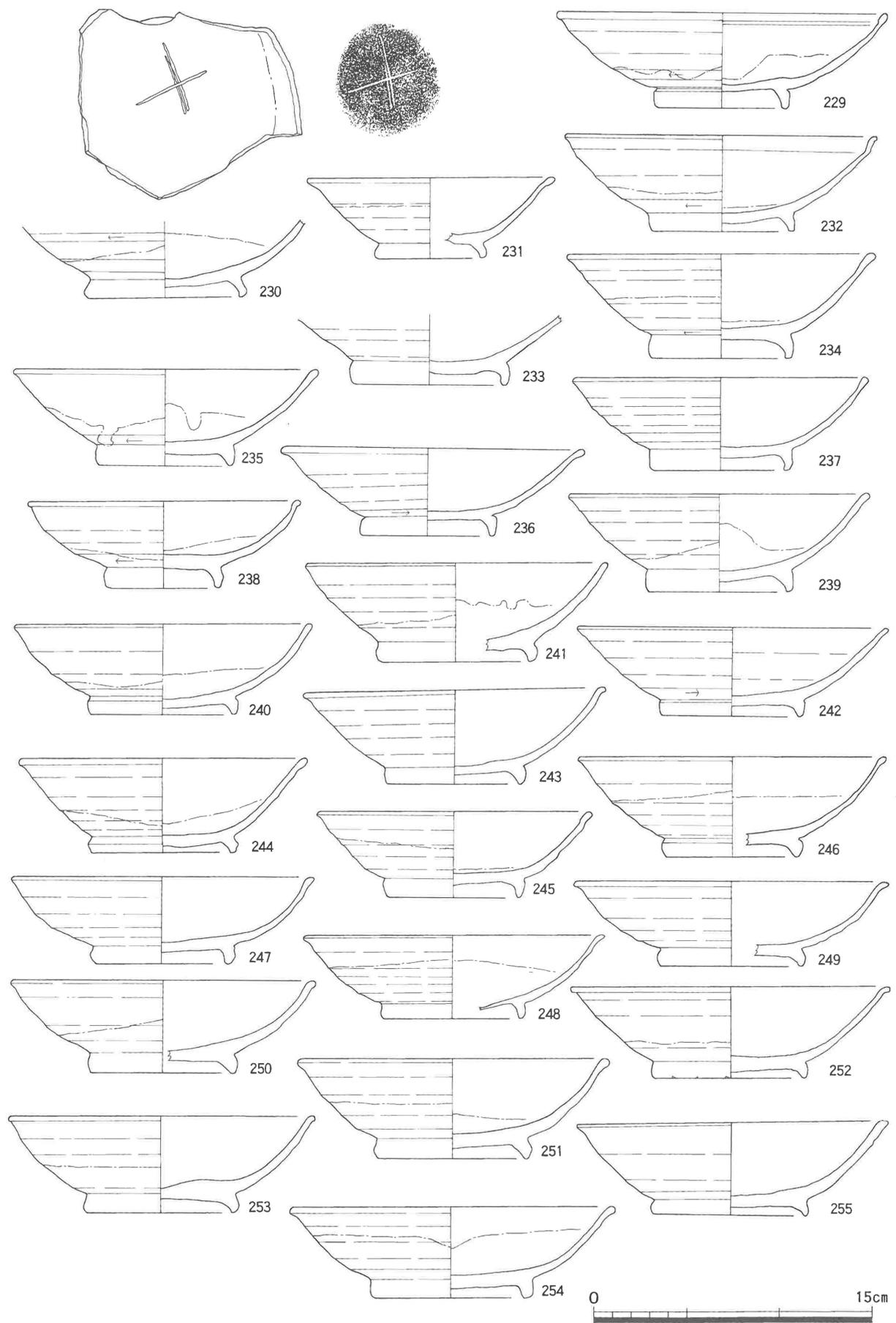
第37图 5号窯出土遺物—5 (1/3)



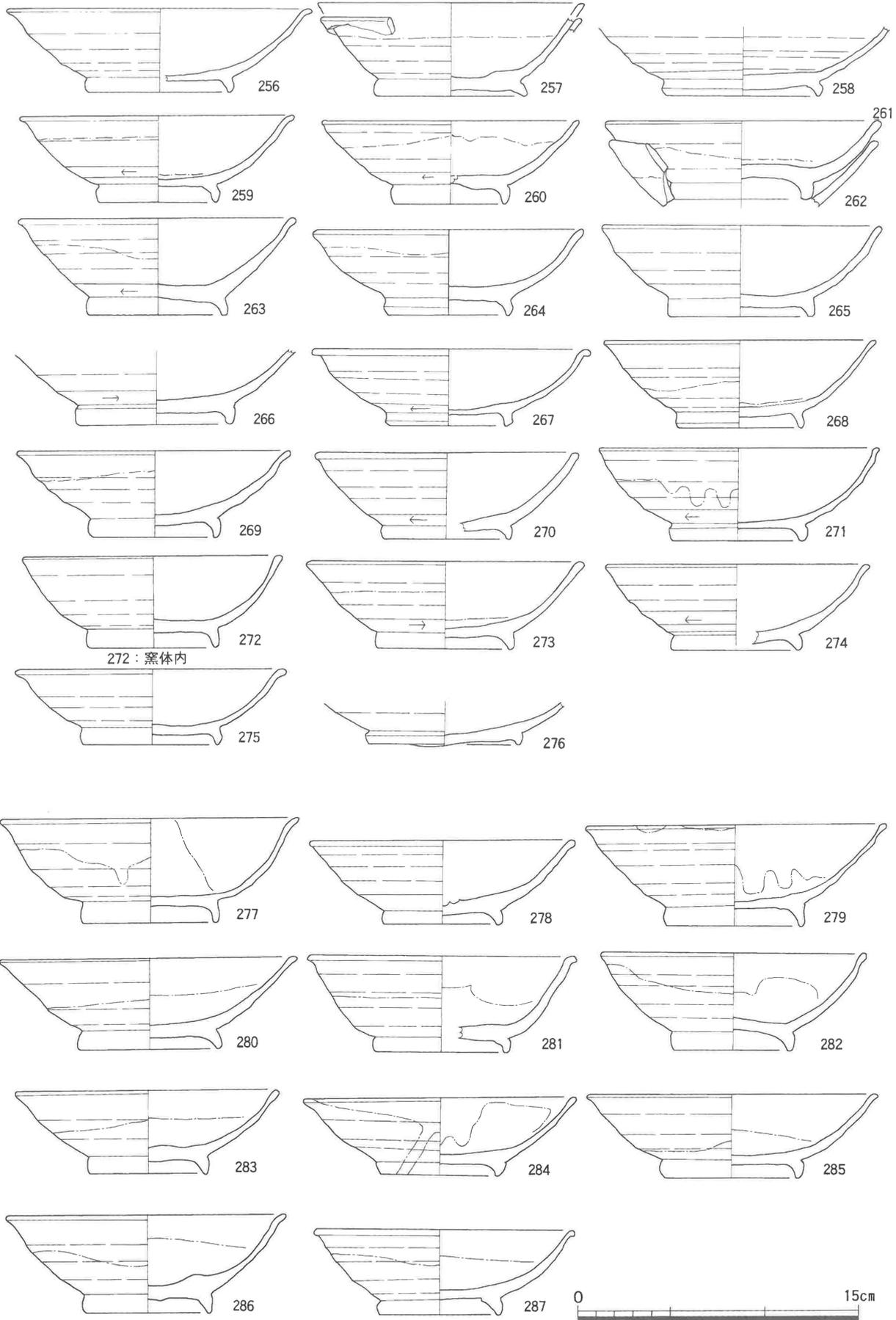
第38図 5号窯出土遺物一6 (1/3)



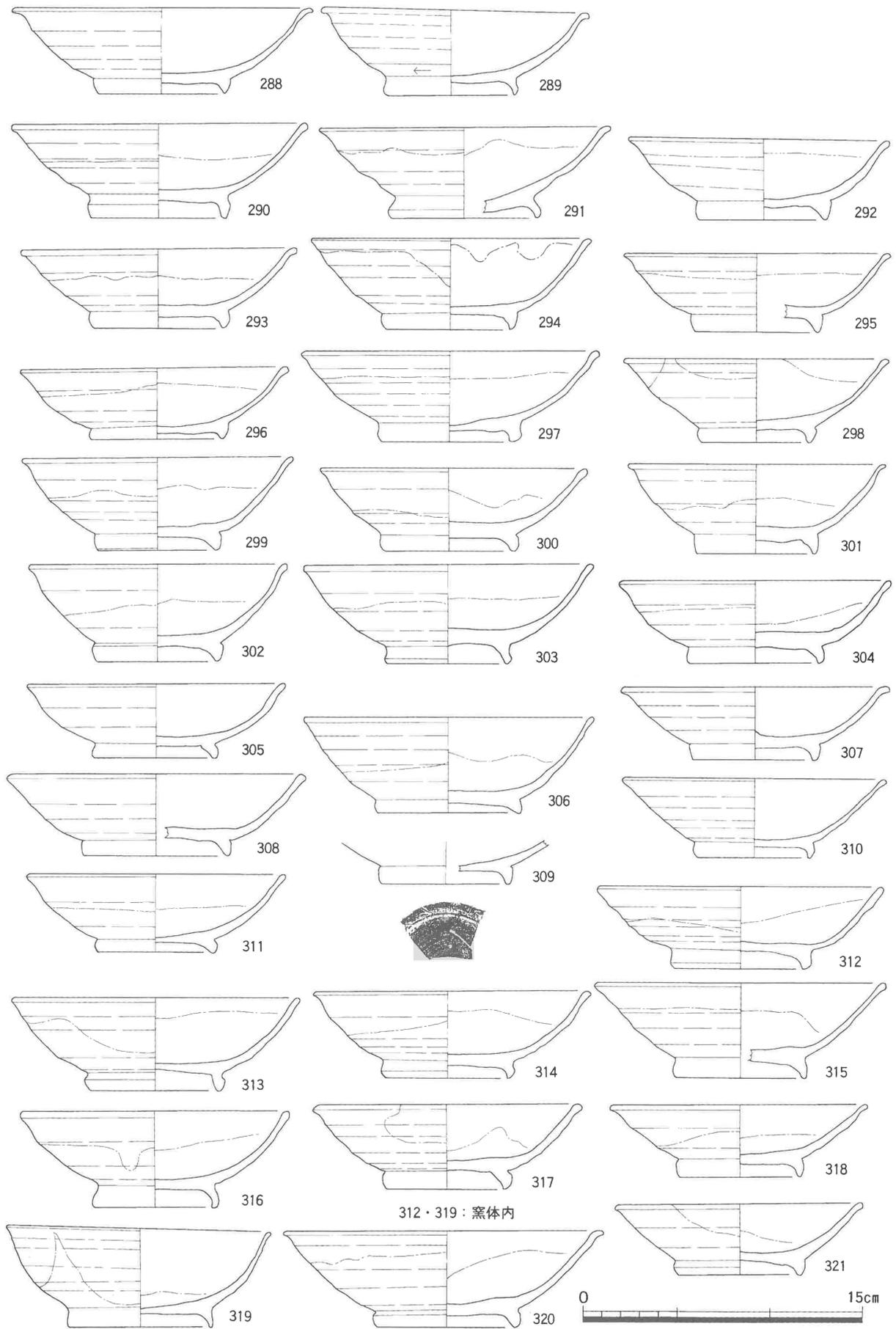
第39図 5号窯出土遺物一7 (1/3)



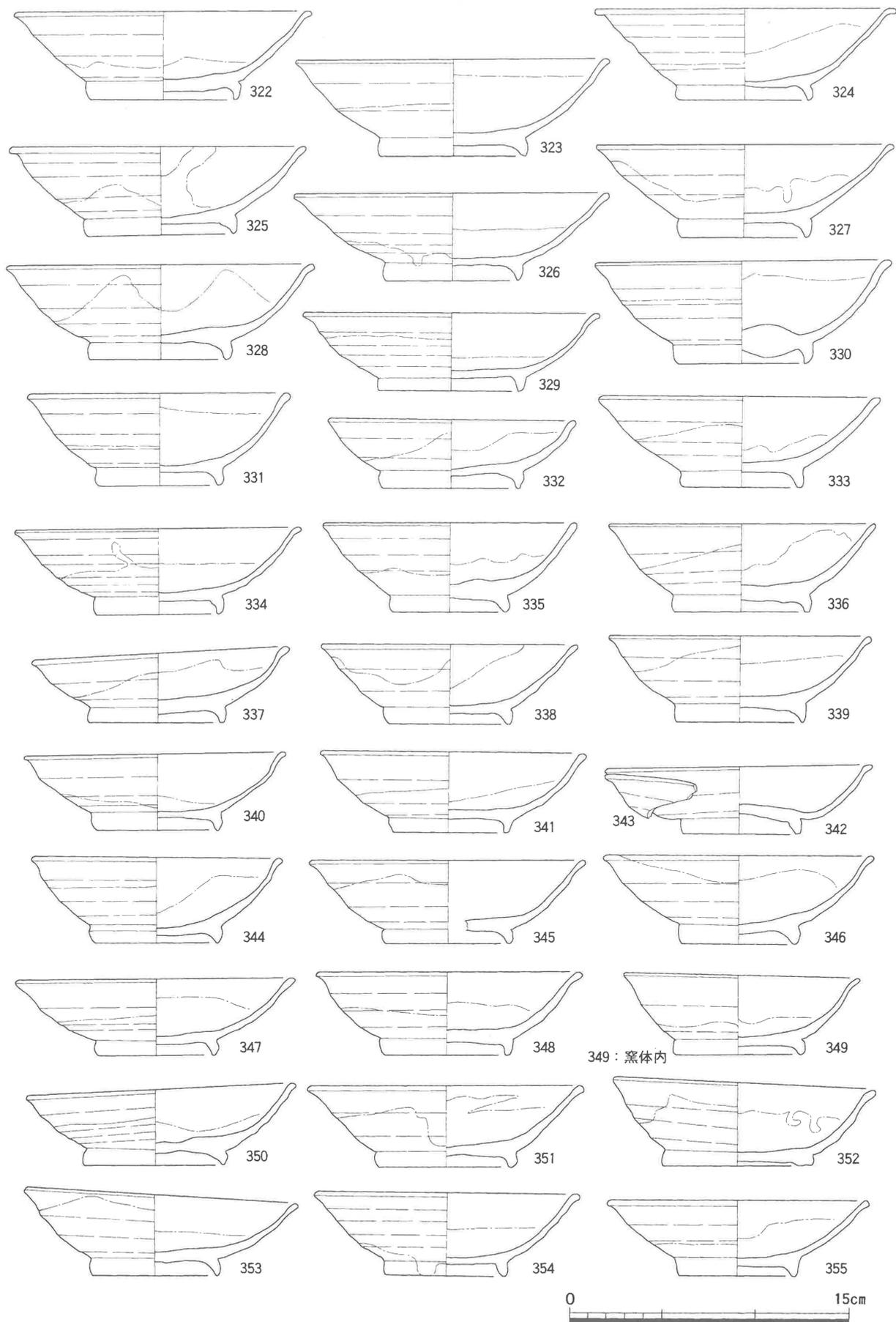
第40图 5号窯出土遺物一8 (1/3)



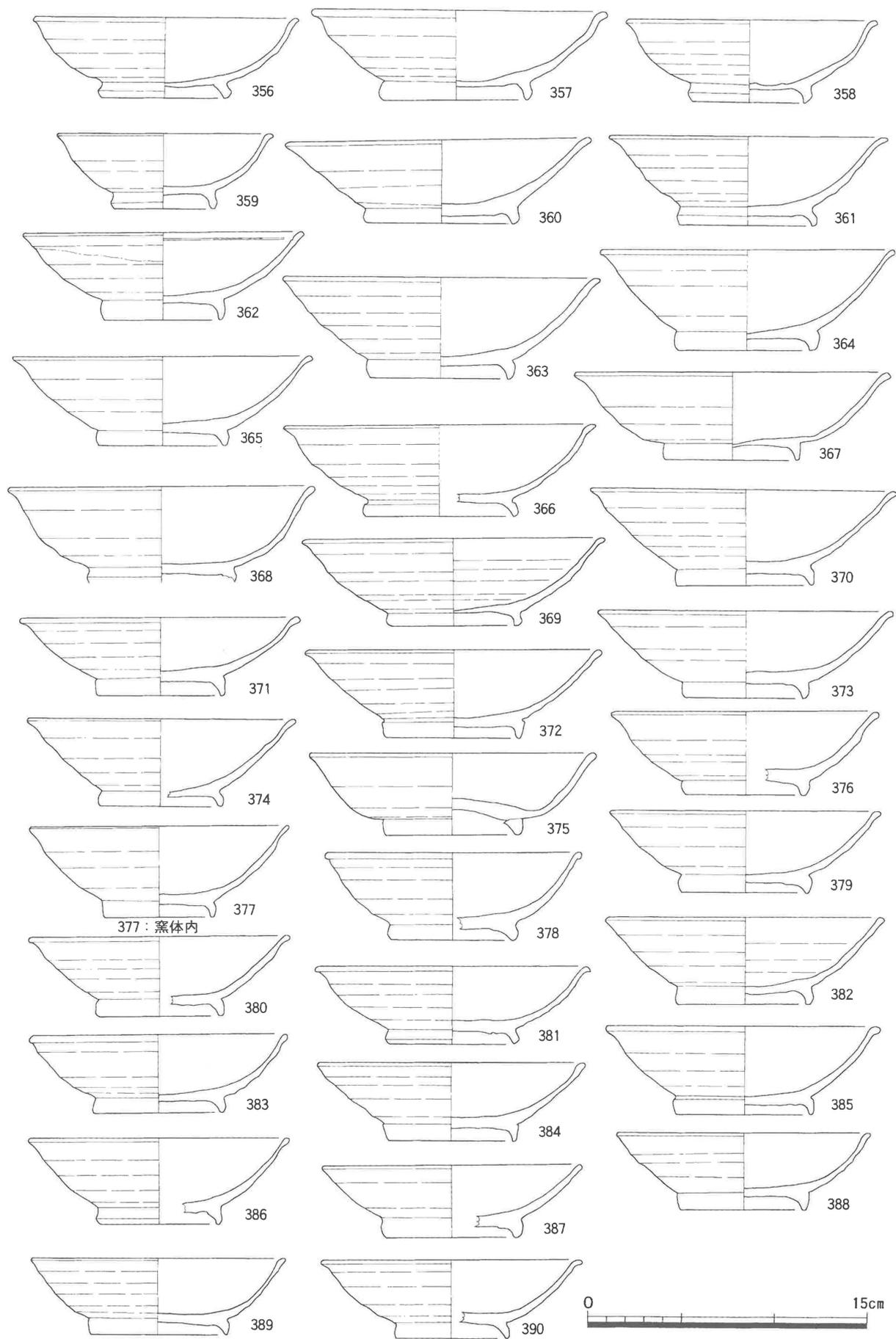
第41図 5号窯出土遺物-9 (1/3)



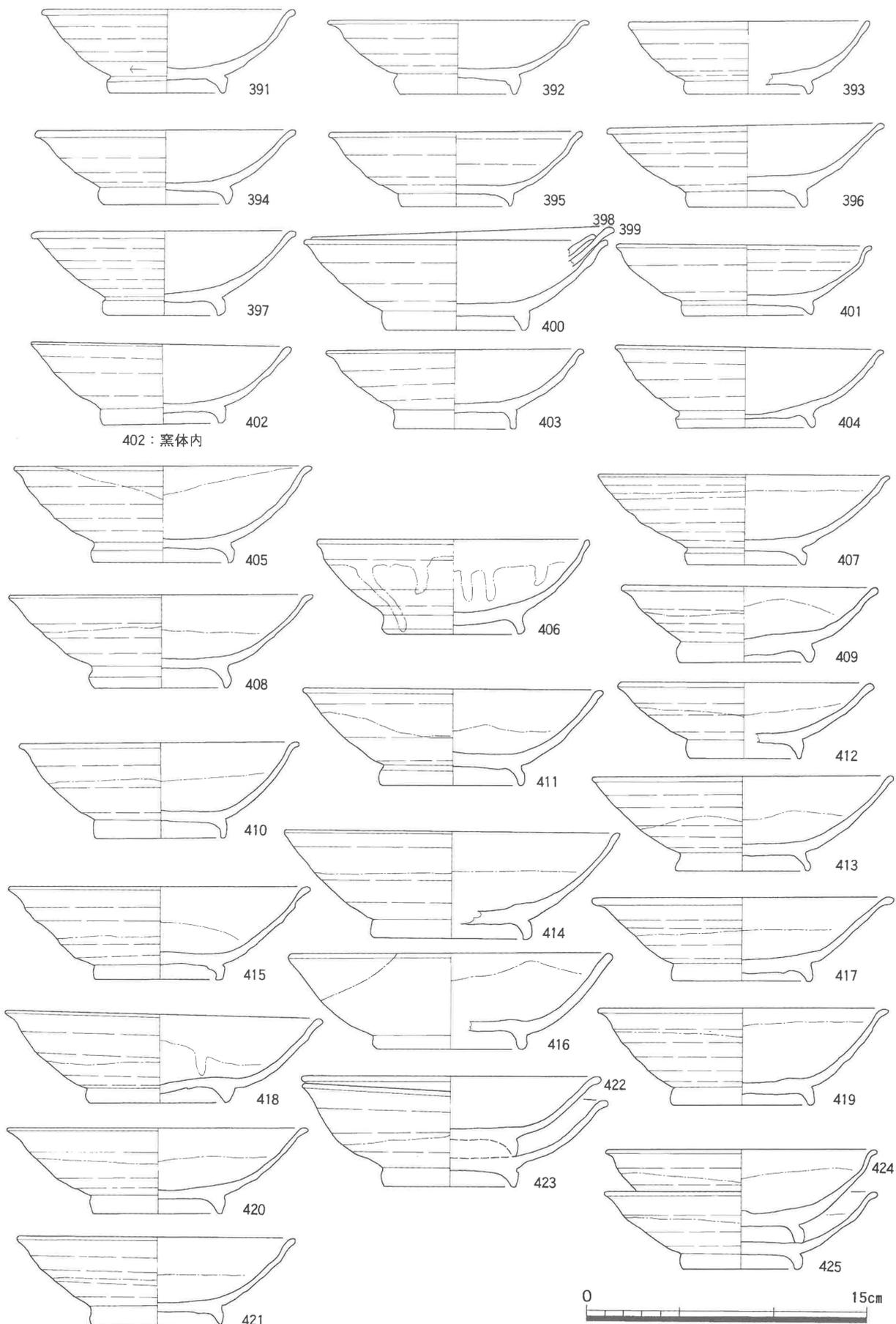
第42図 5号窯出土遺物一10 (1/3)



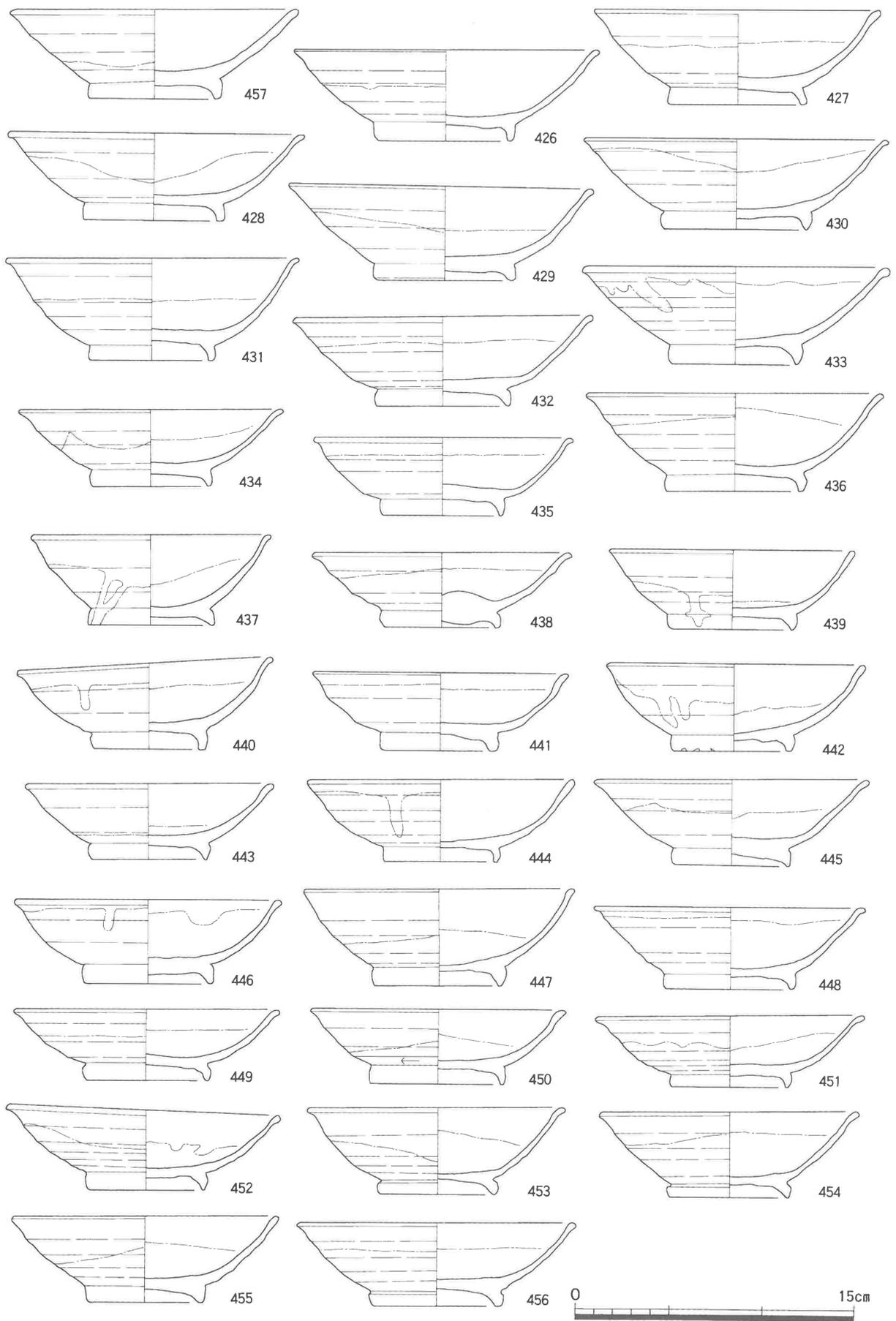
第43図 5号窯出土遺物一11 (1/3)



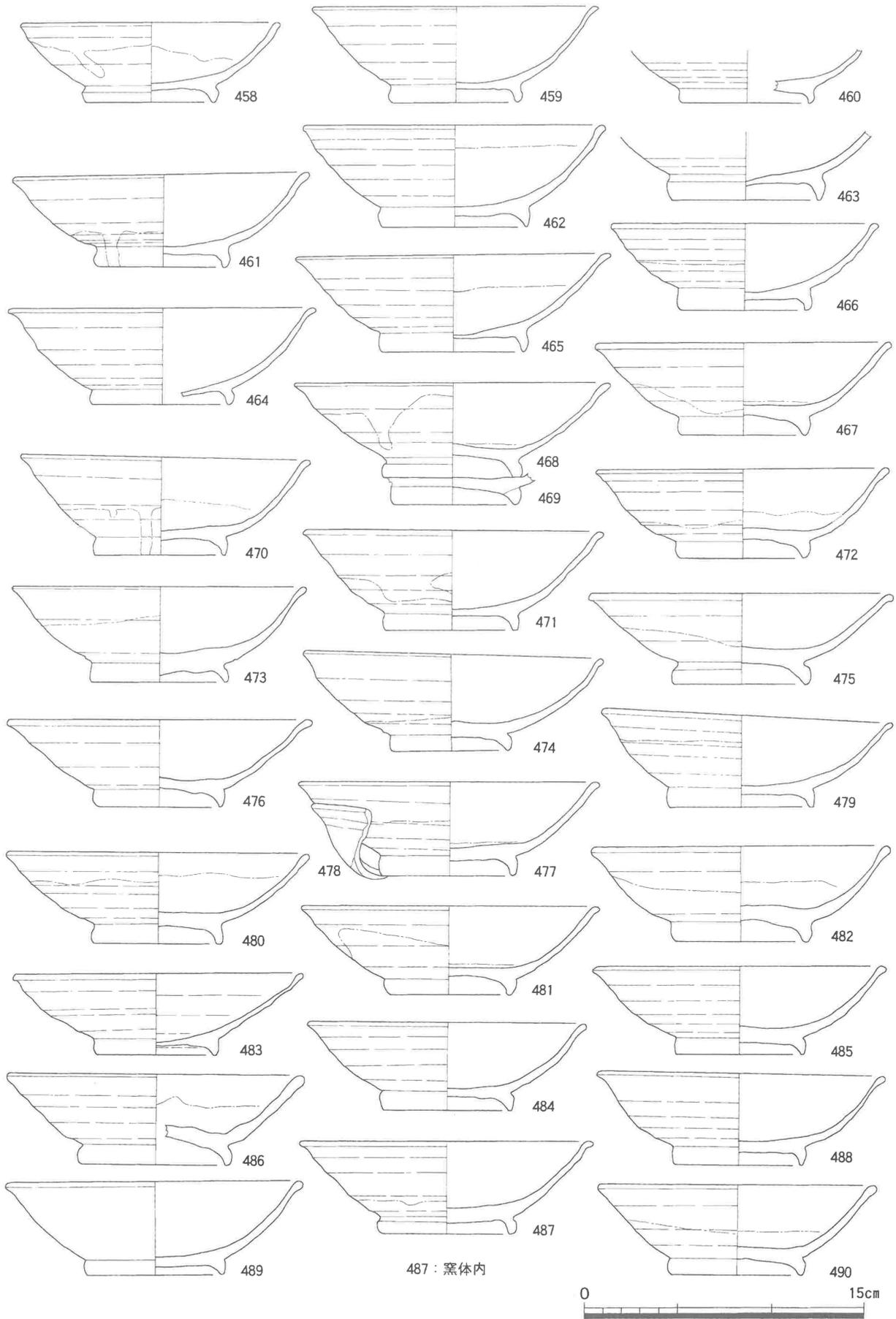
第44図 5号窯出土遺物一12 (1/3)



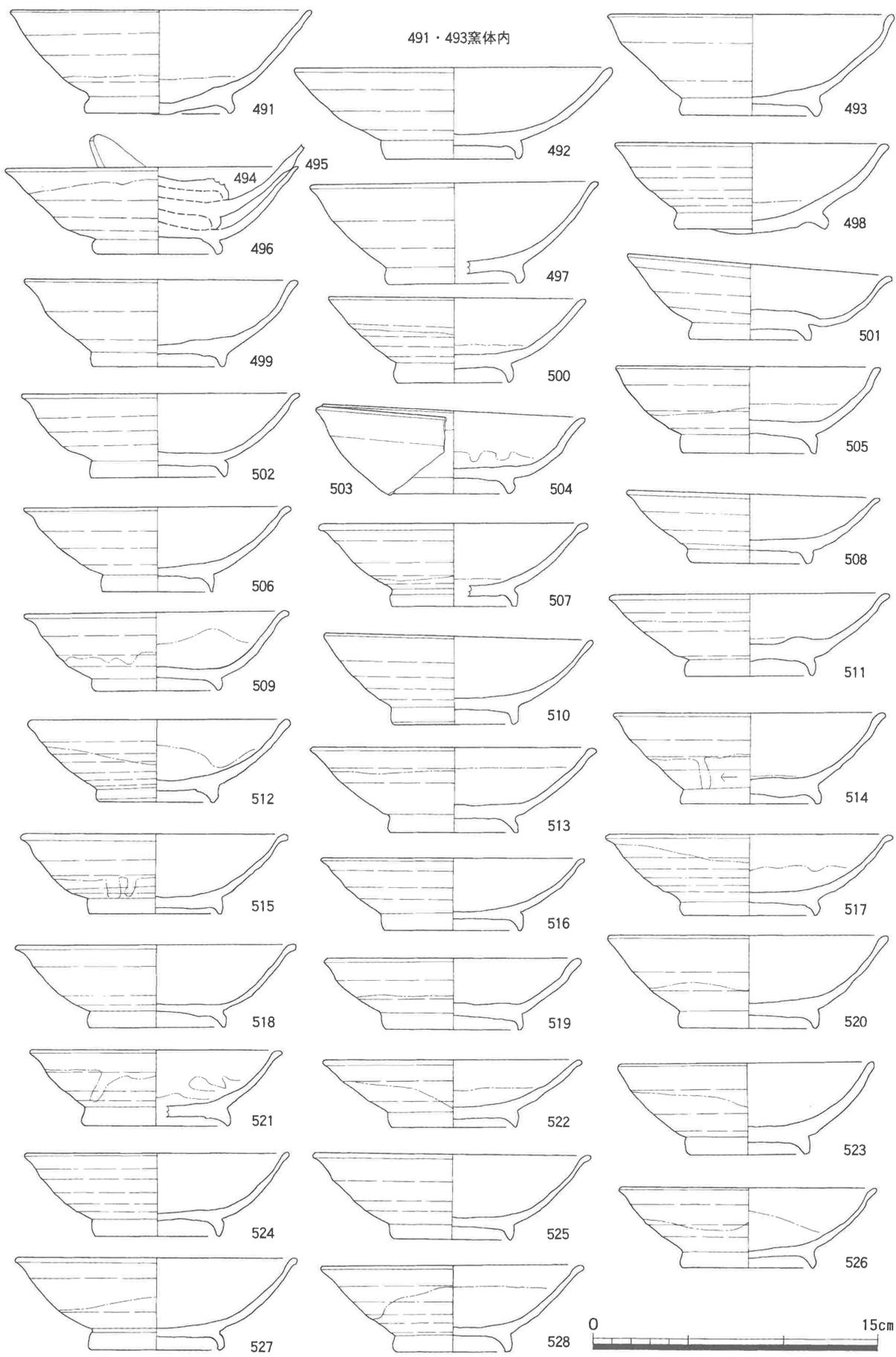
第45図 5号窯出土遺物一13 (1/3)



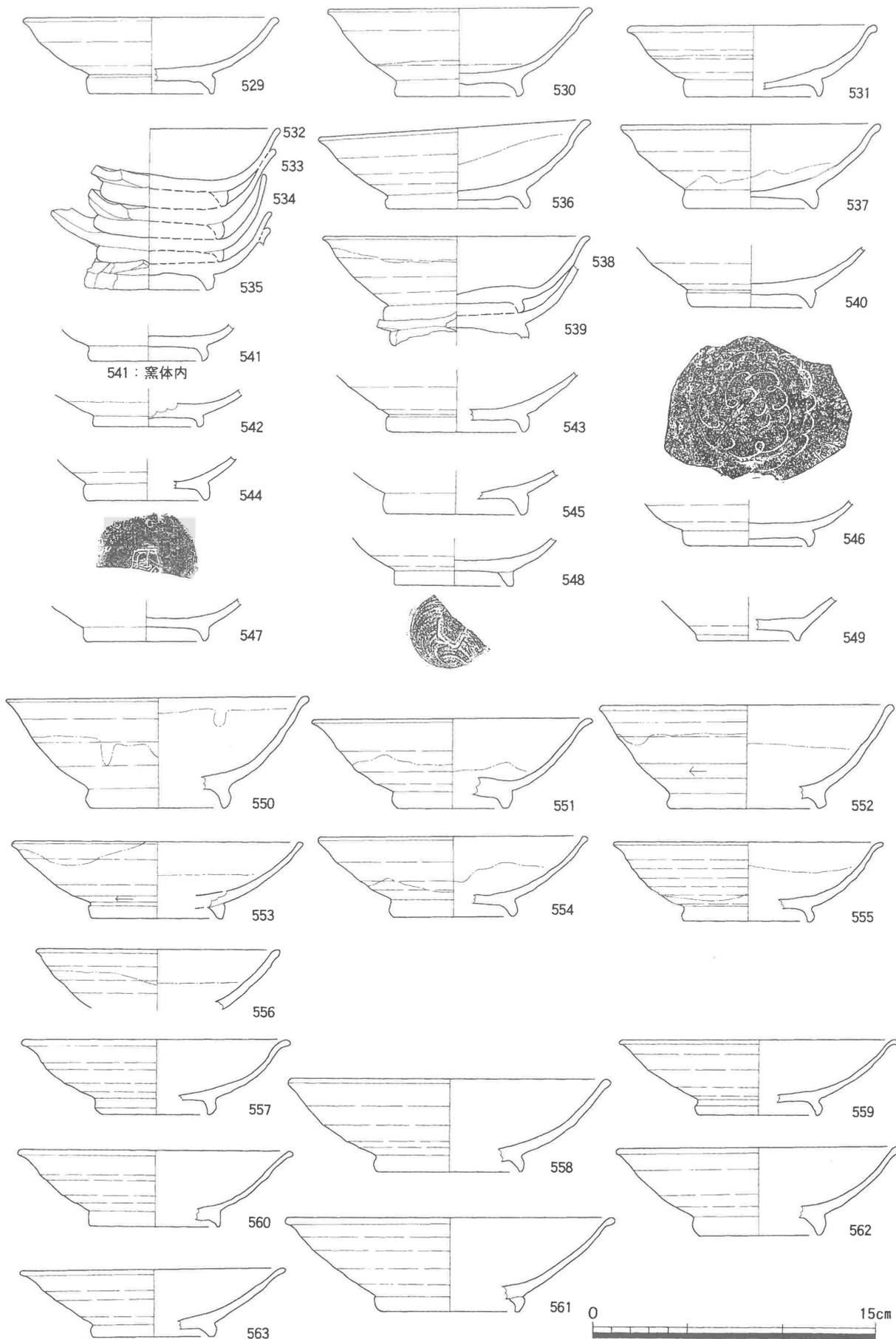
第46図 5号窯出土遺物-14 (1/3)



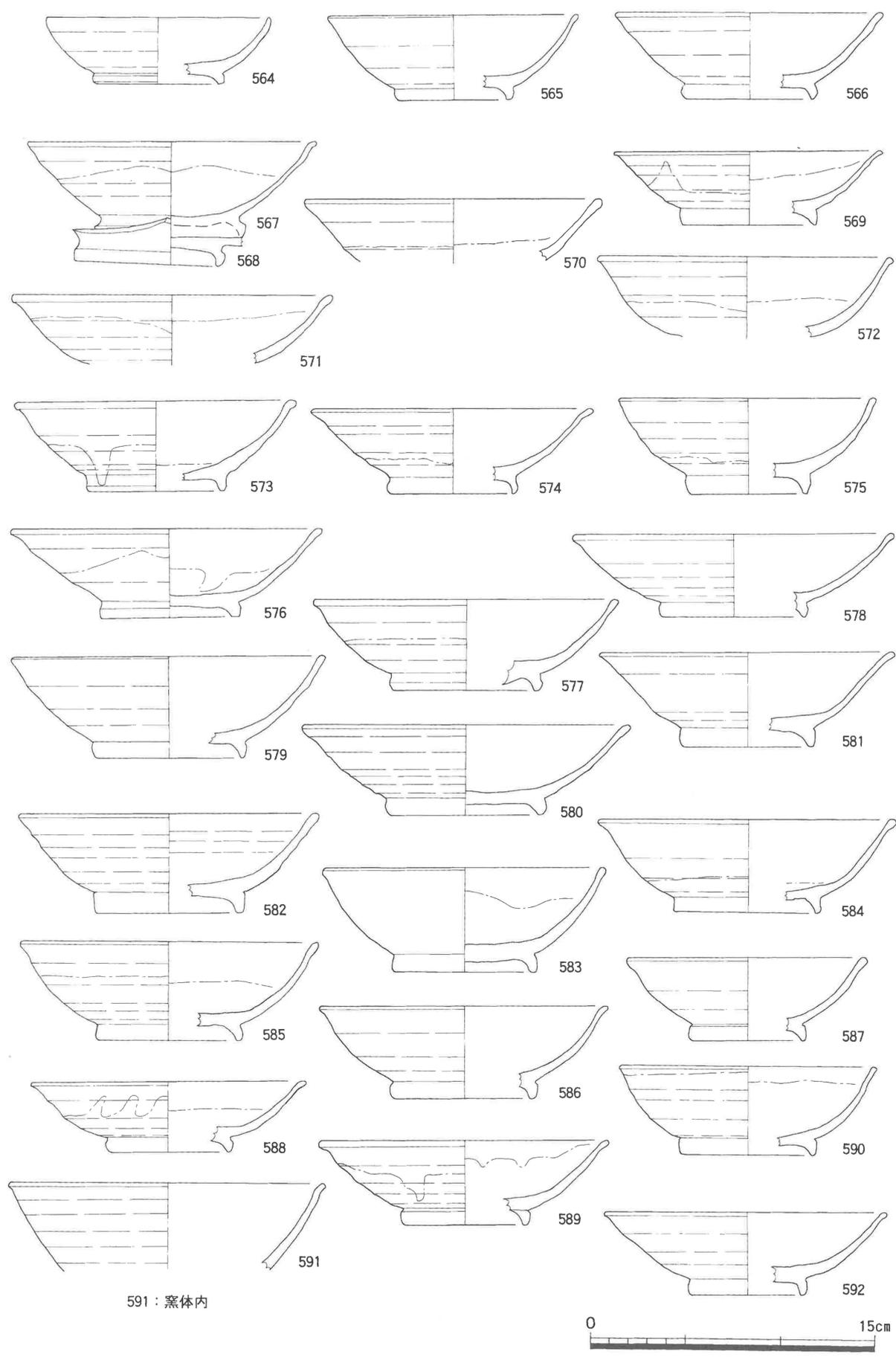
第47図 5号窯出土遺物-15 (1/3)



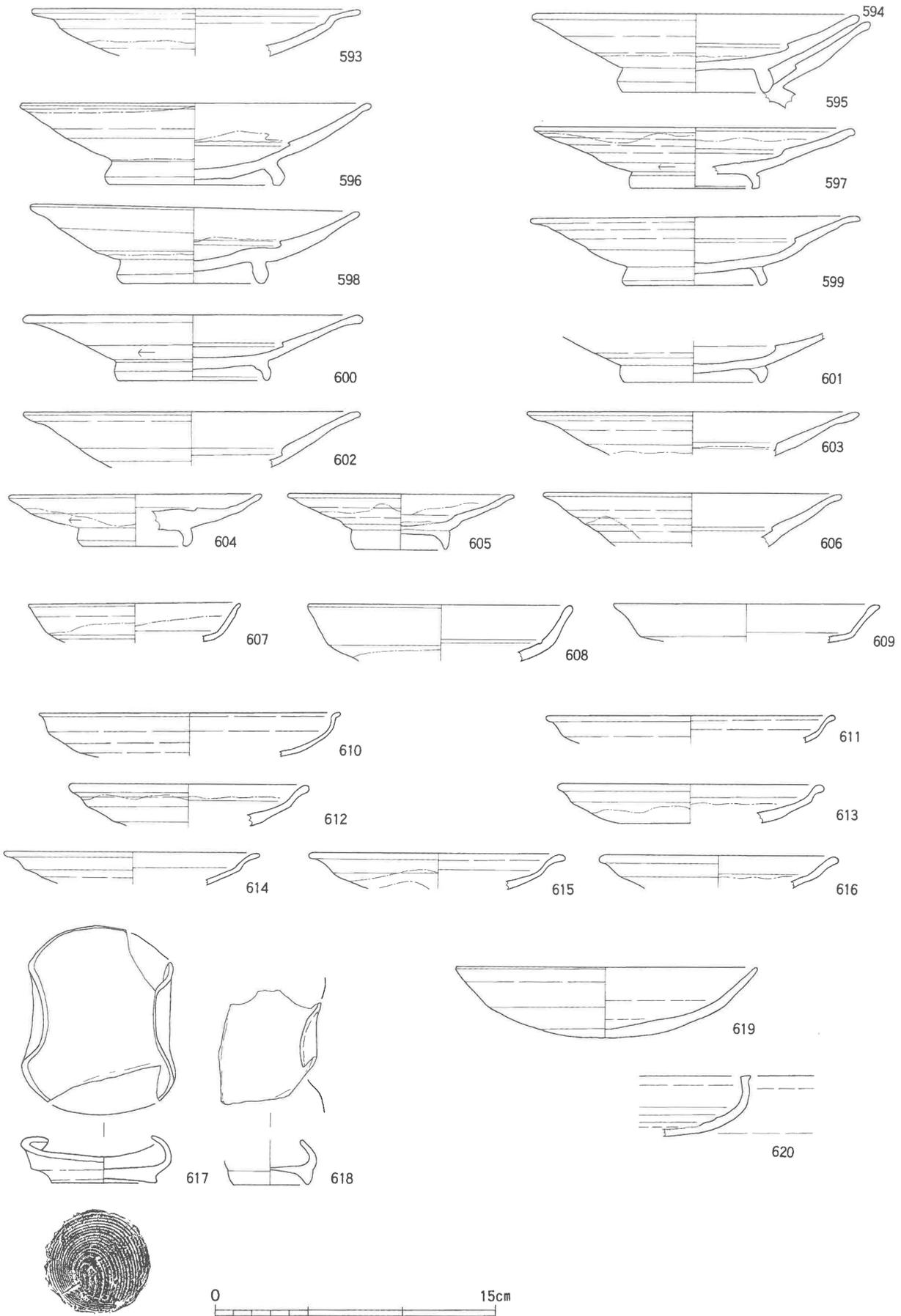
第48図 5号窯出土遺物-16 (1/3)



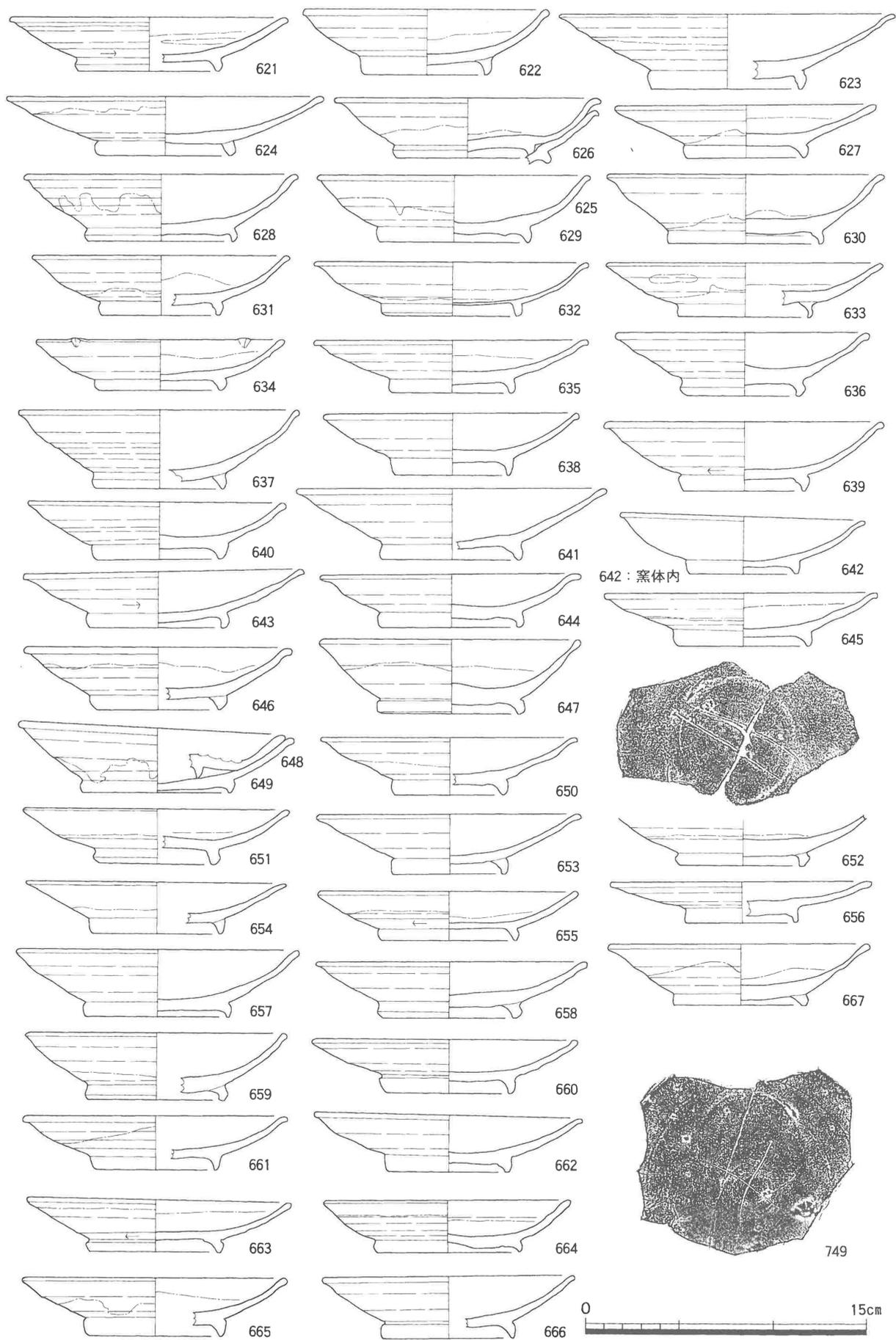
第49図 5号窯出土遺物-17 (1/3)



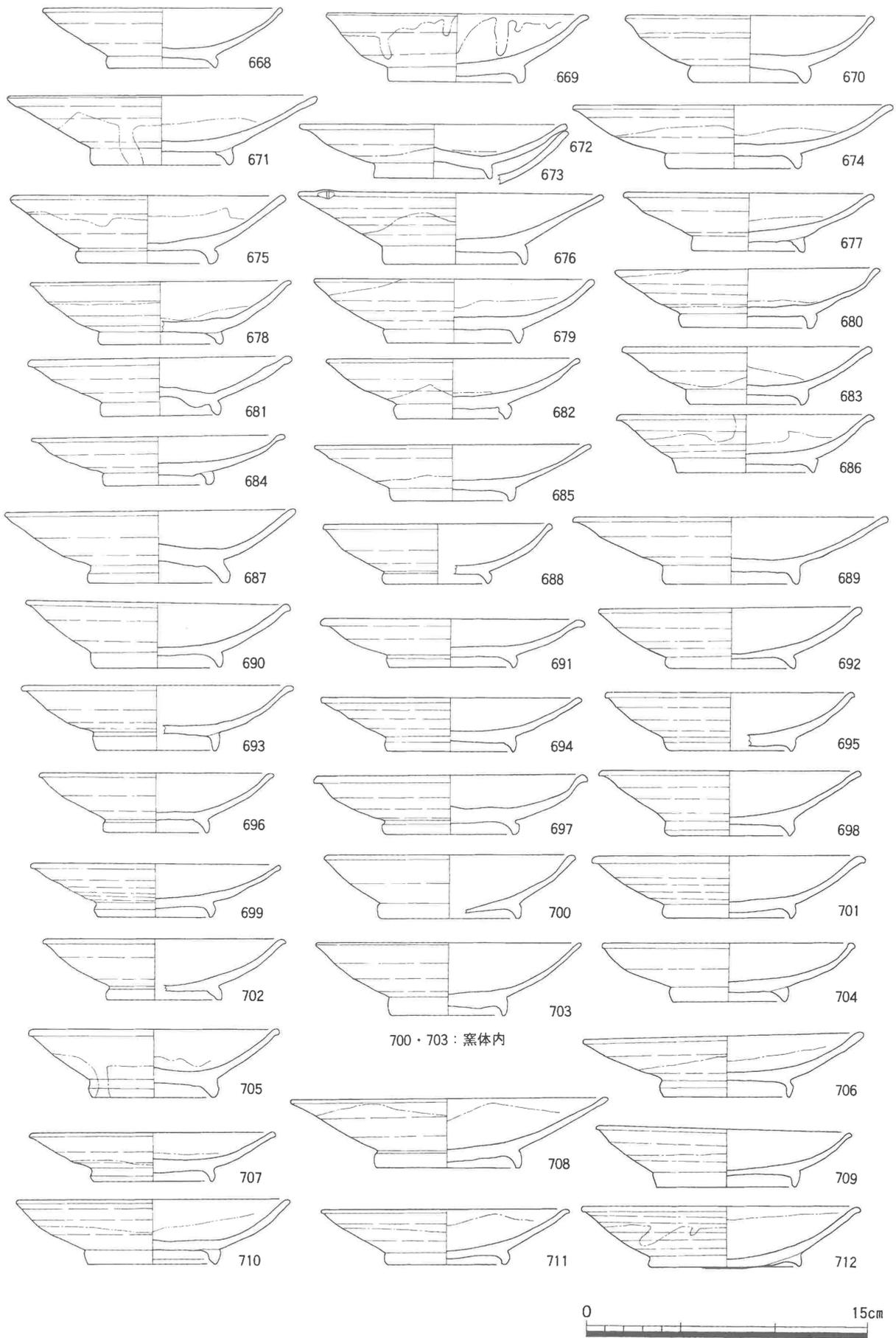
第50図 5号窯出土遺物-18 (1/3)



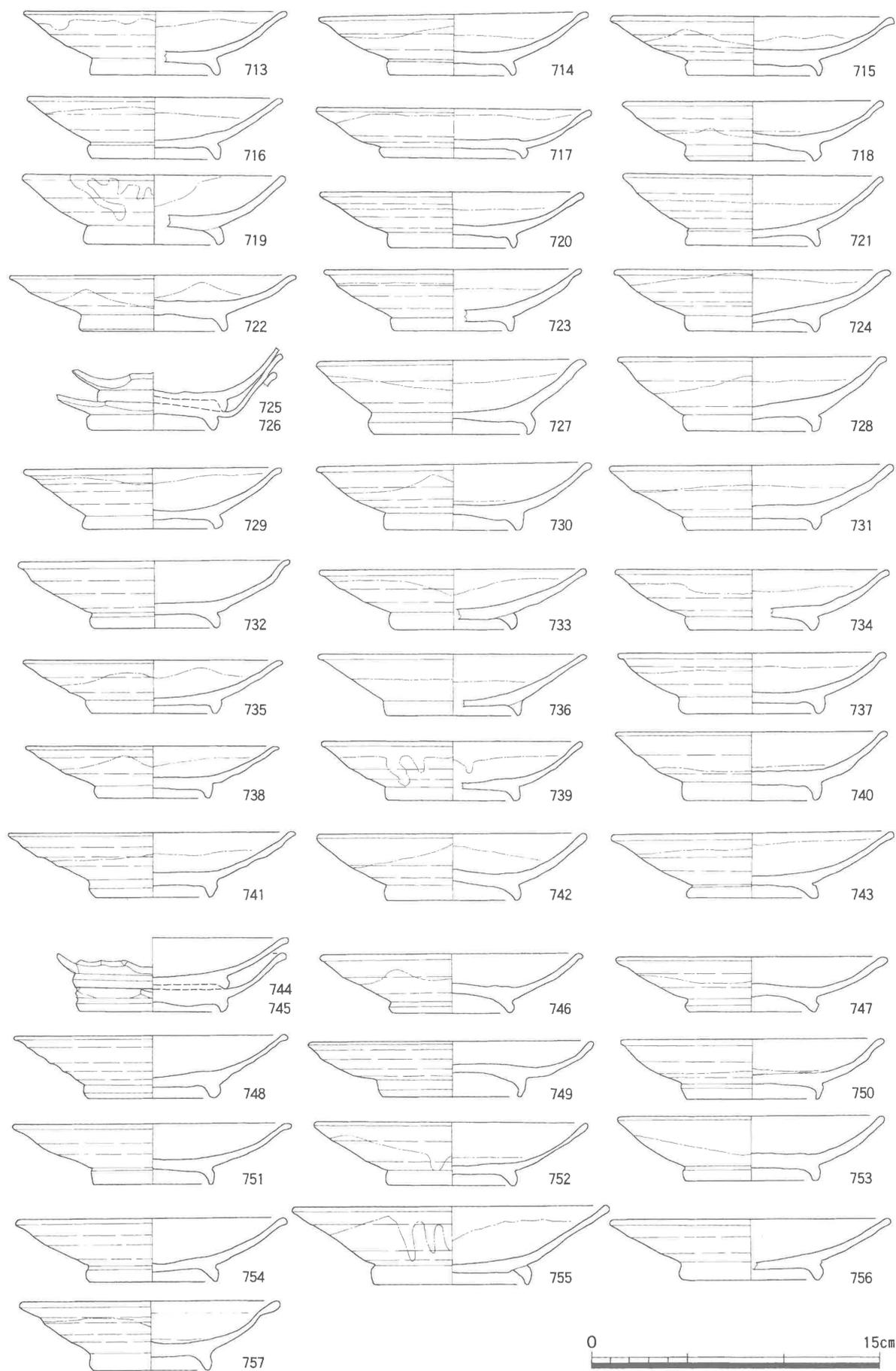
第51図 5号窯出土遺物一19 (1/3)



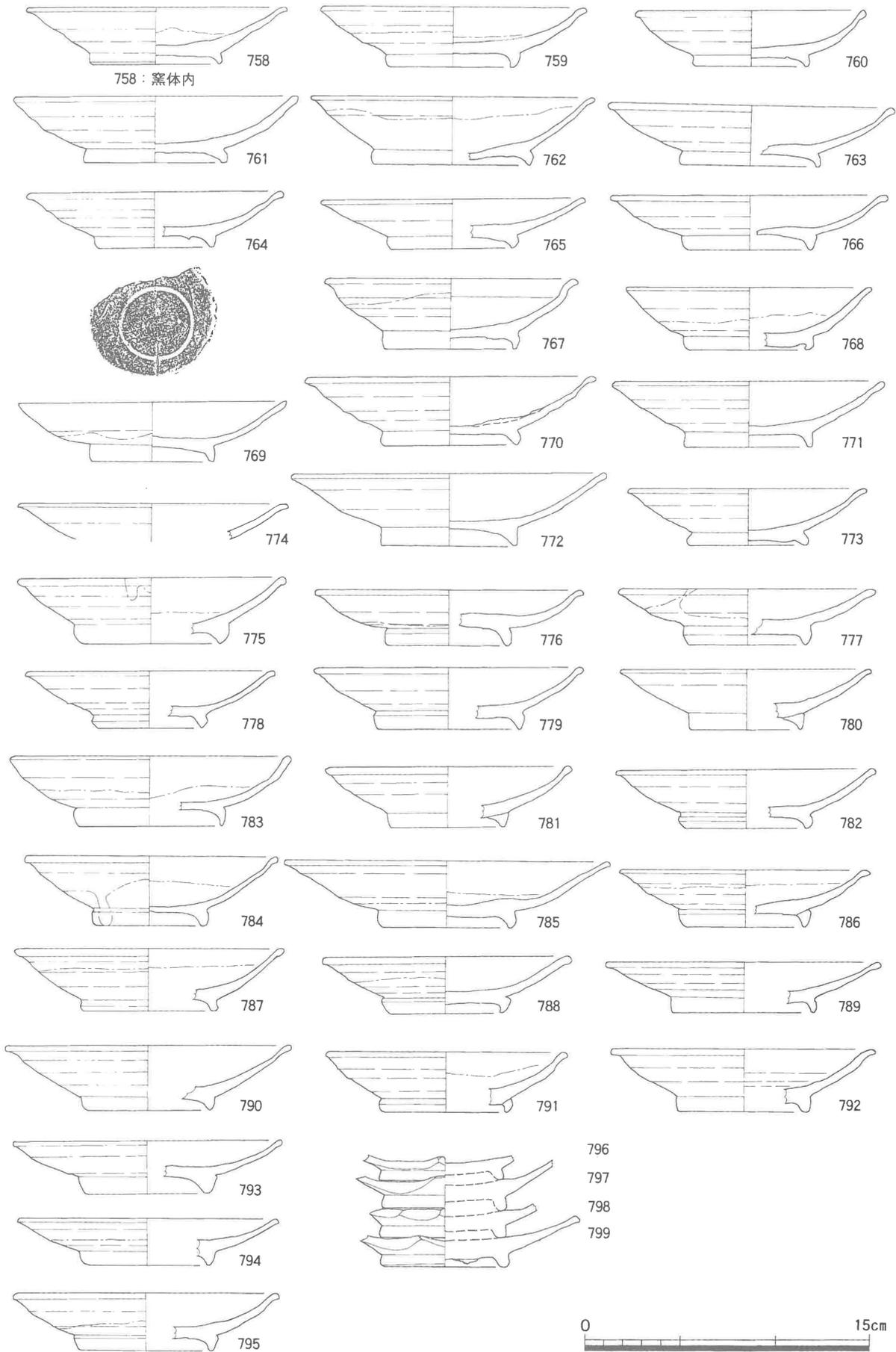
第52図 5号窯出土遺物一20 (1/3)



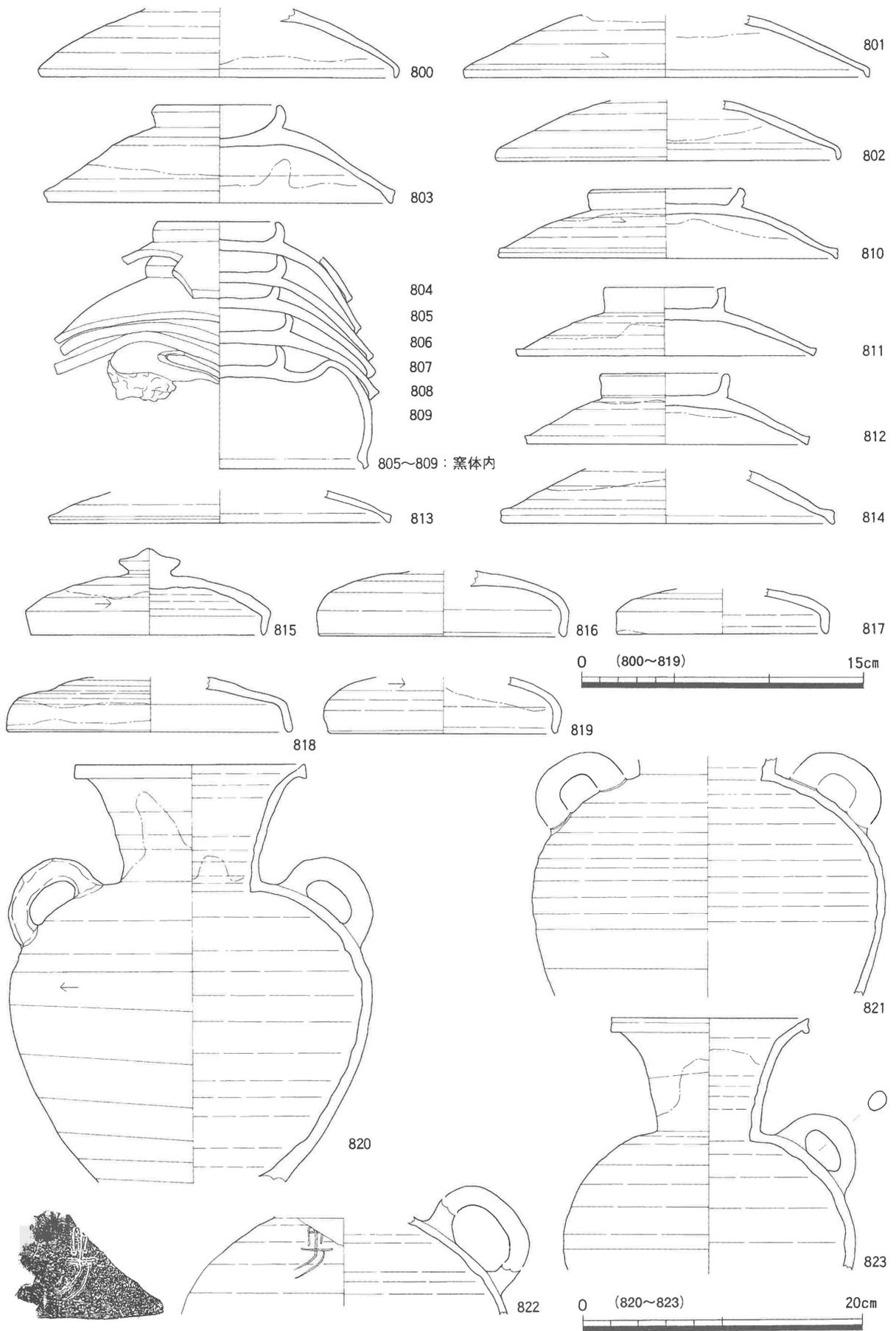
第53図 5号窯出土遺物-21 (1/3)



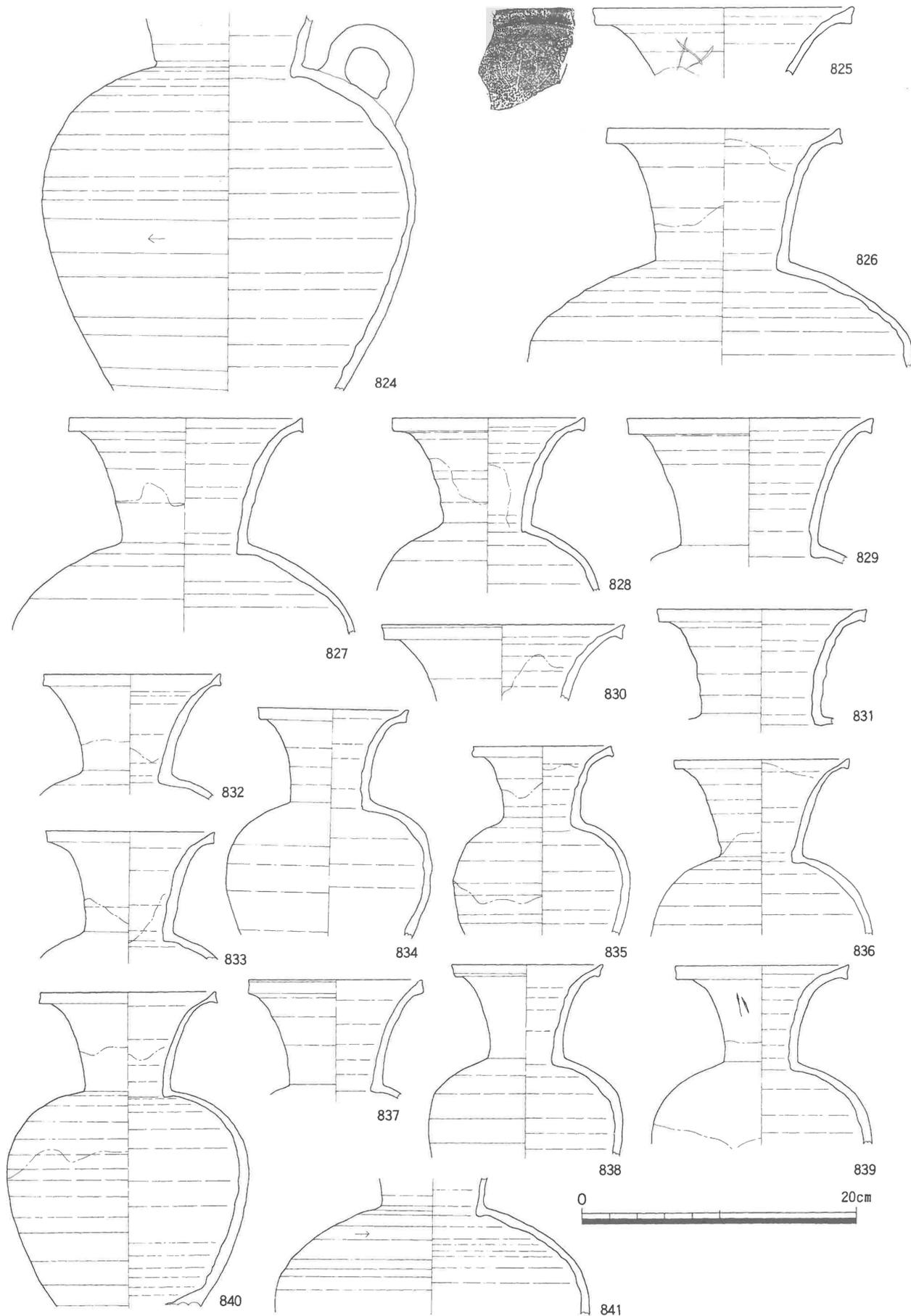
第54図 5号窯出土遺物一22 (1/3)



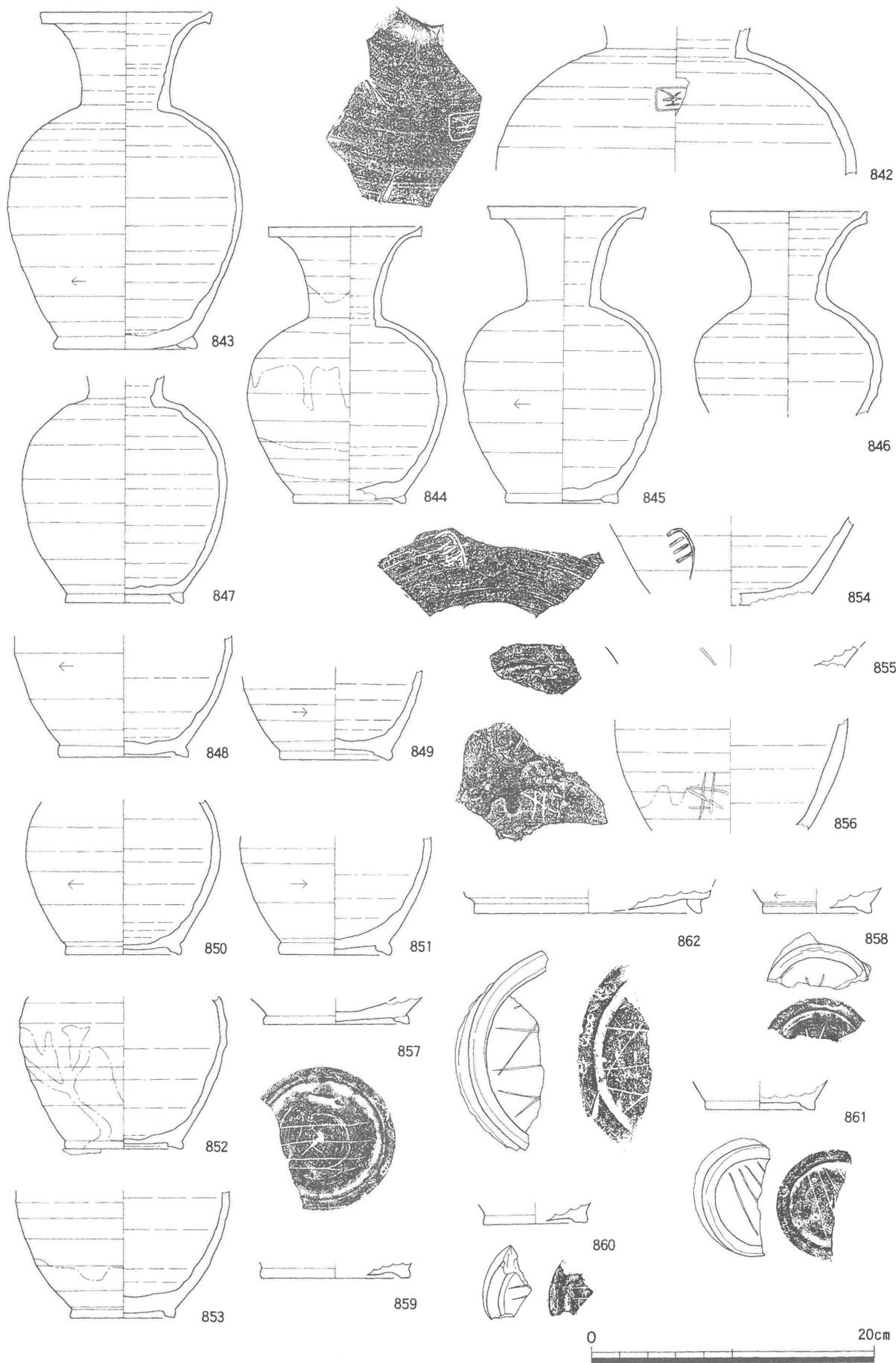
第55図 5号窯出土遺物-23 (1/3)



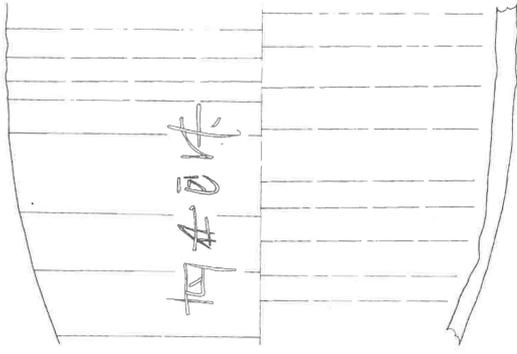
第56図 5号窯出土遺物一24 (1/3・1/4)



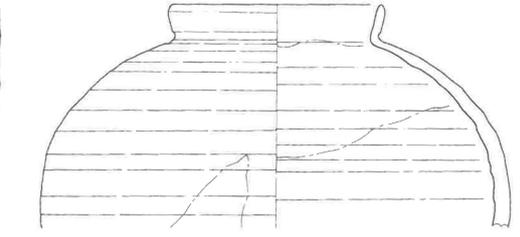
第57図 5号窯出土遺物一25 (1/4)



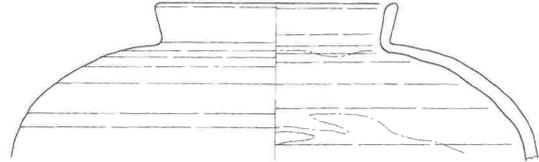
第58図 5号窯出土遺物-26 (1/4)



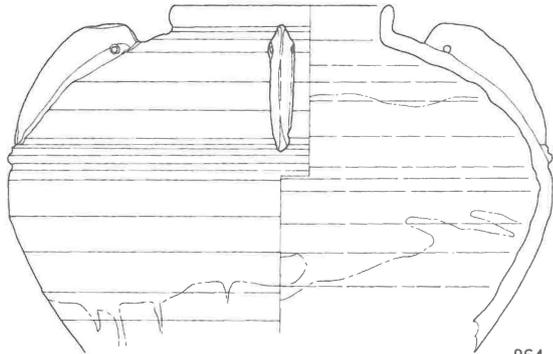
863



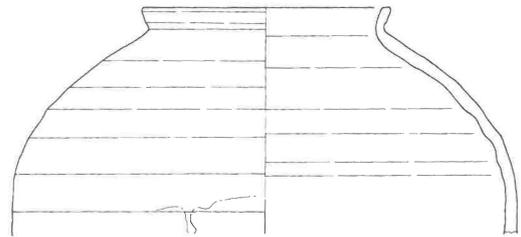
866



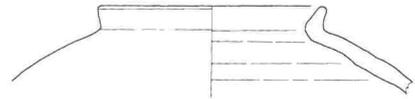
867



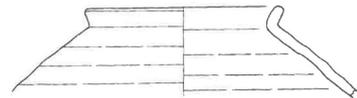
864



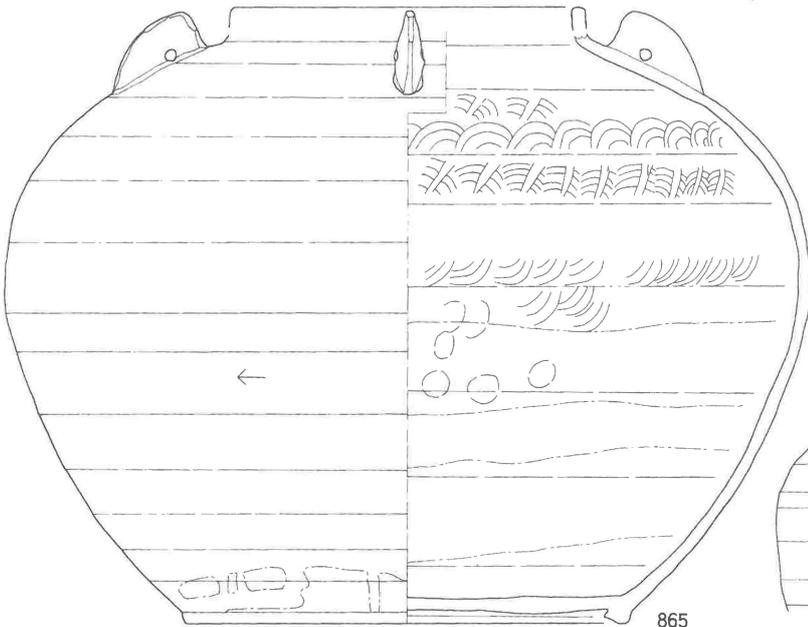
868



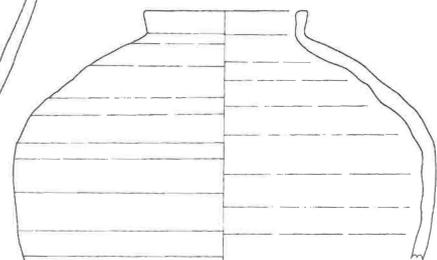
869



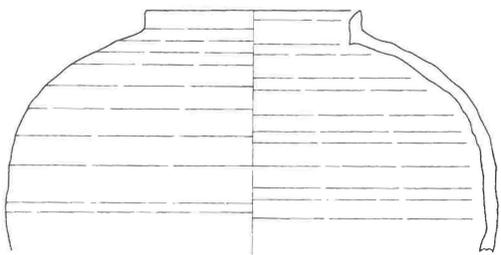
870



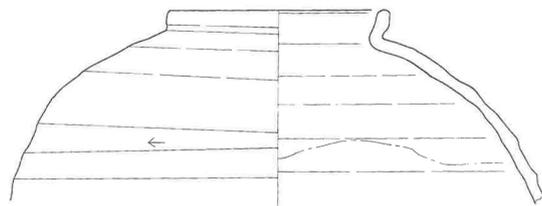
865



871



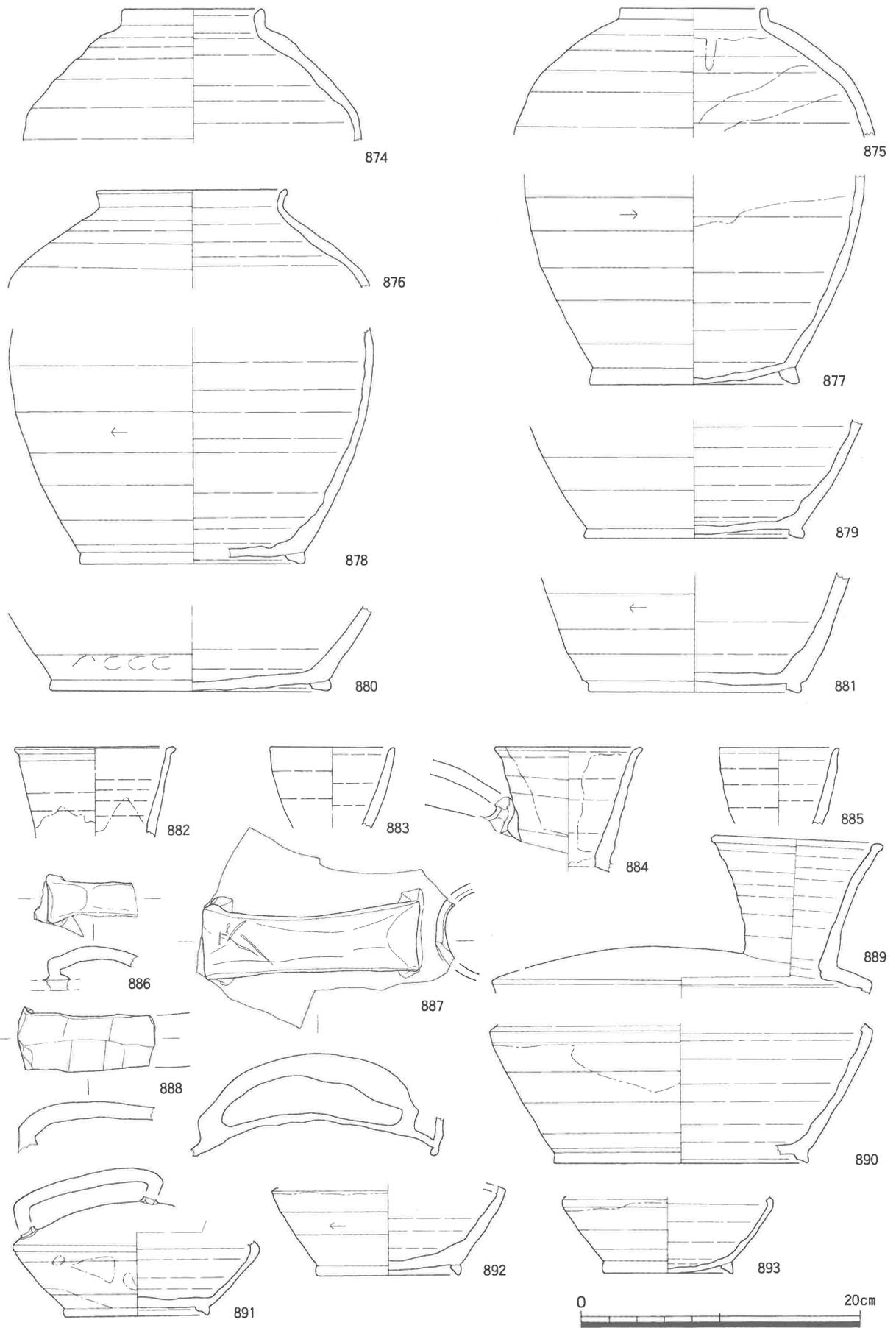
872



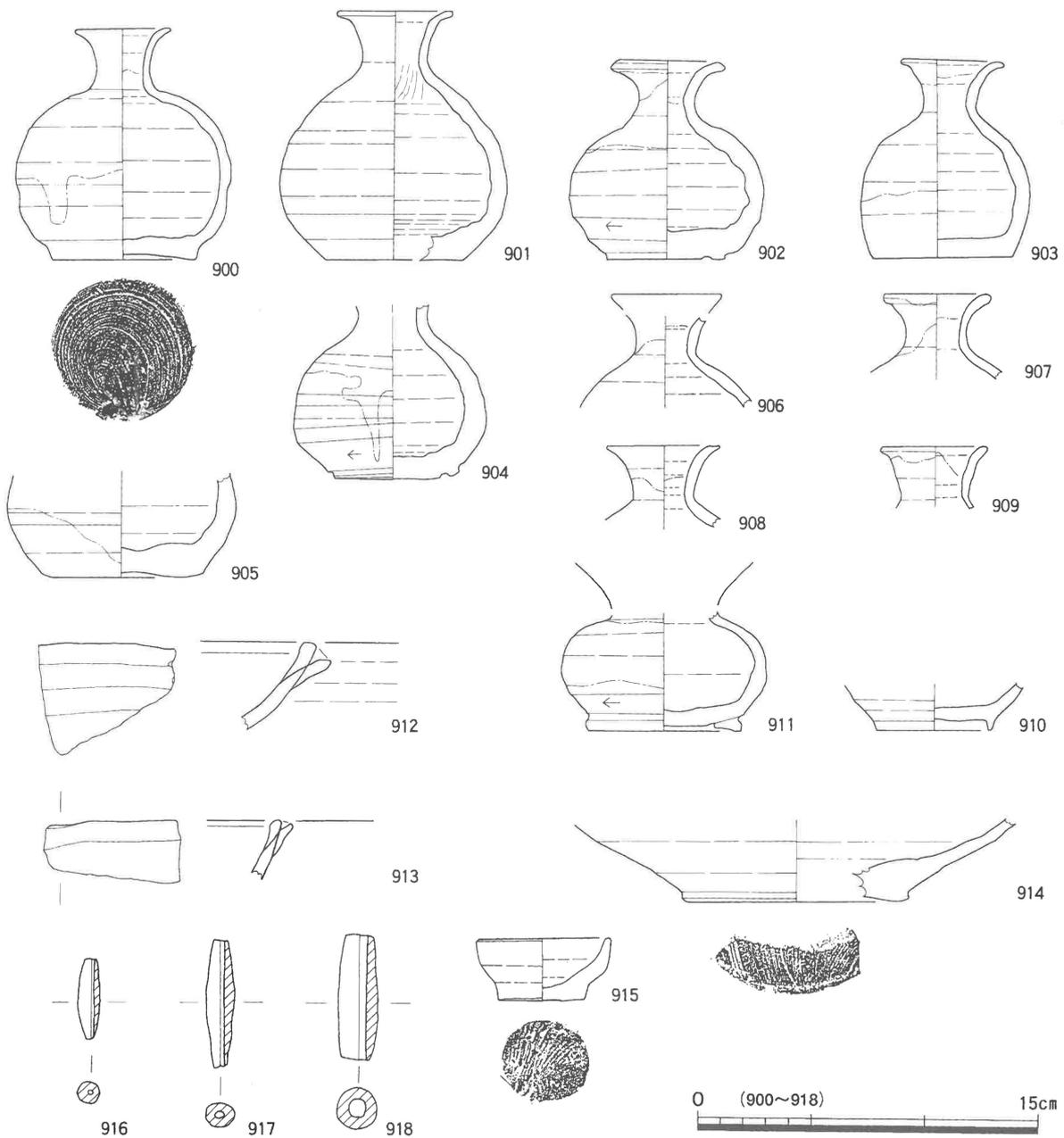
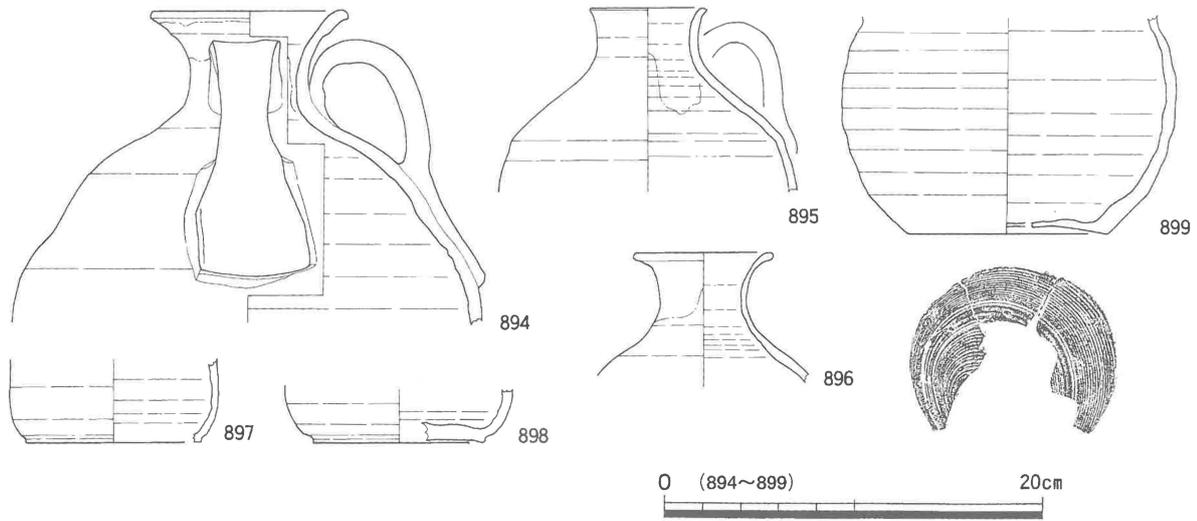
873



第59図 5号窯出土遺物一27 (1/4)



第60図 5号窯出土遺物一28 (1/4)



第61図 5号窯出土遺物-29 (1/4・1/3)

のがある。

小瓶（900～910）は手付瓶を小型化した形をしている。底部は基本的に無高台で、底部外面に太めの凹線を入れ、高台を表現したようなもの（902・904）がある。小さな高台があるものが1点ある（910）が、小破片であり、小瓶ではない可能性もある。法量は高さが90～110mm、胴部最大径が80～100mm程度であり、ほぼ一定している。

唾壺（911）は1点が出土している。胴部は偏球形で高台は内傾し、端部は凹面になっている。口縁部は欠損しているが、小瓶よりも明らかに頸部が太く、唾壺と考えられる。

鉢類 片口鉢（912・913）は小破片が2点出土しているだけであり、詳細は不明である。

鉢（914）は底部破片1点のみである。底部調整は静止糸切り未調整であり、体部調整は内外面とも回転ナデであるところから鉢と考えた。口縁部は不明であり、片口鉢になる可能性もある。

土製品類 陶錘（916～918）は紡錘形のもの（916・917）と円柱形のもの（918）の2種類がある。調整は手捏ねで施釉はされていない。

B. 緑釉陶器（第62図）

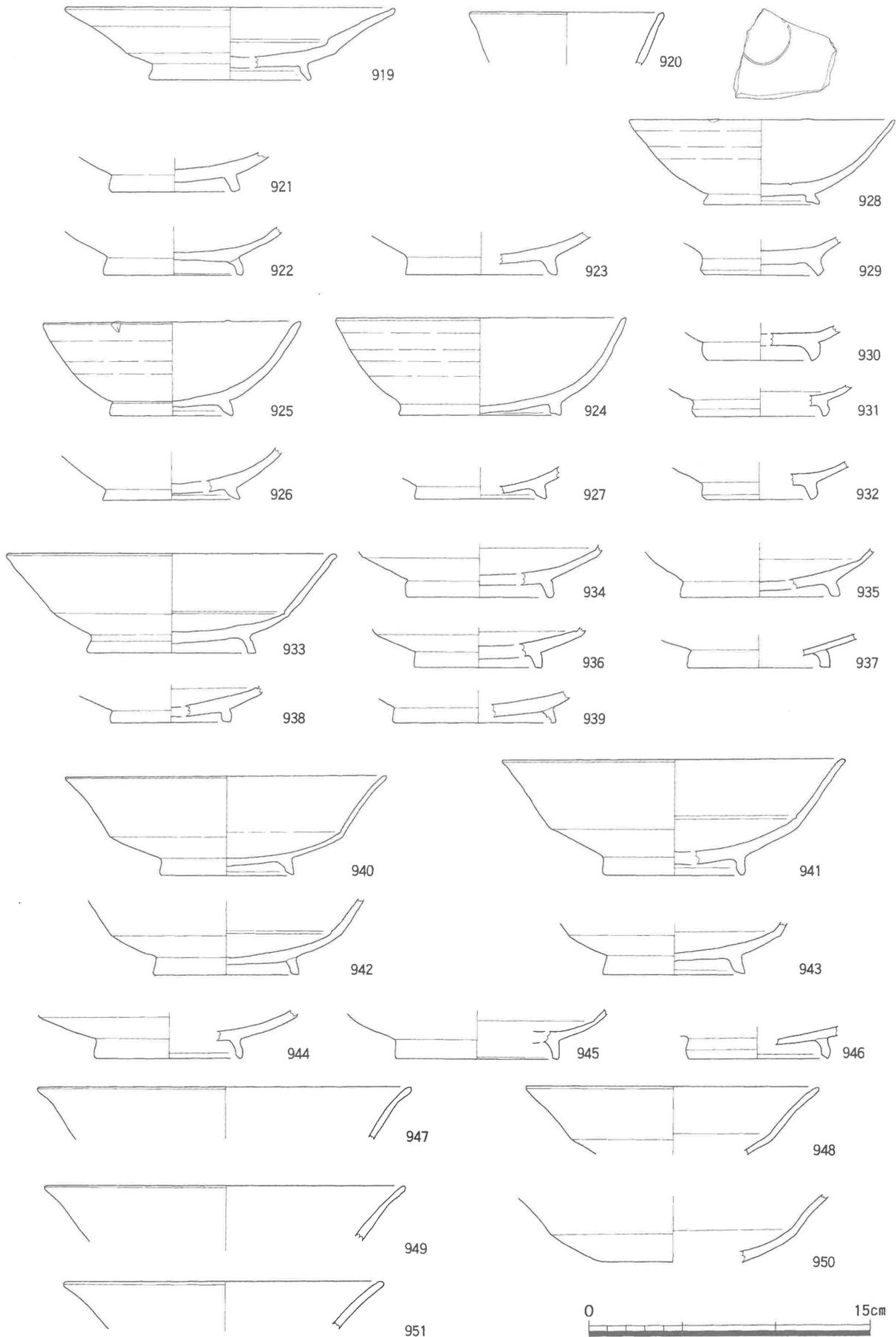
緑釉陶器は段皿が1点出土したのみである。

皿類 段皿（919）は体部外面に稜があり、内面に明瞭な段を持つ広縁のものである。高台は断面が長方形に近く、外側に張り出し内傾した面を持っている。調整は体部下半から底部が回転ヘラケズリで、最終的には全面がヘラミガキされている。

C. 緑釉陶器素地（第62・63図）

緑釉陶器素地は碗類、皿類、壺類が出土している。緑釉陶器素地は本来、施釉された後に焼成され、緑釉陶器として完成するものであるが、施釉以前のもので消費地で出土しており、製品として流通していることが確認されている。そこで、これらの製品を緑釉陶器素地として緑釉陶器とは別の種類とした。

これら緑釉陶器素地は基本的にはほぼ全面がヘラミガキされていることが特徴であるが、一部にヘラミガキがはっきりしないものがある（117・393・599・929）。929以外については灰釉陶器に分類したものであるが、緑釉陶器素地の可能性が考えられるものである。117は稜碗で本来は緑釉陶器の器形である。393は碗であるが口縁部の端反りが無く、緑釉陶器素地と共通した特徴を持っている。599は広縁の段皿であるが、高台は断面が長方形で長く、端部は外傾した面であり、他の灰釉陶器段皿の中ではやや異質である。929に関しても高台の断面形が長方形に近く、高台端部は外傾した面であり、他の緑釉陶器素地の高台とはやや異質である。これらのヘラミガキを行っていない一群の土器は、灰釉陶器としてはやや異質な特徴を持っており、又、緑釉陶器素地としても明瞭にヘラミガキがされたものとは異なった特徴を示している。



第62図 5号窯出土遺物-30 (1/3)

現状では十分に確認できないが、H-72（東山72号窯）段階の緑釉陶器はヘラミガキ調整が欠落している。苗畑5号窯に近接したO-53（折戸53号窯）～H-72段階と考えられる大沢A-2号窯ではヘラミガキ調整が欠落した緑釉陶器と素地が出土していることから、苗畑5号窯のヘラミガキがされていない一群の土器は新しい要素を示す緑釉陶器素地である可能性が考えられる。

碗類 碗（920～932）は全形が判明するものが少ないが、灰釉陶器碗よりも体部が丸味を帯び、口縁端部が端反りしないものである。口縁部には輪花が4ヶ所入れられているものも見られる。高台の形状でA～C群の3群に細分できる。A群（921～924）は高台の断面が長方形に近く、いわゆる角高台を長く伸ばしたような形をしており、端部に明瞭な面を持つものである。B群（925～927）は高台が細くなり外側に張り出すもので、端部に内傾面を持っている。C群（928）は高台が踏ん張り、内外面に張り出す形をしたもので、端部は内傾し凹面になっている。D群（929～932）は高台の内端が接地する形をしており、いわゆる三日月高台を短くしたような形をしている。通常の灰釉陶器に近い形態のものである。法量は口径が110～170mm、高さが45～50mm程度であり、最終的にほとんど全面がヘラミガキされているが、外面にロクロ目の痕跡を残すものがある。

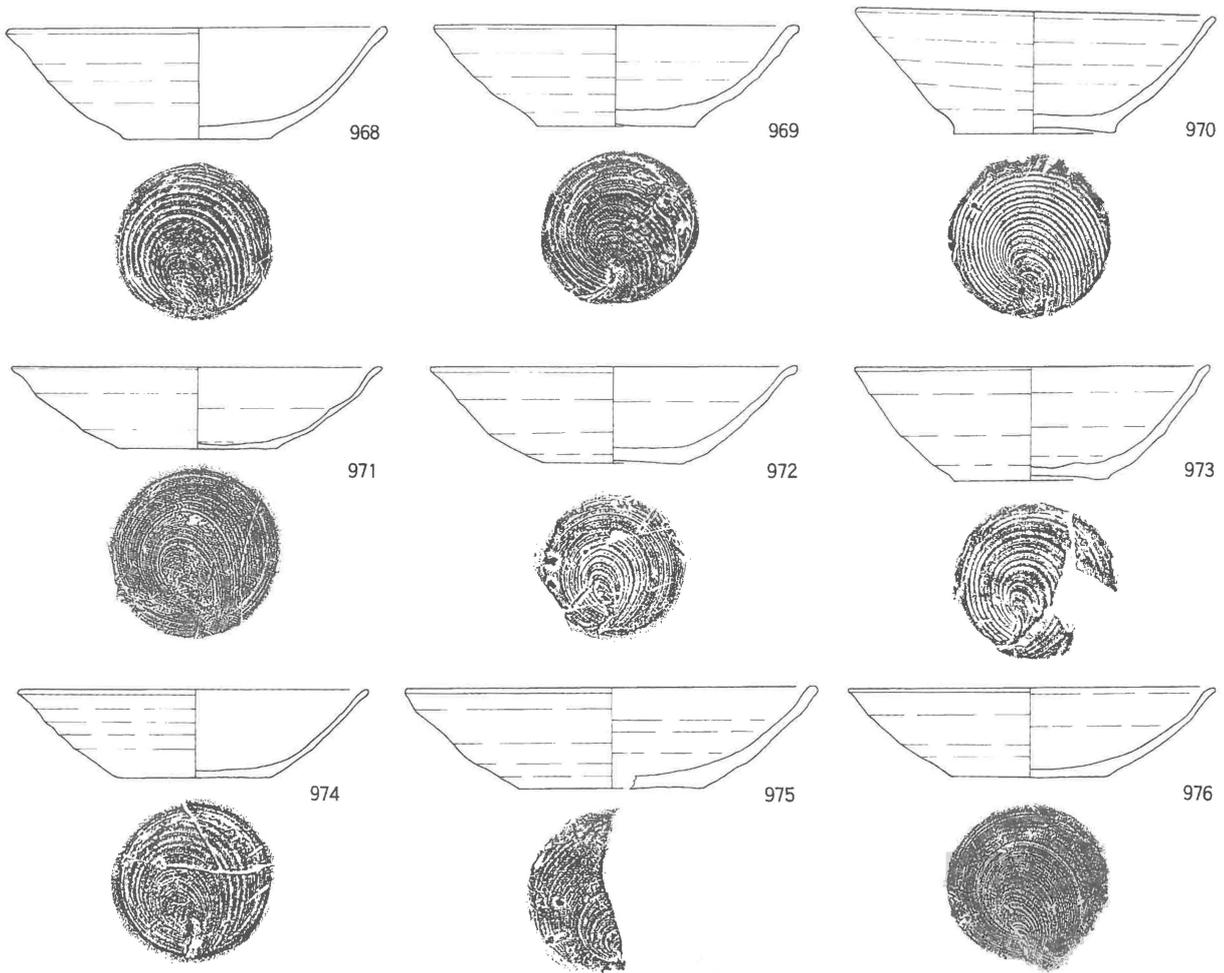
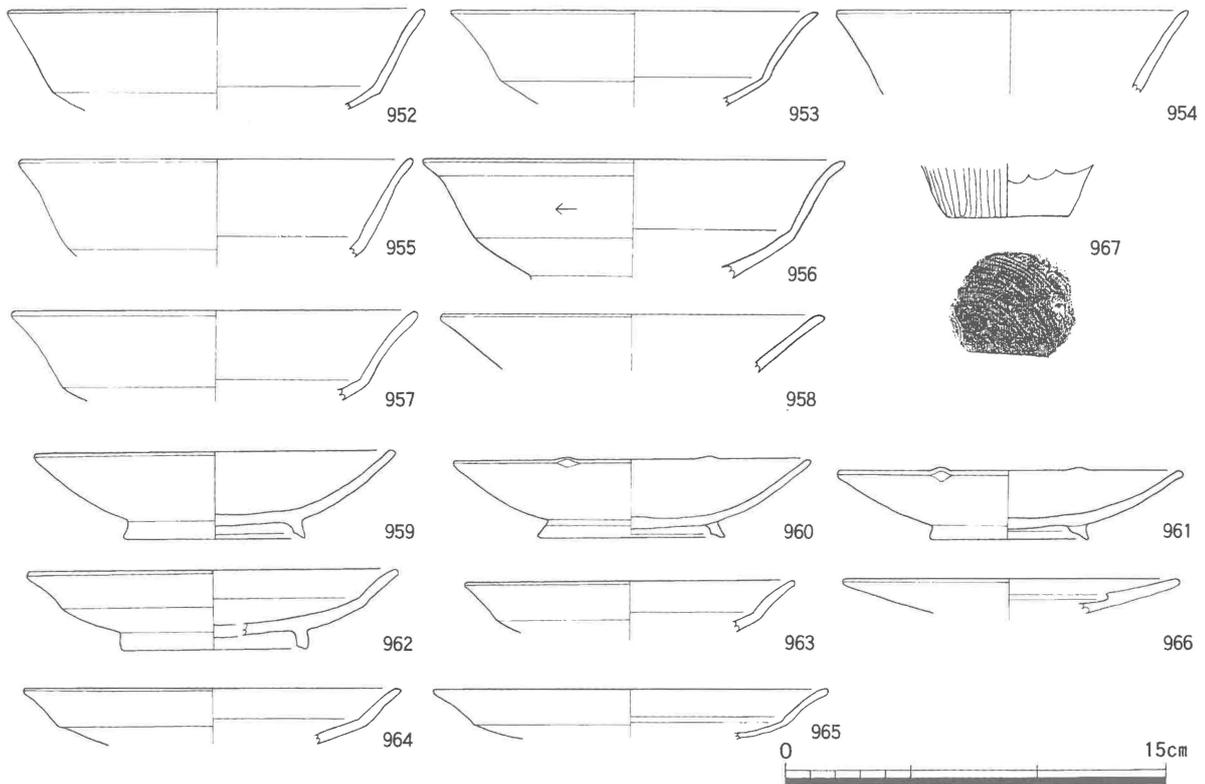
稜碗（933～958）は体部中央付近で明瞭な稜を持つもので、体部下半はわずかに内湾し、体部上半はわずかに外反している。高台の形状でA・B群の2群に細分できる。A群（933～939）は高台の断面が長方形に近く、いわゆる角高台を長く伸ばしたような形をしており、端部に明瞭な面を持つものである。B群（940～946）は高台が細くなり外側に張り出すもので、端部に内傾面を持っている。法量は口径が140～190mm、高さが45～50mm程度であり、最終的に殆ど全面がヘラミガキされている。

皿類 皿（959～961）はいわゆる皿形のもので、口縁部の4ヶ所に輪花が入るものがある。高台の形状では1群のみである。高台は細くなり外側に張り出すもので、端部に内傾面を持っているもので碗ではB群としたものである。A群の高台のものは確認されていないが、稜皿では確認でき、碗と同様に存在した可能性は十分に考えられる。法量は口径が140mm、高さが30mm程度であり、最終的に殆ど全面がヘラミガキされている。

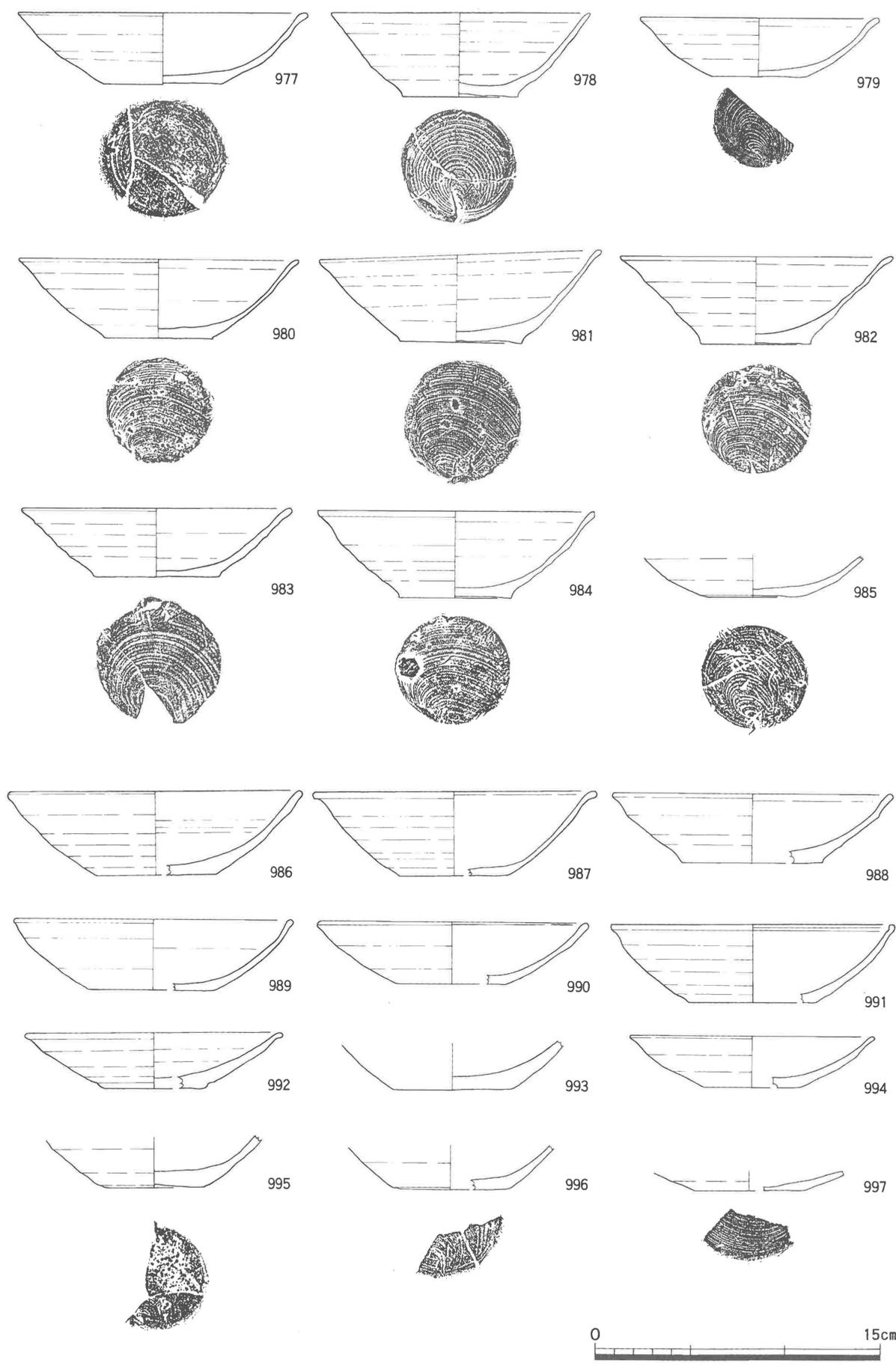
稜皿（962～965）は体部中央付近で明瞭な稜を持つものである。稜碗と同様に体部下半はわずかに内湾し、体部上半はわずかに外反している。全形が判明するものは1点（962）のみで、高台の形状は碗類でA群としたものである。法量は口径が130～150mm、高さが30mm程度であり、最終的に殆ど全面がヘラミガキされている。

段皿（966）1点が確認されている。体部は直線的に開き、内面に明瞭な段を持つが、高台の形状は不明ある。体部の形状も緑釉陶器・段皿とは異なっており、口径133mmでかなり小さい。

壺類 小瓶（967）は1点のみ出土している。底部近くの小破片であり、詳細は不明である。胴部外面がヘラミガキされているところから、緑釉陶器素地としたが、底部は糸切り未調整でかなり厚く、灰釉陶器の小瓶とは器形が異なるようである。他の器種である可能性も考えられる。



第63图 5号窖出土遺物—31 (1/3)



第64図 5号窯出土遺物一32 (1/3)

D. 須恵器（第63～69図）

須恵器は深鉢・有台盤以外のすべての小器種が出土している（第2表）。

坏類 坏（968～1007）は、灰釉陶器窯出現以前の須恵器窯で生産されていた無高台の坏の系譜を引くと考えられるものである。器形は平底で、体部が直線的に開いているが、わずかに内湾するものもある。調整は底部が糸切り未調整で、体部は内外面ともにロクロ目を明瞭に残しており、内面には灰釉陶器のようなコテは使用されていない。ヘラ書きがあるもの（998～1007）が多数あるが、すべて「白」と書かれており、この器種に特有のものである。

蓋類 蓋（1009・1010）は口縁端部に明瞭な面を持つもので、口縁部のみの破片である。小破片のため詳細は不明で他の器種になる可能性もある。

盤類 高盤は坏部（1011・1012）と脚部（1047）が出土しており、全体が接合したものはない。坏部はわずかに内湾して広がるがかなり浅い。口縁端部は明瞭な面を持つ。高盤も灰釉陶器出現以前の須恵器窯で生産されていた高盤の系譜を引くものである。法量は坏部の口径が260～275mm、脚部径が212mm、脚部高が115mmあり、大型である。

鉢類 鉢（1013～1015）は口縁端部が内側に折れて明瞭な面を持つもの（1013）と単純に外側に開き、口縁端部が丸いもの（1014）があるが、出土数が少なく詳細は不明である。

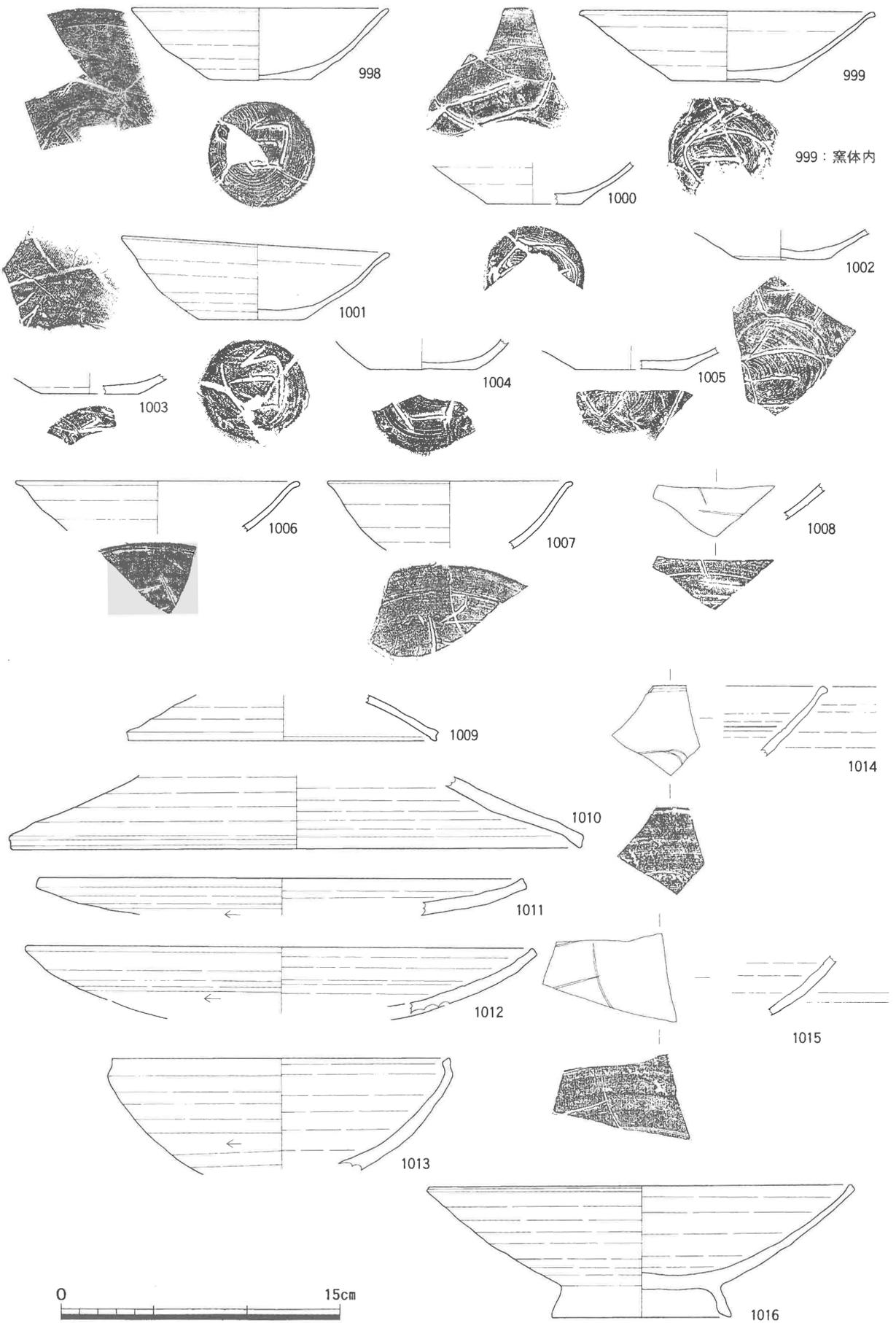
足高鉢（1016）は1点のみの出土である。体部はわずかに内湾するが、ほぼ直線的に斜め上方に延び端部に面を持っている。高台は高さが17mmあり、高いことが特徴である。法量は口径が230mm、高さが71mmである。

片口鉢（1025）は1点のみの出土である。体部はわずかに内湾し、底径は口径のほぼ半分ほどである。器壁は厚く、陶白に近い。法量は口径が227mm、高さが129mmである。

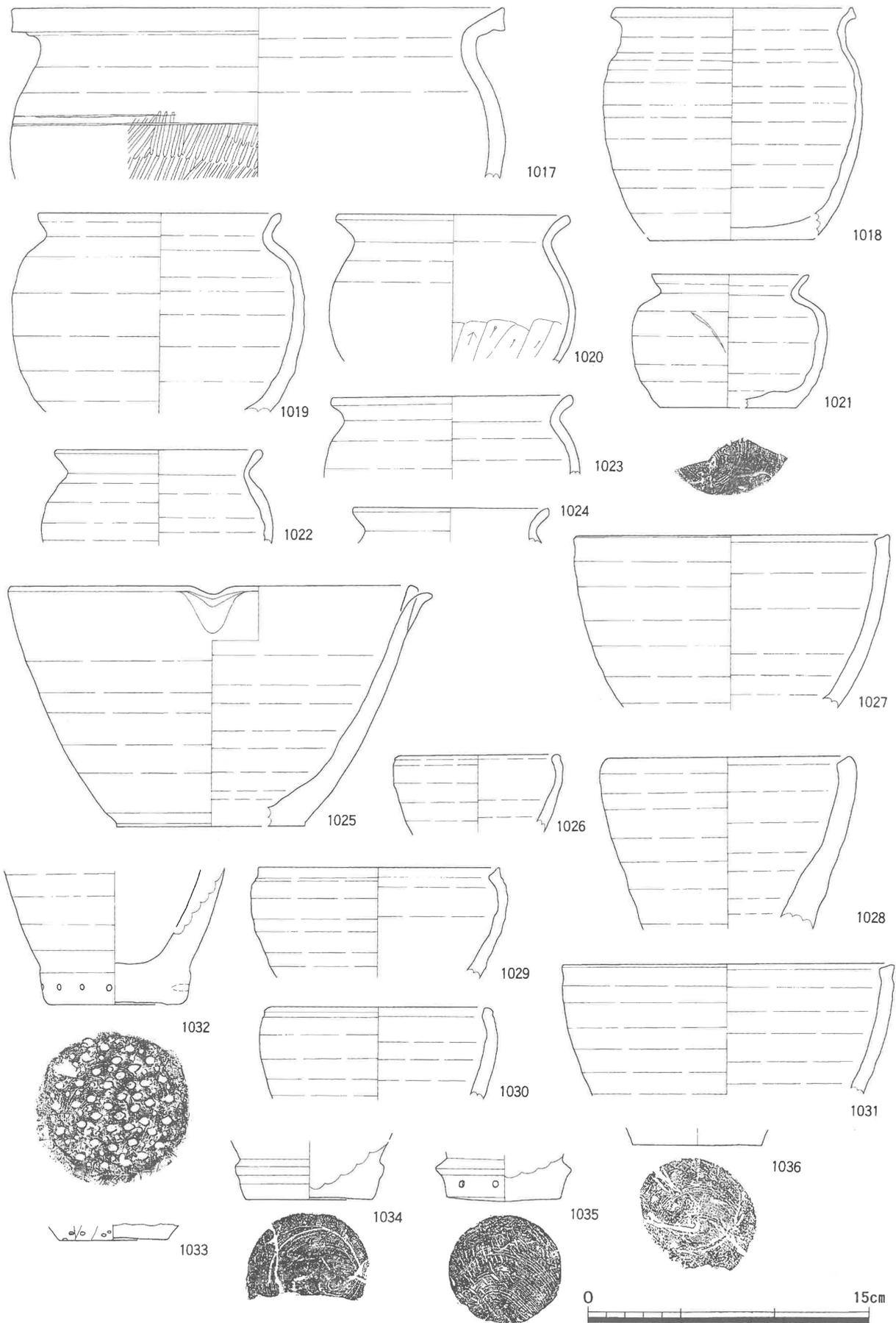
壺類 広口壺（1017～1024）は寸胴で頸部はわずかにくびれ、口縁部は短く斜め上方に延び、口縁端部は面を持つものとそのまま丸く終わるものがある。出土点数は少ないが法量は口径が260mm、130mm、100mm程度の3法量があるようである。大型のもの（1017）は体部外面が平行叩きで調整されており、中・小型のものは内外面ともロクロ目が残り、底部は糸切り未調整である。

陶白類 陶白（1027～1036）は体部上半が丸味を帯び口縁部近くで内湾している。底部は厚く、糸切り未調整で棒状工具による刺突痕があるものが多い。法量は全体が判明するものはないが、口径が120mm程度と220mm程度のものがあるようである。

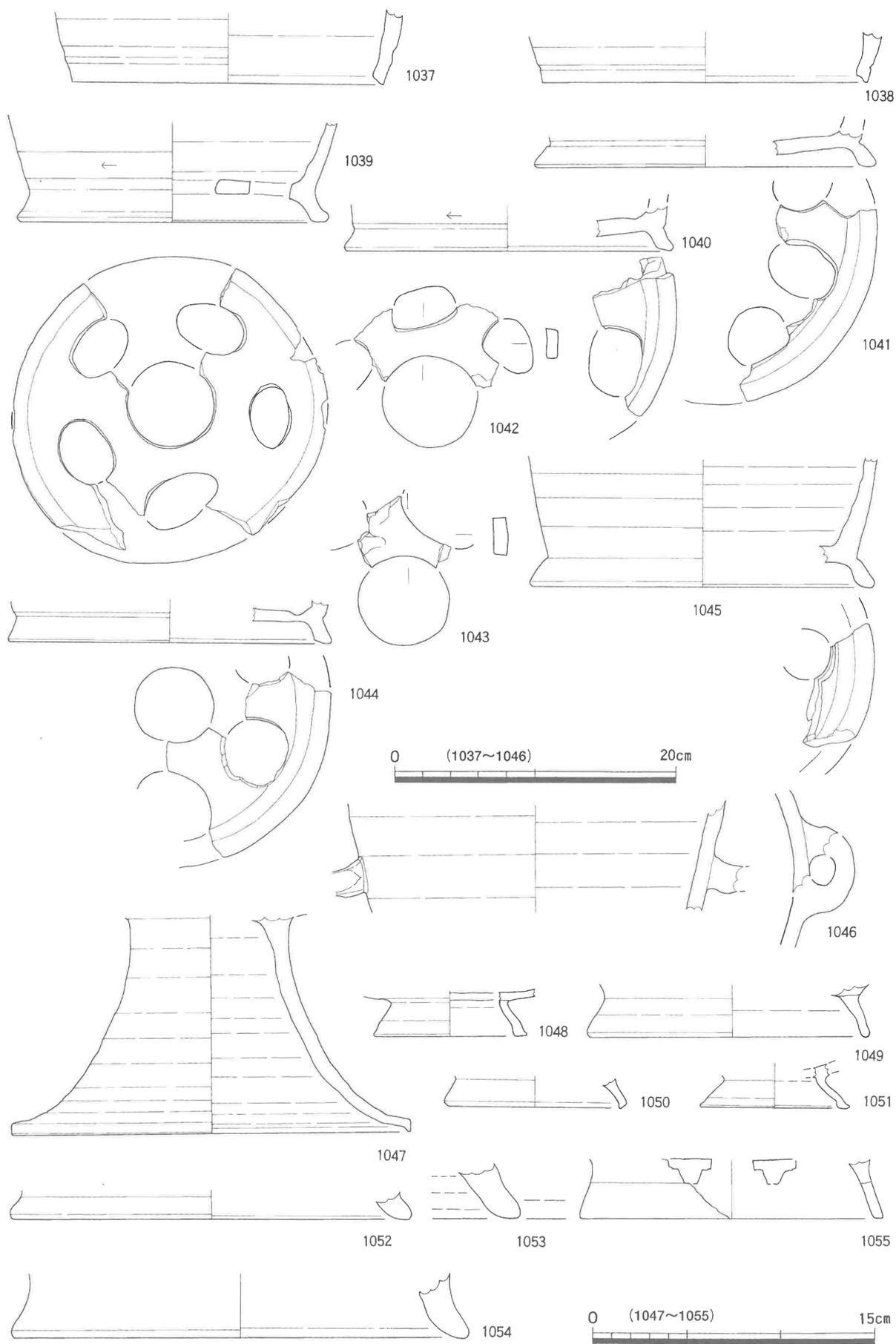
甌類 甌（1037～1046）はほとんど底部破片のみであり、全形の判明するものはない。甌は底部に6～7個程度の楕円形の穴の開くものと底が抜けたまま終わるものがある。後者に関しては、小破



第65图 5号窯出土遺物—33 (1/3)



第66図 5号窯出土遺物—34 (1/3)



第67图 5号窯出土遺物一35 (1/4・1/3)

片のみであり別器種になる可能性も考えられる。法量については底径が200～220mmで一定している。

香炉類 香炉（1055）は1点出土しているが小破片であり、詳細は不明である。1055は脚部のみであるが、スカシがありとりあえず香炉の可能性が高いと判断した。

火舎（1076）も1点のみの出土である。脚部のみであり、詳細は不明である。

甕類 甕（1056～1073）は口縁部が緩やかに立ち上がり、口縁端部近くで外反している。口縁端部は面を持ち、上方に拡張されているもの（1068）や上下両方に拡張されているものがあり、長頸壺の口縁端部の状況と類似している。全形が判明するものはないが、胴部は上半に最大径があり、肩が丸い。底部は平底で無調整であり、丸底のものはない。隣接する湖西窯の須恵器窯から出土する甕は丸底のみであり、平底は確認されておらず、別系譜のものと考えられる。調整は胴部外面が平行叩き、内面は同心円アテ具痕のあるものがほとんどであるが、無文アテ具も見られる。口縁部調整は内外面ともナデであるが、外面がハケ調整されているものが少数ある。法量は、口径が200mm程度、350mm程度、470mm程度の3法量があるようである。

土製品類 陶錘（1075）は1点のみ出土している。窯道具（1077～1081）は甕の口縁部を切り取ったもの（1077）と手捏ねで棒状のもの（1078～1081）とがある。いずれも用途不明であり、とりあえず窯道具の可能性を考えたが、まったく異なった用途のものである可能性も十分考えられる。突帯状のもの（1082）が1点出土しており、通常の容器ではなく何らかの器物であるが用途不明である。

その他 これら以外に器種不明のもの（1048～1054）がある。いずれも、脚部のみの破片であり、詳細は不明である。これらの少数出土の遺物は、生産量が限られたもので、受注生産品の可能性も考えられる。

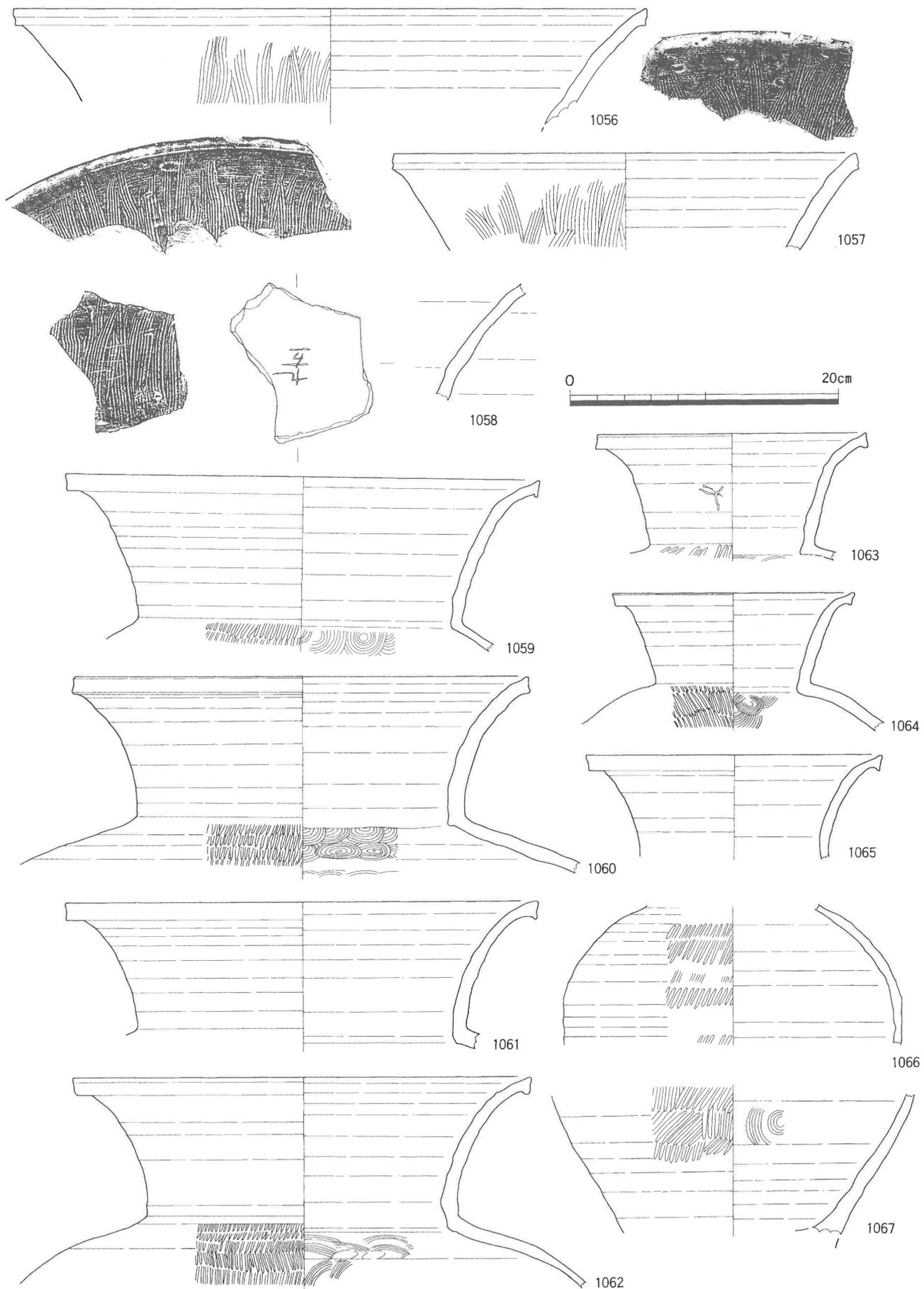
E. 土師器（第69図）

土師器は甕（1074・1083・1084）が出土している。

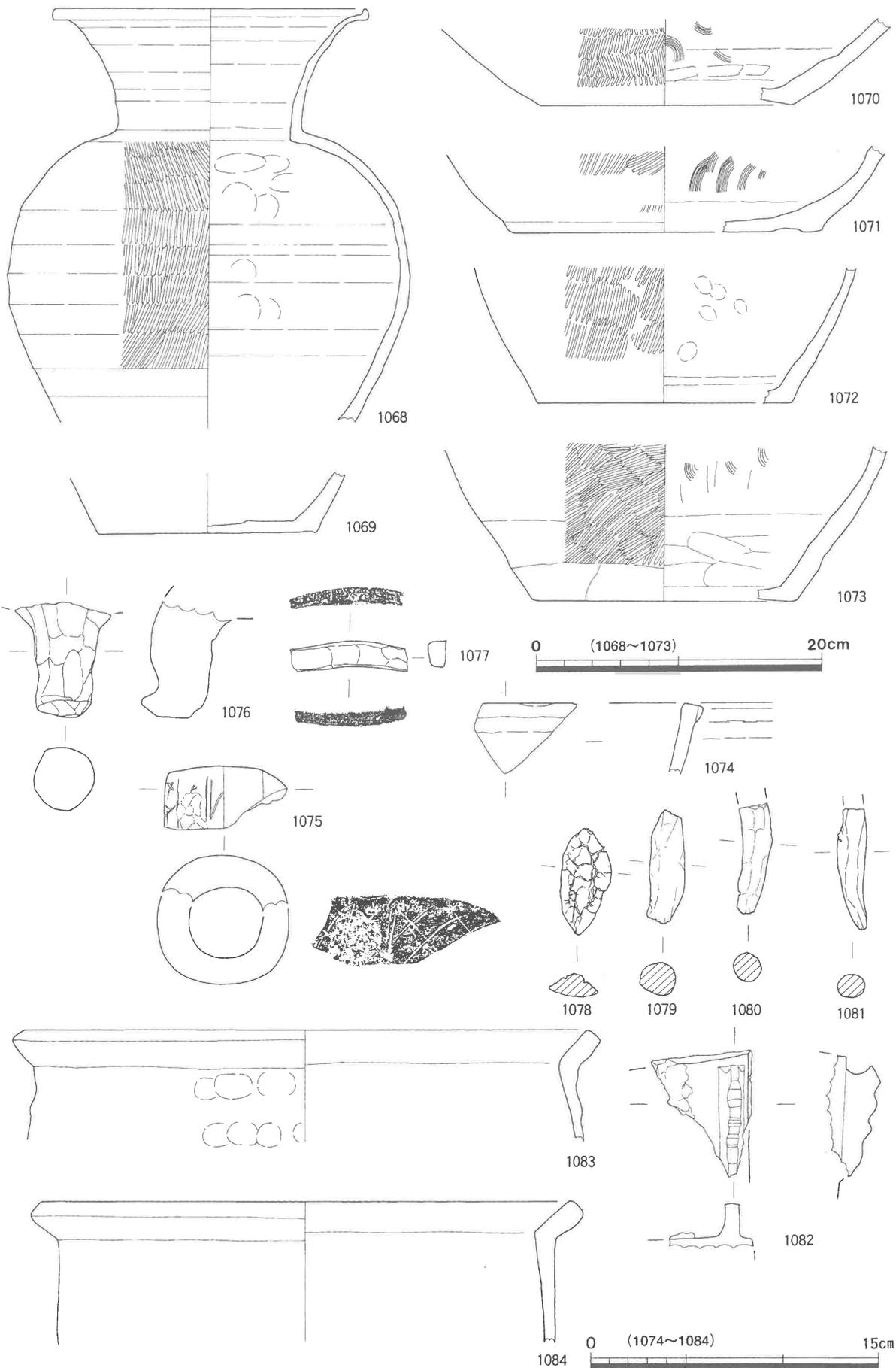
甕類 甕はいわゆる清郷型と呼ばれるものである。体部外面はユビオサエ、体部内面と口縁部は丁寧なナデが施されている。口縁部は「くの字」に折れて端部に明瞭な面を持ち、体部は頸部から下に直線的にのびている。

F. 瓦（第70図）

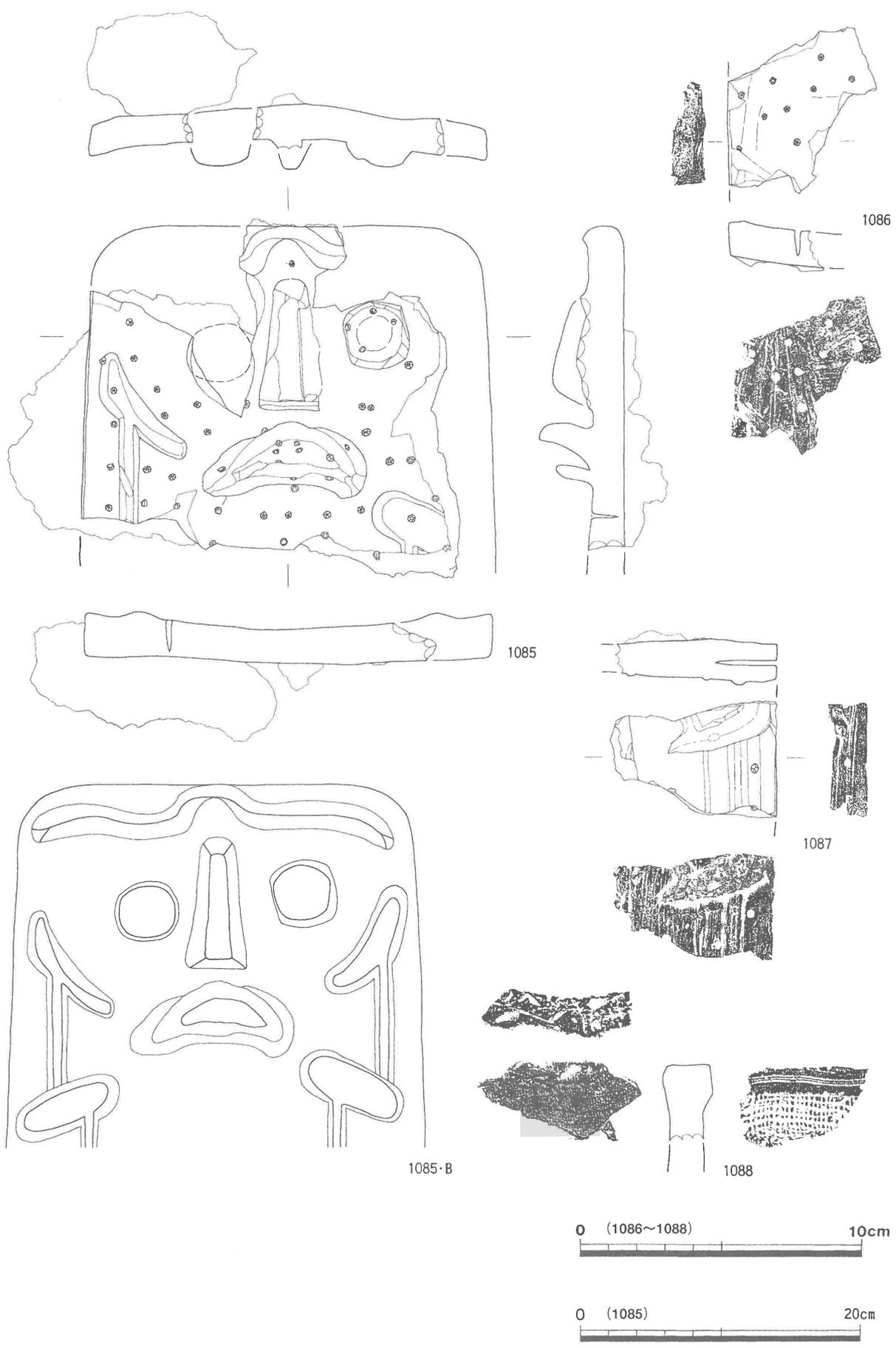
瓦は鬼瓦（1085～1087）と丸瓦（1088）が出土している。これまで、灰釉陶器の窯跡では瓦の出土例は報告されておらず、初めて確認されたものである。このような特殊品については、生産量が少いため焼成不良品が廃棄されることがほとんどなかったためと考えられる。苗畑5号窯は出土遺物がコンテナで100箱以上出土しており、これまで発掘された二川窯の窯跡では出土量がかなり多い。他の窯



第68図 5号窯出土遺物—36 (1/4)



第69図 5号窯出土遺物一37 (1/4・1/3)



第70図 5号窯出土遺物一38 (1/4・1/2)

跡では確認されていないが、他の窯跡でも生産されていた可能性は十分に考えられる。

鬼瓦 鬼瓦は3点(1085~1087)が出土している。同一個体の可能性もあるが、接合はしない。全体の形状は厚さ30mmほどの板状をしており、左目、鼻、口、眉の一部が残っている。表面には全面に渡って断面六角形の細い棒状工具による刺突痕がある。法量は幅約300mm、高さ300mm以上である。

鬼瓦の裏面には窯壁が付着しており、破碎した破片を窯壁に塗り込めていた可能性が考えられる。

丸瓦 丸瓦(1088)は狭端面の端部と考えられる小破片が1点出土している。凸面はナデで、凹面には布目が残っている。布目は縦10本/2cm、横12本/2cmであり、かなり粗い。

4. 6号窯出土遺物

6号窯からは灰釉陶器の碗類、皿類、蓋類、壺類、須恵器の坏類、盤類、鉢類、陶白類、甕類が出土している。6号窯の窯体は良好に残存していたが、灰原は大部分が削平を受けていた。出土遺物の多くは灰原からの出土である。窯体内出土遺物はごく少数が出土したのみであり、窯詰め時の現位置を保っていると推定できる資料はなかった。出土遺物は第71~78図に示し、碗・皿類の径高グラフは第6表に示している。以下では出土した種類ごとに説明する。

A. 灰釉陶器(第71~78図)

碗類は大碗・中碗・碗・深碗、皿類は皿・段皿、蓋類は蓋、壺類は長頸壺・短頸壺・平瓶・浄瓶が出土している(第2表)。

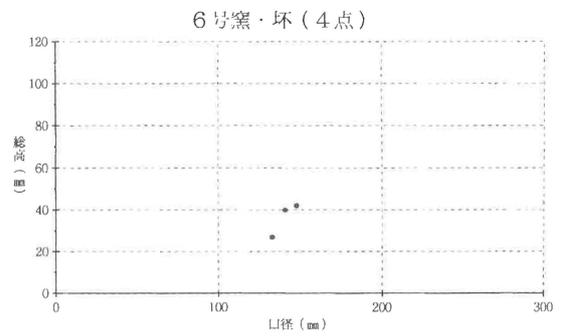
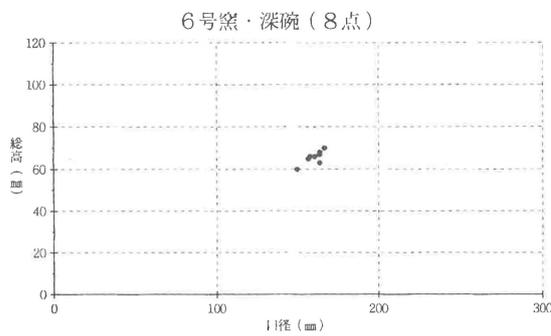
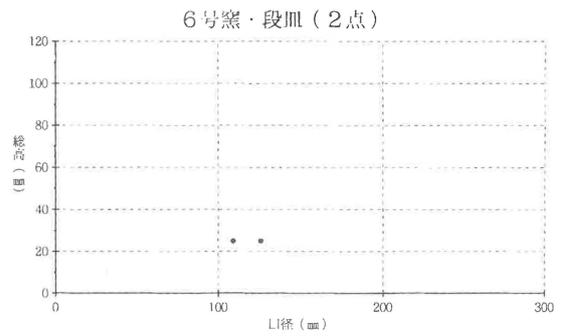
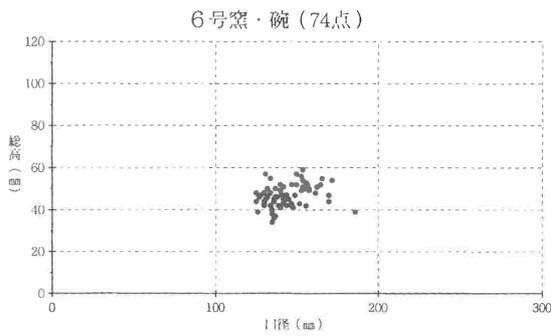
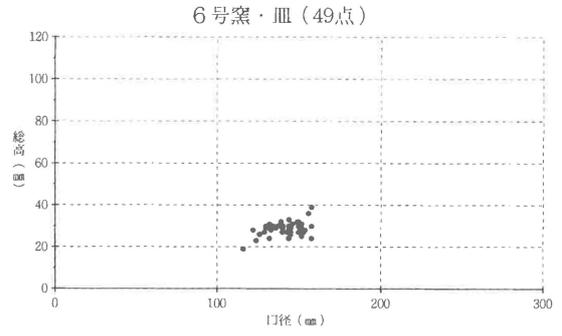
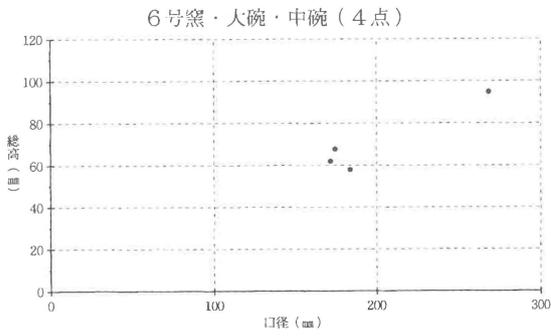
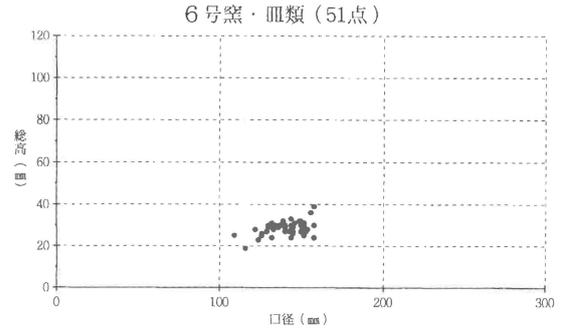
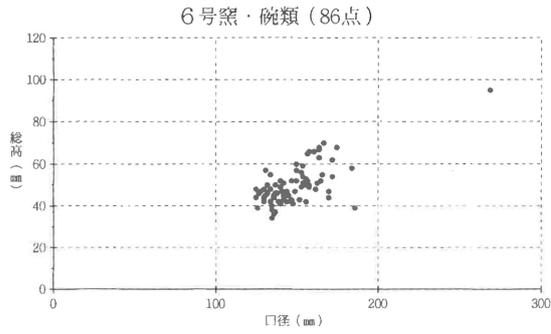
碗類 大碗(1093・1094)は口径が約260mm、高さが約95mm程度のもので、底部調整はヘラケズリである。機能的には鉢と考えられるが、形の類似性から碗類に含めている。

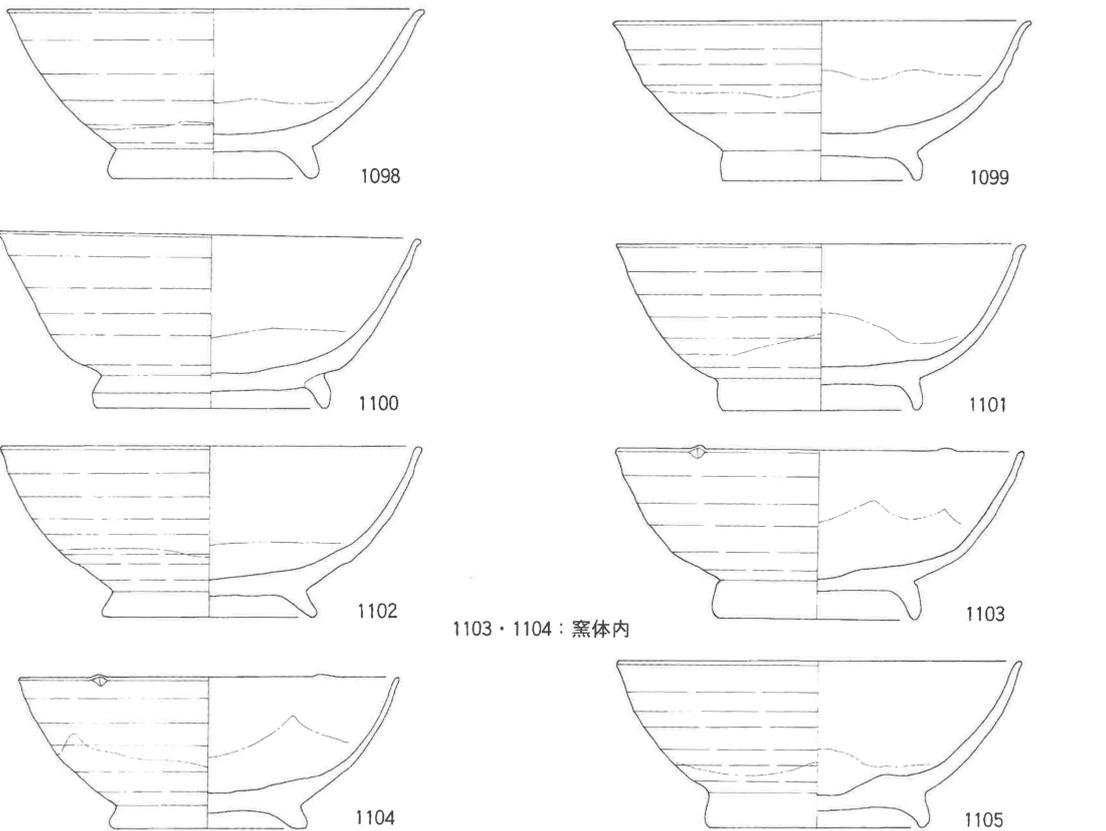
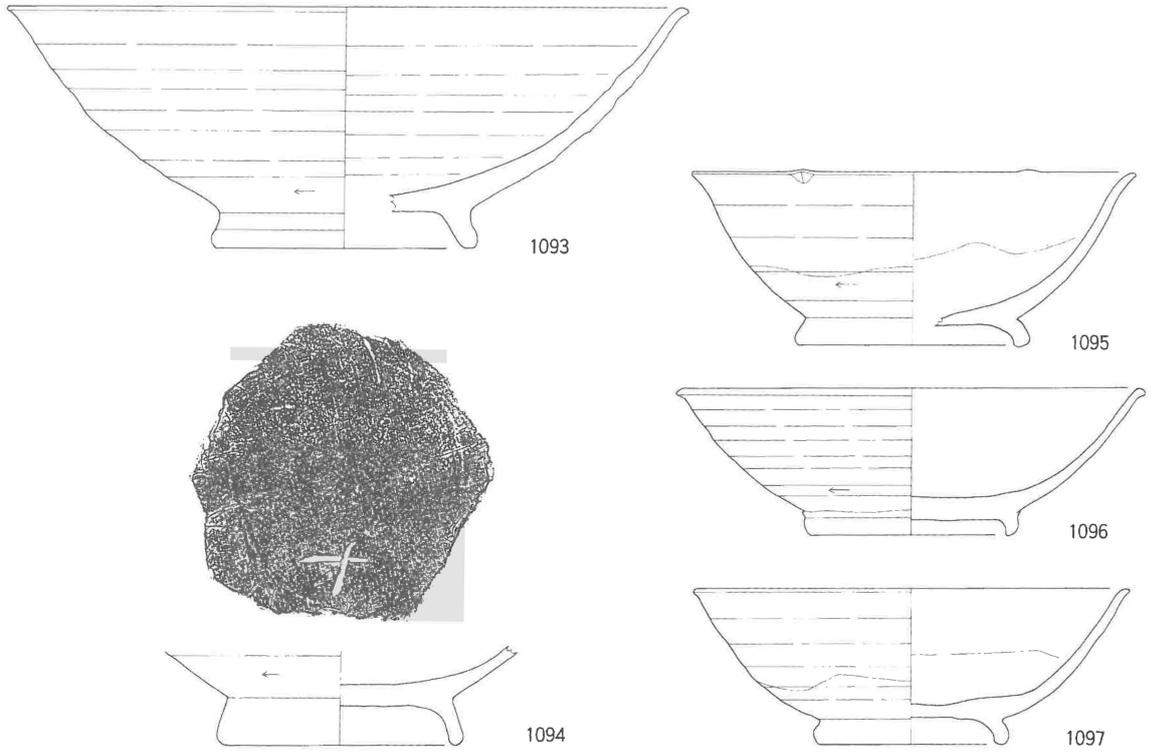
中碗(1095~1097)は口径が170~180mm、高さが60~70mm程度のもので、底部調整はヘラケズリ(1095・1096)と、糸切り未調整(1097)がある。施釉はハケ塗りと無釉がある。口縁部には輪花が4ヶ所に入れられているもの(1095)も見られる。

深碗(1098~1105)は口径が約150~170mm、高さが約60~70mm程度のもので、やや腰が張り他の碗よりも深くなっているものである。口縁部にはほとんど端反りが見られず、輪花が4ヶ所に入れられているもの(1103・1104)もある。底部調整はケズリとナデがわずかにあるが糸切り未調整が多い。施釉は確認できるものは漬け掛けである。6号窯出土の深碗は4号窯のように口縁部が端反りして量的に安定しているものとは異なり、5号窯出土のものと類似している。

碗(1106~1183)は口径約130~170mm、高さ約35~55mmの範囲に集中している。底部調整はヘラケズリ、ナデも一定量見られるが、糸切り未調整が最も多い。施釉はハケ塗り、無釉、漬け掛けがあるが漬け掛けが最も多い。底部が糸切り未調整のものでも、施釉はハケ塗り、無釉、漬け掛けすべてがあるが、量的には漬け掛けのものが多い。

第6表 6号窯出土碗・皿類径高グラフ

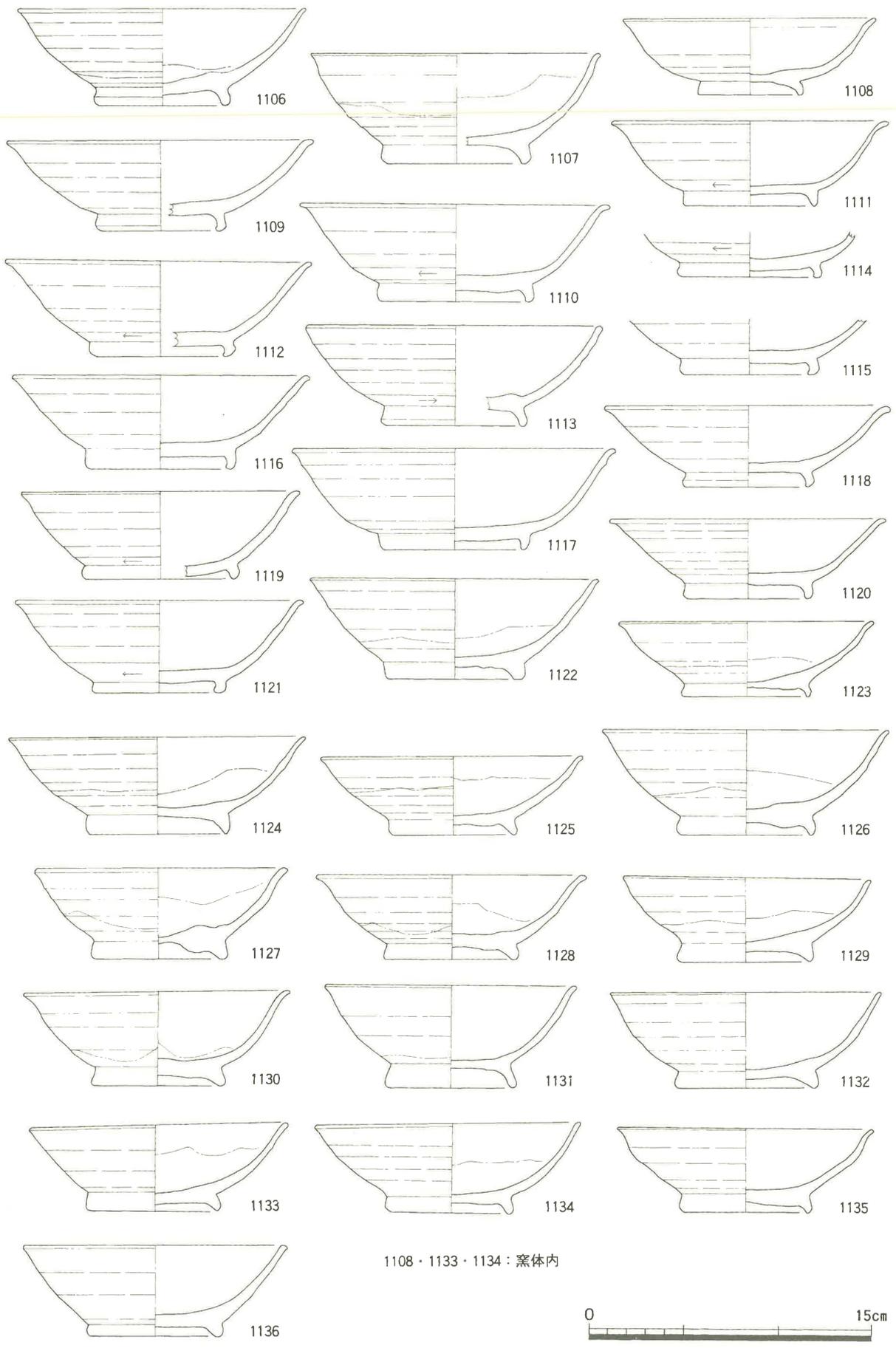




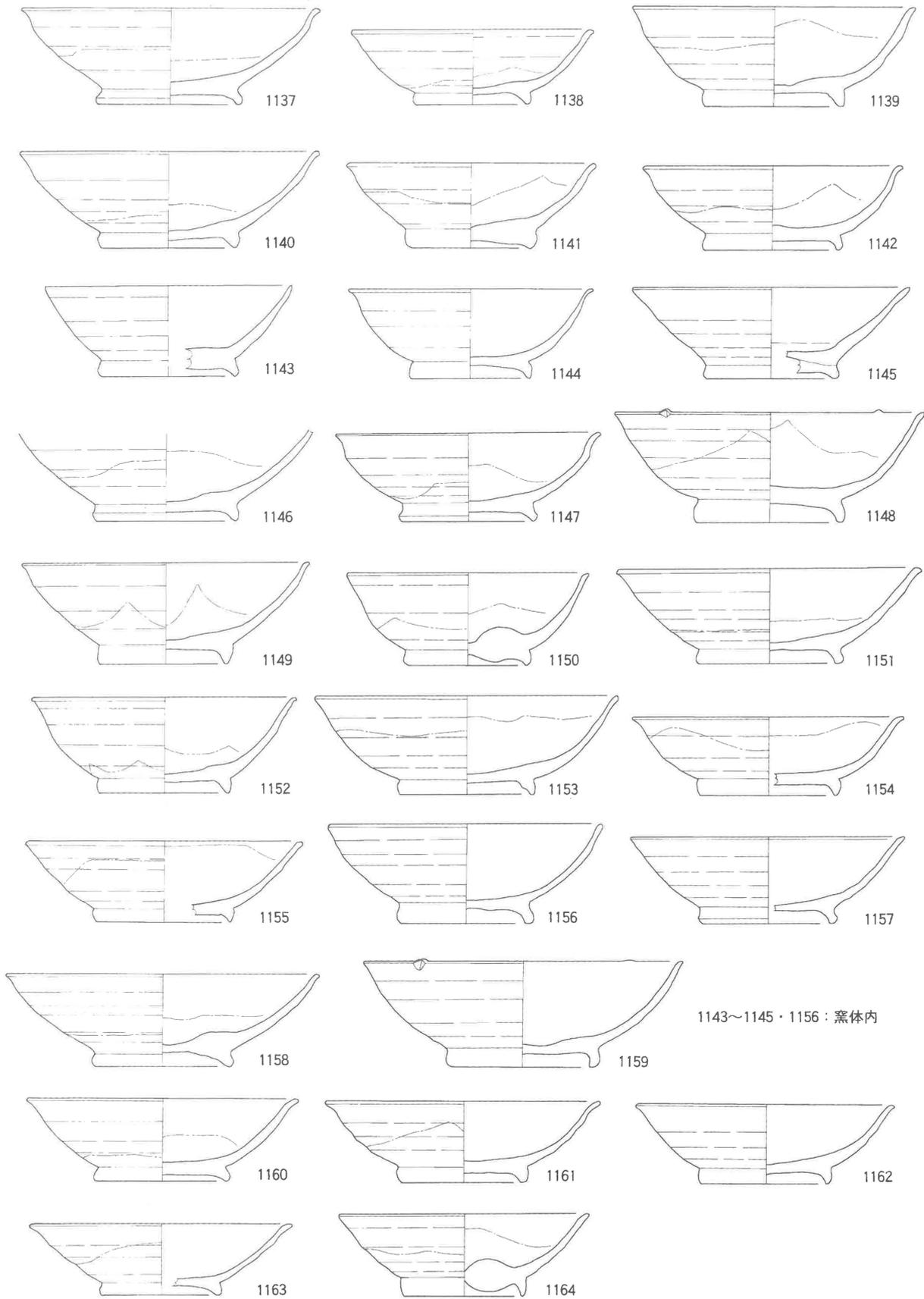
1103・1104：窯体内



第71図 6号窯出土遺物一1 (1/3)



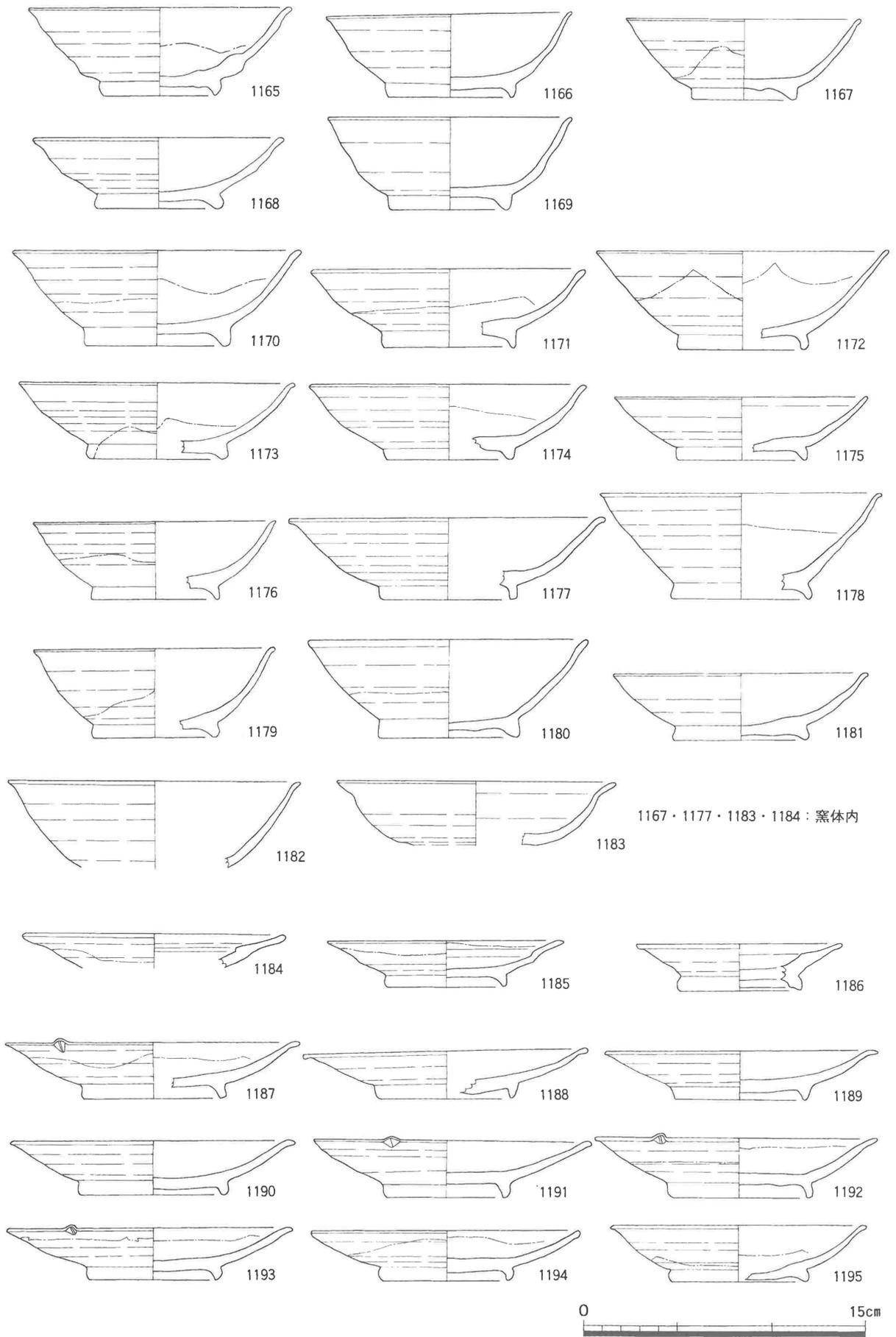
第72図 6号窯出土遺物一2 (1/3)



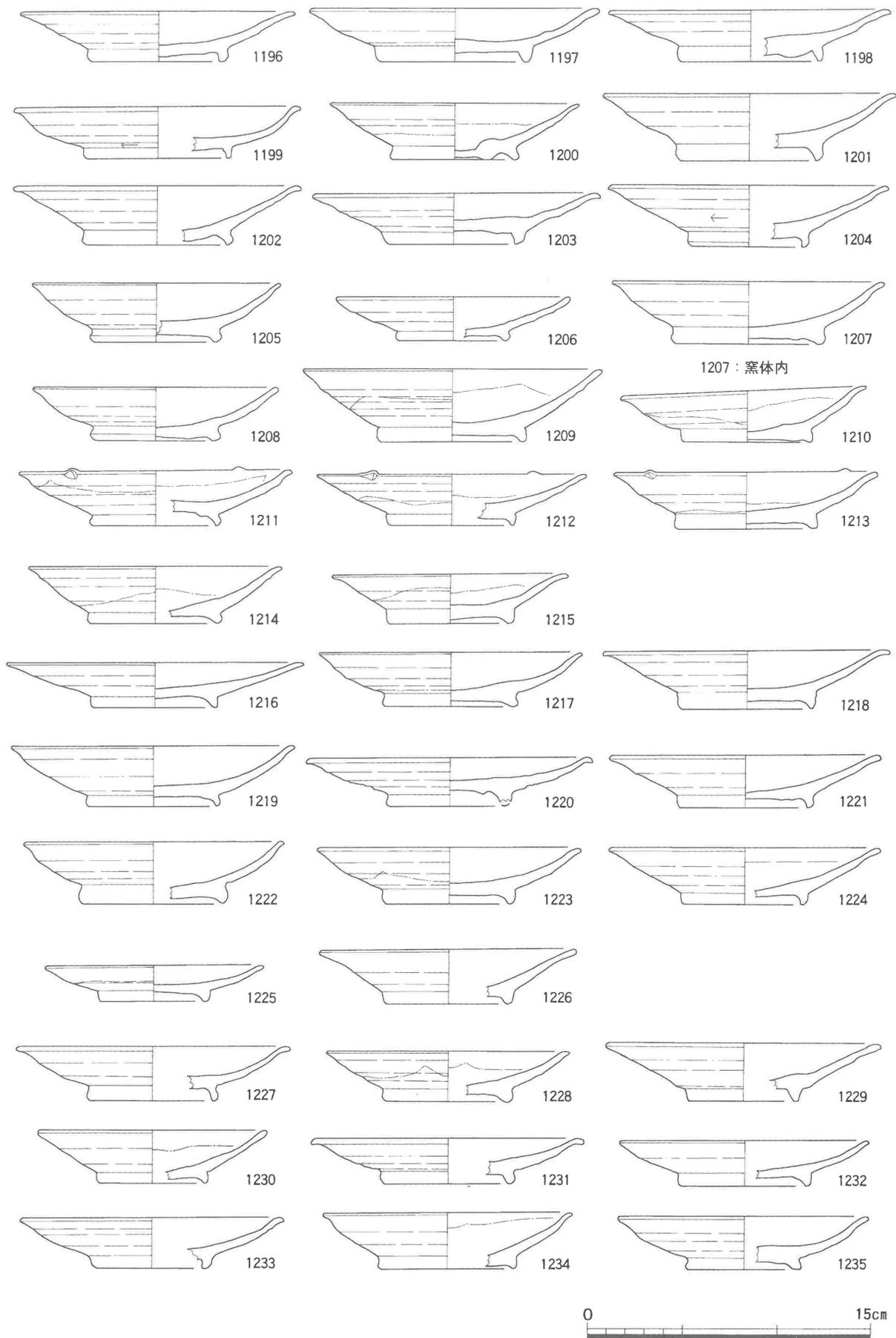
1143~1145・1156: 窯体内

0 15cm

第73図 6号窯出土遺物一3 (1/3)



第74図 6号窯出土遺物-4 (1/3)



第75図 6号窯出土遺物-5 (1/3)

皿類 段皿（1184～1186）は内面に明瞭な段を持つ広縁のもの（1084）、体部が屈曲するもの（1085）、内面にわずかに段を持ち小型のもの（1186）がある。法量は口径が約130～140mm、高さ約25mm程度のものと口径が110mm、高さが25mm程度の2法量が見られる。底部調整は糸切り未調整である。施釉はハケ塗りと無釉である。段皿は出土数が少ないが、5号窯出土のものよりは小型化しているようである。

皿（1187～1235）は口径約120～150mm、高さ約25～30mmの範囲に集中している。底部調整はヘラケズリ、ナデが一定量あるが、糸切り未調整が最も多い。施釉はハケ塗り、無釉がわずかにあるが、漬け掛けが最も多い。皿は口径・高さ共に5号窯出土のものよりは小型化している。

蓋類 壺蓋（1236）は口縁部が強く折れ曲がり体部が深いものである。摘みは残っていないが、摘みとの接合部が残っており、宝珠摘みの可能性が高い。口径は166mmであり、短頸壺の蓋と考えられる。

蓋（1237・1238）は口径が170～200mm程度で口縁端部が明瞭に折れるものである。施釉は内外面にハケ塗りされている。

壺類 長頸壺（1239～1246・1248～1267）は胴部上半に最大径があり、下半がすぼまっており、頸部は緩やかに外反し大きく開いている。法量の点で細分可能であるが、全形が判明するものは少なく、特に大型のものは全形が判明するものはない。法量は口径が110～200mm、高さが200～350mm程度でかなりばらついている。法量にいくつかの規格があるかは今後の検討課題である。大型のものには環状の把手が付くものがあるが、この把手は基本的に確認できるものは1個だけであり、2個付くものはない。口縁端部が上方に引き延ばされていたり（1265）、上下に拡張されているものがあり、5号窯と同じ傾向である。

短頸壺（1247）は胴部破片のみであり、詳細は不明である。胴部内面に降灰が顕著に認められるところから短頸壺と推定した。

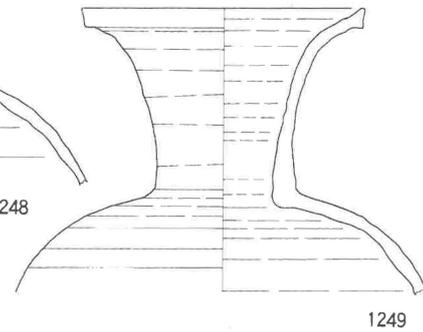
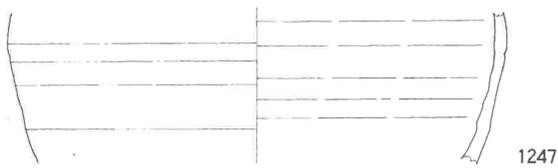
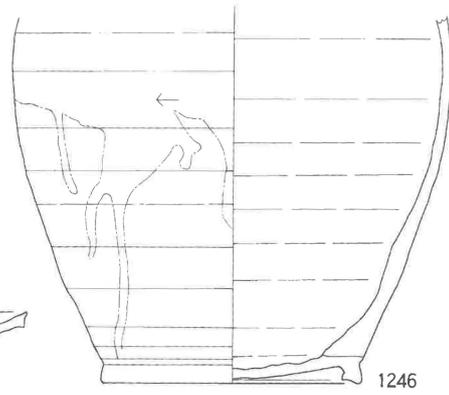
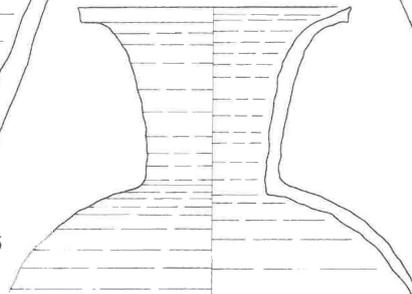
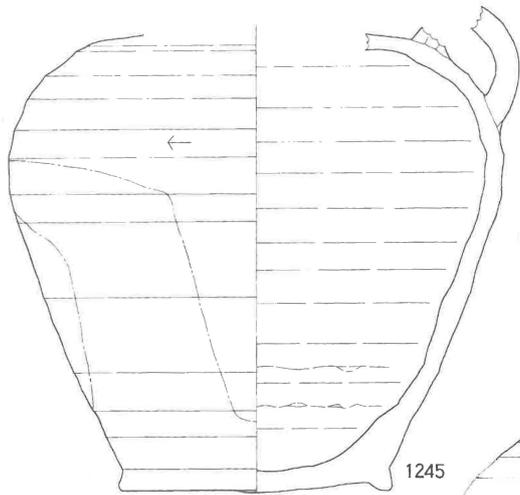
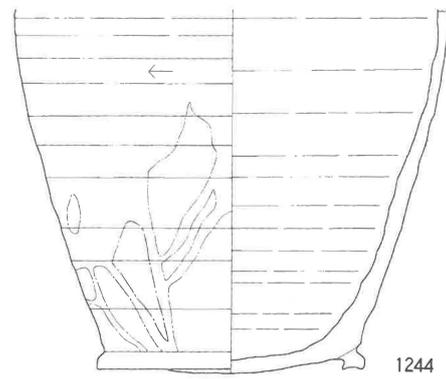
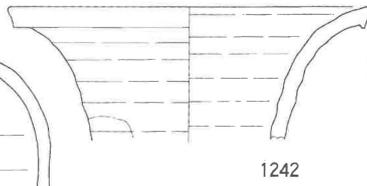
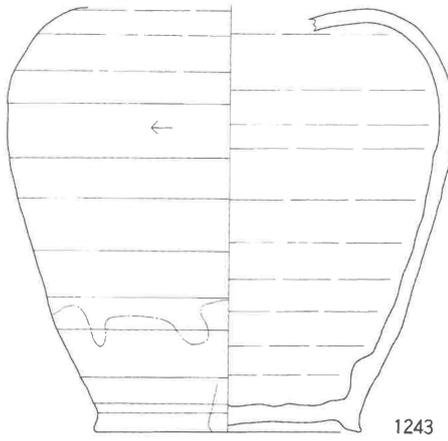
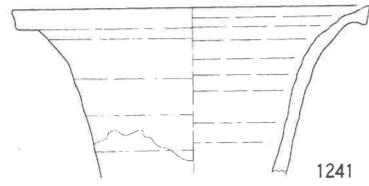
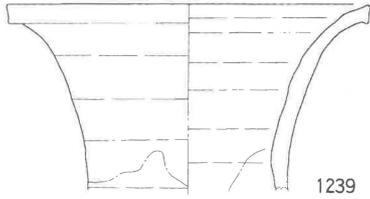
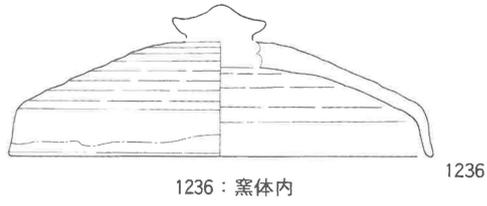
平瓶（1268）は胴部最大径のところで明瞭に折れ、下半部が直線的に立ち上がるもので、口縁部は直立している。法量の点では胴部最大径が206mmあり、大型のものである。

浄瓶（1269・1270）は口縁部付近の破片が2点出土しているが小破片であるので詳細は不明である。口縁端部は拡張され外傾する面を持っている。

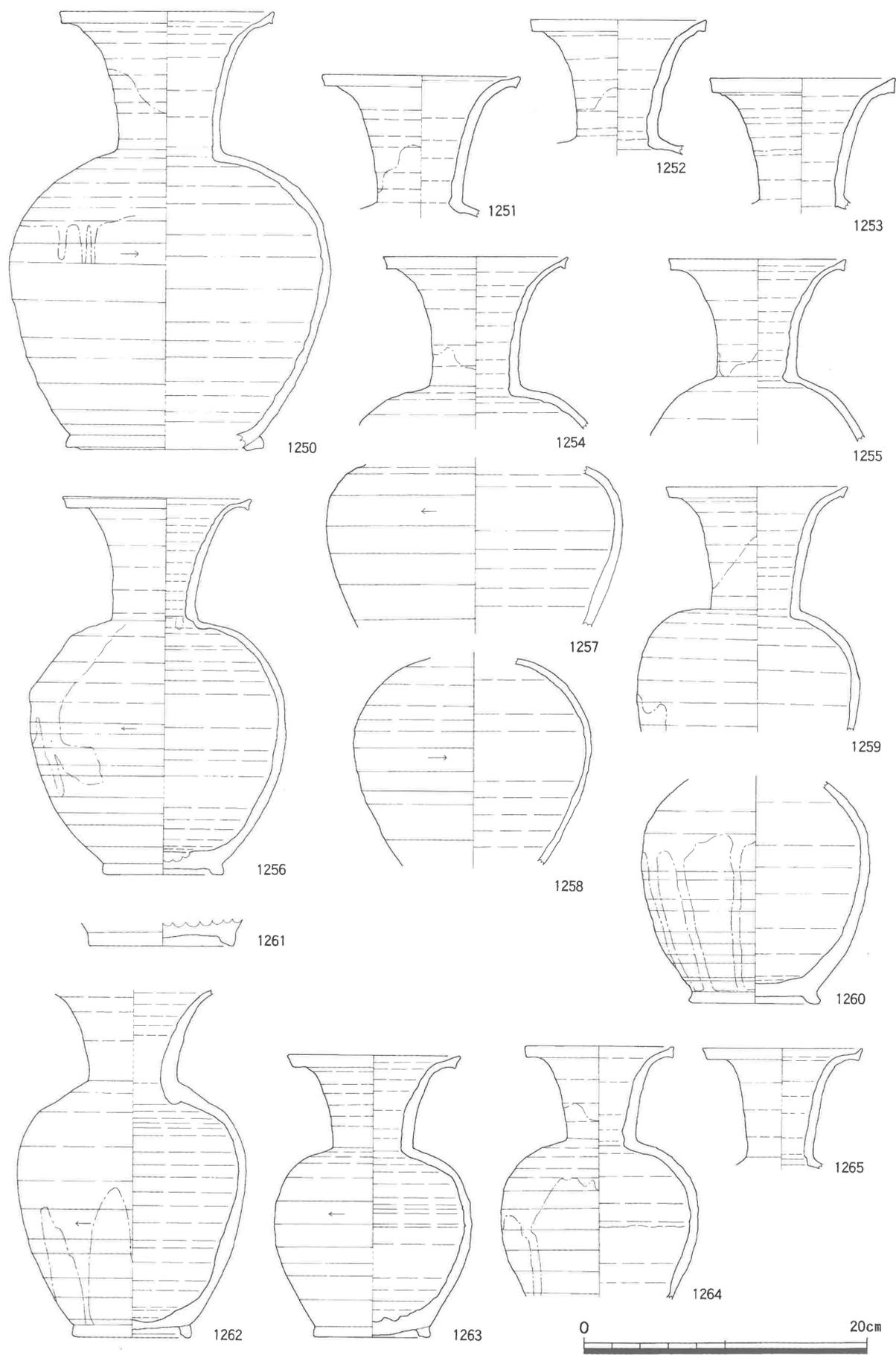
B. 須恵器（第78図）

坏類は坏、盤類は有台盤、鉢類は深鉢、陶臼類は陶臼、甕類は甕が出土している（第2表）。

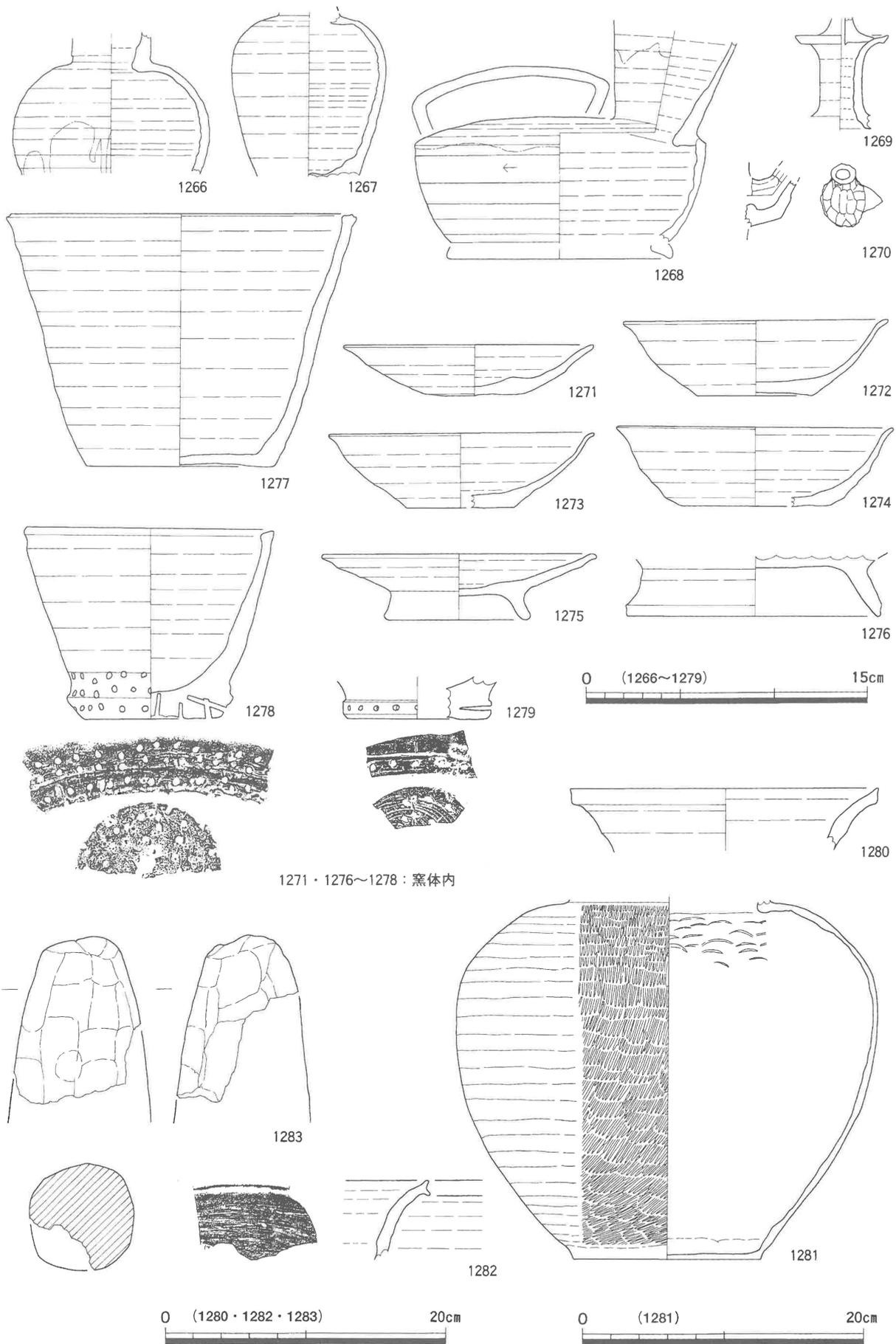
坏類 坏（1271～1274）は、灰釉陶器窯出現以前の須恵器窯で生産されていた無高台の坏の系譜を引くと考えられるものである。器形は平底で、体部がわずかに内湾しながらほぼ直線的に開いている。調整は底部が糸切り未調整で、体部は内外面ともにロクロ目を明瞭に残しており、内面には灰釉陶器のようなコテは使用されていない。法量は口径が130～140mm程度、高さが30～40mm程度である。



第76図 6号窯出土遺物-6 (1/3・1/4)



第77图 6号窯出土遺物一7 (1/4)



第78図 6号窯出土遺物一8 (1/3 · 1/4 · 1/8)

盤類 有台盤（1275）は1点が出土している。坏部はほぼ直線的に開くがかなり浅い。口縁端部はそのまま丸く終わる。高台は高く外側に開き端部は丸い。有台盤は灰釉陶器出現以前の須恵器窯で生産されていた盤の系譜を引くものである。法量は坏部の口径が141mm、脚部径が76mm、高さが35mmである。

鉢類 深鉢（1277）はバケツ形をしたものであり、1点のみ出土している。体部は直線的にのび、口縁端部には面を持つ。内外面の調整はナデで器形・調整とも陶臼と類似している。又、焼台に転用されたもので内外面に降灰が著しいが、本来は無釉と考えられるところから須恵器とした。

陶臼類 陶臼（1278・1279）は体部が直線的に開き、口縁端部に面を持つものである。底部は厚く、糸切り未調整で棒状工具による刺突痕がある。内外面にはロクロ目が残り、底部は糸切り未調整である。法量は口径が177mm、高さが137mmであり、小型のものである。

甕類 甕（1280～1282）は口縁部が緩やかに立ち上がり、口縁端部近くで外反している。口縁端部は面を持ち、拡張されているものがある。全形が判明するものはないが、胴部が推定できるものがあり、胴部高が340mm、胴部最大径が600mm、底径265mmである。底部は平底で無調整である。調整は胴部外面が平行叩き、内面は無文アテ具のちナデである。口縁部調整は内外面ともナデである。

土製品類 窯道具（1283）は手捏ねで棒状のものである。用途不明であり、とりあえず窯道具の可能性を考えたが、まったく異なった用途のものである可能性も十分考えられる。